
真・恋姫＋無双～花一刀伝～

kurei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜花一刀伝〜

【Nコード】

N8244N

【作者名】

kurei

【あらすじ】

……夢を見ていた。いつも見る夢。儂く悲しい、恋の夢。

その夢から始まるは、霸王の新たな物語。

前世の魂を胸に秘め、かつて失ったものを取り戻すために一刀は今一度大陸の大地を駆け抜ける。

ここに今、三国志の新たな外史が扉を開く！

諸注意！！（前書き）

SS投稿掲示板『Arcadia』に投稿していた作品をこちらにも投稿する事と相成りました。半年ほど前から更新を停止している作品ではありますが、暇を作つてばちばち書いていきたく思います。

遊戯王5D's - 青眼の白龍の継承者 - と同時執筆の関係上、新規更新分は幾分か遅れるかと思われませんが、そこは何卒ご容赦ください。

諸注意！！

諸注意！

この作品は一刀の前世が項羽であるという基本設定の元成り立っています。

前世帰りを起こし始めた一刀は原作と違い、一騎当千の武を持っておりす。

すなわち一刀無双です。

なお、性格も原作一刀とは若干の違いがありますので悪しからず。そんな一刀無双が我慢ならんという方にはオススメできません。

なお、作者は大本の原作である「項羽と劉邦」や「三国志演義」は未読であります。

漫画「蒼天航路」、宝塚歌劇「虞美人」やスーパー歌舞伎「新・三国志II・孔明篇」、Base sonの「恋姫十無双」&「真・恋姫十無双」およびSEGAの「三国志大戦」くらいでしか知らない俄者なので、独自の設定及び解釈、正史に対しての大きな矛盾点が多々あるかと思いますが何卒ご容赦ください。

あと一刀が原作どおりハーレムを築くのか、項羽として虞美人に純愛を貫くのかは現時点では秘密とさせていただきます。

これからの展開をお待ちください。

花一刀軍パラメータ（三国志大戦風）（前書き）

注意！

これは一刀一行の能力を三国志大戦の様にパラメータ化したものです。

作者が好き勝手に弄った能力ですので一刀はモチロン、お供の周倉たちまでもがコワレ能力となっております。

「これはないだろう」、「強すぎる」、「コワレすぎている」などの感想もあるうかと思いますが、それは私自身も重々承知しています。

そんなのでも許せる、Don't恋……違った。どんと来いと思える方のみお読みください。

花一刀軍パラメータ(三国志大戦風)

《武将》

武将名：北郷一刀・項羽・『霸王転生』

コスト：3・0

属性：天

兵種：騎兵

能力：武力10+ 知力7

特技：勇猛 魅力 暴乱

計略：『拔山蓋世』 必要士気6

自身の武力が大幅に上がる。さらに移動速度と突撃ダメージが上がる。

(武力+15、移動速度3倍、突撃ダメージ+30、効果時間7.5c)

武将名：周倉 - 兄 - 『花一刀軍三羽鳥』

コスト：1・5

属性：地

兵種：騎兵

能力：武力6 知力4

特技：勇猛 暴乱

計略：『飛燕一閃』 必要士気5

範囲内の敵1部隊に衝撃によるダメージをあたえる。
ダメージはお互いの武力で上下する。

武将名：裴元紹 - 禿 - 『花一刀軍三羽鳥』

コスト：1・0

属性：地

兵種：弓兵

能力：武力3 知力1

特技：復活 暴乱

計略：『花軍の乱』 必要士気3

【暴乱】（戦場にいる、この特技を持つ味方全てに効果がある）

武力が上がる。ただし士気が上がらなくなる。（武力+3、

効果時間4c）

武将名：程遠志 - 出来 - 『花一刀軍三羽鳥』

コスト：1・0

属性：地

兵種：槍兵

能力：武力3 知力1

特技：復活 暴乱

計略：『花軍の乱』 必要士気3

【暴乱】（戦場にいる、この特技を持つ味方全てに効果がある）

武力が上がる。ただし士気が上がらなくなる。（武力+3、

効果時間4c）

武将名：華佗 - 舞人凱 - 『嵐を呼ぶ医者王』

コスト：1・5

属性：人

兵種：歩兵

能力：武力6 知力8

特技：勇猛 覚醒

計略：『賦相成・五斗米道』 必要士気6

【旋略】（カードの方向で効果が切り替わる）

「」：範囲内の味方の武力が上がり、敵の計略の対象にならなくなる。

「」：範囲内の味方の兵力を回復し、敵から受けている計略の効果を消す。

この効果は兵力の上限を超えて回復する。

（：武力+5、効果時間8c（覚醒後）：知力9で10割回復、上限は200%）

《軍師》

軍師名：早坂章仁

兵略：『兵力増援』

属性：天

上昇速度：早

効果時間：一瞬

効果：味方の兵力を回復する。

陣略：『紅茶花伝』

属性：地

上昇速度：遅

効果時間：長

効果：味方の兵力を徐々に回復し、武力によるダメージを軽減する。

???

巻話

夢を見ていた。

いつも見る夢。儂く、悲しい……恋の夢。

人目見た時から心奪われ、ひと時も離れたくないと思い、戦地にまで連れて行った最愛の女性。彼女は俺を支え、俺は彼女と共に生きる未来を手にするべく戦った。

戦って、戦って、戦い抜いた。その先に穏やかな世界があると信じて。

しかしそんな俺たちの元に、とうとう別離の時は来る。

義兄弟の契りを結んだ友との死闘の果て、城を包囲する敵軍から聞こえてきた故郷の歌に、彼女は俺の足枷とならないために自ら命を絶ったのだ。

そんな自分の血に濡れた彼女を抱いた俺は……俺は……。

「……ピー！ かずピー！」

知った声が俺の名を呼んだことで、俺はまどろみから醒めていく。何度見ても彼女の死様には胸を引き裂かれる。

起こすならもう少し早く起こしてくれればいいものを。そうすれば彼女の死に様を見ないですんだのに……。

心の中でそう悪態をつきながら、俺は半目になり横たえていた体を起こす。

ここは聖フランチェスカ学園。純粹培養のお嬢様を育てるために

設立された元女子校だ。しかし昨今大きな問題となっている少子化の影響で共学化。俺という男にも今年から門戸が開かれることになったのだ。

「なんやグツスリ寝とつたなあ。かずピー」

そしてそれは俺の目の前に立つ眼鏡の男、及川佑も同様だ。

九州出身だというのに、たった一回の観光で関西を訪れただけで、好んで関西弁を使うという変人だ。真に遺憾ながら俺の友人である。

「確かに熟睡といった感じだったな。夜ちゃんと眠れてるのか？」

及川の隣から聞こえた声に視線をやってみると、そこには俺のもう一人の友人、早坂章仁が心配そうに俺を見ていた。

そんな章仁に大丈夫だと伝えようとした時、いきなり及川が大声を上げた。

「寝不足ねえ……ハッ！ まさかかずピー、夜自分の部屋に女の子連れ込んでアンナことやコンナことを！」

「お前と一緒にするな及川。第一、プレハブ小屋のような男子寮でそんなことをしてみる。両隣の俺たちに丸聞こえじゃないか」

「なんや、あきちゃん付き合い悪いなあ。たまにはワシのジョークに付き合ってくれてもええやん」

及川がボケて俺か章仁がツッコミをいれる。
いつもの光景、いつものやり取り。

しかし、俺の臉に焼きついた彼女の今際に浮かべた笑顔が離れてくれない。

いや、それだけではない。四方から故郷の歌が紡がれる中、彼女に歌を送って共に舞った光景も、彼女が俺の持っていた二振りの剣

の片方で自ら喉を切り裂く瞬間も、鮮明に焼きついて離れない。

所詮は夢だ。俺は自分にそう言い聞かせ、その光景を振り払う。そして二人の会話に何事もないように参加する。

「まったく。そんなのだからお前には彼女ができないんだよ及川」
「それを言うならばピーもやないか。ワシは少なくとも女の子と手を繋いだことはある！」

高らかにそう言うが、コイツがそこから先に行った話など終ぞ聞いたことがない。その事を章仁が鋭く指摘する。

「そこから先に進展できなくせによく言う」

「くっ！ リア充のあきちゃんめ……可愛い妹に幼馴染、どこのエロゲー主人公や！！」

「羽末や結衣佳とはそんなのじゃねーよ！ お前だって莉流のヤツといいとこまでいったんじゃないのか？」

男女の事でワイワイと賑やかに談義する俺たち。

話を続ける中、気がついてみれば俺の脇にはもう彼女の姿は映っていないかった。

俺がその事に心の中で安堵の息をつく中、分が悪くなったのか及川は苦し紛れに話題を変えようとする。

「しかし、かずピーはホンマにここが好きやなあ。虞美人草、好きなんか？」

及川が手に触れた花　中庭の一角、俺たちの座る場所に所狭しと植えられた赤い花に、俺も手を触れる。

不意にまた彼女の笑顔が甦ってきた。

「好きと言つか、何ていうか……そこにいると安心するというか、満たされるというか」

何故か俺は物心ついた時から、この赤い花が好きだった。

どうして好きになったのか、それは恐らくあの夢と関係しているのだろう。夢に出てくる彼女と、この赤い花が重なるのである。

そして、この花を背に寝転ぶと誰かが抱きしめてくれるような感覚に陥るのだ。そう。まるで夢に出てくる彼女の魂がそこに宿っているかのよう……。

その事を告げた俺に対して及川は思い切り後ずさった。

「……うっわぁ、かずピー。それはちょっとキショイで。流石のワシでも引くわ」

及川の発言にムツとなった俺は僅かな動作と時間で及川との距離を詰めると、その不屈き者のでこに痛烈なデコピンをかましてやった。

「のおおおおお!!」

でこを抑えて転げまわる及川の姿に俺は多少の溜飲を下げた。

そんな及川の姿に章仁は一つため息をつく。

「今のはお前が悪いぞ及川。花を見て癒されるくらいなら誰にでもあることだろうに」

「……それにしても体罰反対やで。剣を取らしたら女子最強の不動先輩にも容易く勝つてまうバケモノのかずピーなんやから、一般ピールの俺には手加減してくれればいいものを」

それから未だにグチグチと言葉を漏らす及川に、俺はとびきりの

笑顔を見せると右手の中指を親指にかけた。

「なんだ、一発では足りなかったのか。なら、そう言ってくれればいいものを。何、遠慮するな。どこに穴が開くまでやってやる」

「じよ、冗談や！ あっははは！ いややなあ、かずピー。ちよっとしたお茶目やないか」

俺の構えた右手にしどろもどろになる及川の姿に俺と章仁は大きな笑い声を上げたのであった。

ひとしきり笑った俺たちであったが、不意に章仁が立ち上がる。

「さてと。話はここまでにして、そろそろ行こうぜ」

「この言葉に俺は首を捻った俺だが、昨日二人と約束したことを思い出した。」

「ああ、古代中国展の提出課題か」

先週、聖フランチェスカ学園内にできた古代中国の博物館の感想レポートが宿題として出ていたのである。それを片付けるために、今日は三人で博物館に行こうという話しだったはずだ。

「お！ 寝ぼけて忘れてるかと思ったけど、大丈夫やったようやな。ほな、いこか」

いつものお気楽調子で立ち上がって先頭を歩く及川と、それに
ついていく章仁の姿に俺も立ち上がるうとした時。

『様』

不意に女性の声が聞こえた。

そのどこからともなく聞こえた声に、俺は辺りを見回す。

しかし、中庭には女子生徒の姿はない。

まさか夢だけでなく女性の幻聴まで聞こえるようになるとは、こ
れでは及川に馬鹿にされても文句は言えないな。

俺は頭を振りつつ、いつもの習慣通り赤い虞美人草を一つ手折っ
てポケットに入れると二人のあとを追いかけたのであった。

式話

レンガで舗装された道を男三人で歩く中、不意に及川が俺の方を振り返ってきた。

「しかしなあ、かずピー。真面目な話し、なんで自分彼女作らんのや？ かずピー、女子にモテまくりやん。より取り見取りやないか」
「確かに。女子の間では不動先輩に次いで二番人気だからな。告白してきた娘も多いだろう？」

及川と章仁の言葉通り、確かに俺はモテている。俺に愛を告白してくれた女子生徒もけっこうな数がいた。そんな俺が彼女の一人も作らないのが彼等には不思議でならないのだろう。

俺を挟むようして歩きながら俺の返答を待つ二人に、正直に答えちゃった。

「ああ。皆いい娘だったけど全員断ったよ」

この俺の返答に、及川は額に手をあてると天を仰ぎ見た。

「かあああつ！ なんつう勿体ないことを！ 一人くらい彼女にしていると思つた娘はおらんかったんか？」

及川のこの言葉に俺は今一度告白してきた娘たちを思い返してみ

る。
綺麗な娘もいた。可愛い娘もいた。料理が得意な娘もいた。一緒に剣道部で練習していた娘もいた。でも……………。

「でも何か違うんだ。確かに彼女達の気持ちは嬉しいし、俺も応え

たいとは思った。だけど……ごめん、上手く言葉に出来ない」

告白してきた彼女達の思いを受け取ろうとした時、不意に夢の女性の顔が思い浮かぶのだ。

そして俺の心が高らかに叫びを上げる。彼女は違つと あの夢く美しい彼女ではないと、そう訴えるのだ。

全く持って馬鹿な話だと俺も思う。

夢に出てくる女性など所詮は夢だ。現実の女性と比べるまでもない者のはずだ。

しかし、脳裏にフラッシュバックする彼女の可憐な笑顔、綺麗な体、優雅な舞、凜と響く声、気高き心……一瞬浮かんだそれを幻視すれば、次の瞬間には告白してきた彼女達に首を横に振っているのだ。

ポケットにいた虞美人草を服の上から撫でながら、そう答えた俺の目の前に件の博物館が見えてきた。

「さて、この話はここまでだ。さっさと課題を片付けよう」

「あ、ちよっ！？ かずピーー！！」

俺は脳裏に移る彼女の幻影を振り払うかのように、早足で博物館に足を踏み入れたのであった。

俺の得も知れない雰囲気を感じてくれたのか、博物館に入ってから二人は女性関係の話を楽しんでくれた。楽しんでくれたが。

「おっ、この壺にはメンマが入っていたに違いない！」

「驚いたな。千八百年も前にティーカップがあつたなんて……シルクロードを通ってきたのか……うお!? 当時の茶葉まで残ってる!」

いろんな意味で常に絶好調な及川と、紅茶通の章仁。それぞれが展示された昔の日用品を眺めては声を上げていく。

俺はそんな調子の二人に、静かにため息をつく。及川はともかく、章仁まで絶好調とは……。

「二人とも 特に及川、少しは静かにしろ。警備員に睨まれてるぞ」

ありがたくも発してやった俺の忠告に、及川は本当につまらなさそうな表情で俺を見てくる。

「なんやかずピー、つまらんなあ。そこにある歴史的遺産に思いを馳せるのは男の浪漫やないか。すこしはあきちゃんを見習ってみい。目をキラキラさせてるやないか」

「章仁のはまだ趣味の延長上つてことで許せるんだよ。少なくとも展示された古代の壺の中に入っていたのがメンマというのは浪漫ではない」

まったく。どこをどうすればそんなインスピレーションが浮かぶのだろうか。一度、こいつの頭の中を覗いて見たい。

「はあ……ホンマにかずピーはつまらんなあ」

「ため息をつきたいのは俺のほうだ。ほら章仁もそろそろ戻って来い」

馬鹿な及川をあしらいつつ、未だに欲しいおもちゃを見つめるよ

うな視線で昔の茶器や茶葉を眺める章仁をコツチに連れ戻す。

「……ああ、すまん。あまりの感動に打ち震えてた」

「はっはは。ほんじゃまあ、あきちゃんも帰ってきたことやし、お堅いかずピー向けの方についてみよか」

そういつて及川は次に繋がる通路を指差した。

及川が指差した先、そこに展示されていたのは物々しい剣や楯、鎧兜などの戦道具であった。

先ほどの日用品展よりも広いスペースが確保された武具展の展示品の数々に俺は思わず感嘆の息を漏らしてしまう。

「おお、これは……すごいな」

「どうや。剣道やってるかずピーは、こついつのに惹かれるんとちやうつ。」

「まあな。やっぱり男なら一度はそう言う世界に憧れるものだろう」

「あゝ、否定はせえへんけどな。でもやっぱりワシは血生臭い戦国の世界よりもウハウハなハーレム世界のほうが断然ええ！」

「「そう思つのはお前だけだ！」」

俺と章仁の二人で不埒なことを口走った及川に天誅を加えて静かにさせると、順路に沿って展示された武器や防具を眺めていく。

かつての武将達が手に取ったであろう武器に思いを馳せる俺の目に、とある剣が目映った。他の武器同様、長い年月により風化し錆び付いた二振りの剣。

しかし、それを見た時俺の胸の鼓動は一際高く脈打った。

「ッ!？」

それは夢の中の俺が腰に差し、共に戦場を駆け抜けた頼もしき剣。彼女との最後の夜、彼女がその喉を引き裂いた悲しき剣。

劣化しているが、身間違えようがない。これは……この剣は

俺が得も知れぬ感覚に囚われる中、及川が気楽な調子で俺の肩を叩くと、剣と共に展示された資料を読み進めていく。

「おッ! かずピーもお気に入り発見か。どれどれ……雌雄一対之剣……ほお。楚の霸王、項羽の剣かいな。これまた大物にほれ込んだなもんやな、かずピー」

しかし、もう俺には及川の声など既に聞こえていなかった。

俺の目に映るのは二振りの朽ち果てた剣。

そう。これは 俺の剣だ。

それを認識した時、俺の耳に再び中庭で聞こえた女性の声が響き渡る。

『 様、愛しております。ずっと……例え、肉体が朽ち果て魂魄のみになろうとも』

懐かしき声。

ああ、俺の愛おしい人。

そう、彼女の名前は 。

「虞よ………」

彼女の名前を口にした次の瞬間、俺の視界は眩しいばかりの光に塗りつぶされていた。

式話（後書き）

New!! パラメータに北郷一刀を追加

参話

乾いた風が頬を撫でる感触と同時に、俺の視界から光の本流が消え去っていく。

俺の眸に移る光景に色彩が戻っていくにつれて、俺の立っている場所が鮮明に眸に映し出されていた。

「嘘……だろう……」

俺の目に映っていたのは小奇麗にされた博物館ではなかった。

一面に広がる荒野。所々に日本では見ることの出来ない、縦に細長く聳える山も見える。それどころか側にいたはずの及川と章仁の姿も見えない。

俺に一体何が起こったのだろうか。

博物館に展示されていた項羽の剣を見て、恥ずかしくもそれを俺のだと認識したところまでは覚えている。それから、それから。

しかしそこから先、何があったのか思い出すことが出来ない。

確か俺は、あの時誰かの名前を呼んだような……ダメだ。

記憶の海を探り、その事を思い出そうとすると酒に酔わされたかのような不思議な酩酊感に陥り思考することができなくなる。

「本当にどうにかしちまったのか……俺」

不意にそこで俺の手に何かが握られている感触があることに気がついた。

そこに目を落としてみると、両手に握られていたのは博物館に展示されていた項羽の剣。雌雄一対之剣だった。

しかも、年月を経て朽ち果てていた刀身は時間を巻き戻したかのようにかつての白銀の輝きを放ち、俺の手に不思議なほどに馴染んでいる。

不思議に両の手にある雌雄一対之剣を眺めていた俺だが、不意にその剣を久方ぶりに振ってみたくなつた。

久方ぶりに……だと。

いや、それはおかしい。俺は生まれてから十七年間真剣を振るつたことなどないはずだ。それなのに博物館に展示されていた過去の偉人、霸王とまで言われた項羽の剣に愛着にも似た懐かしさを覚えるなど……………。

頭ではそう思っていた俺であつたが、その意に反して体がかつての動きを再現するかのように勝手に動いていく。

右の剣を上振り払い、左の剣を横へと振りぬく。

横へと振りぬいた遠心力を利用して円を描きながら、先ほど切り上げた剣を振り下ろす。

風が切り裂く音が心地よく耳を打ち、体の中の血が躍動する。

もっと、もっとだ！

いつしか先ほどまで頭の中に渦巻いていた疑問は消え去り、ただただ剣を振るうことに夢中になる。

もっと鋭く！ もっと速く！ かつての俺と同じ究極にして至高の剣閃を！！

その意志の元、速度を更に増した俺の剣舞は風を巻き起こし、地面の砂を巻き上げる。

それは局地的な竜巻となり、天高く昇っていく。

俺自身が巻き起こした竜巻の中心で、俺は交差させた二振りの剣を翼を広げるように外側に振った。

シヤラアアンツッ！！ という凜とした刀身の響きと共に、中から引き裂かれた竜巻が消えうせる。

翼を広げた鳥のように両手を広げたままで残心を残した俺は、いつもの様に順手から逆手に剣を持ち帰ると、これまたいつの間にかベルトに差されていた剣の鞘に雌雄一対之剣を収めた。

不思議な高揚感が胸を満たした直後、俺は再び湧き上がった矛盾に顔をしかめた。

「何で俺がこんなことをできる……」

剣を振るう間は忘れていた事実には俺は、そう眩きを漏らした。

あんな立派な剣舞、今の今まで舞ったことがない。いや、それどころか先ほど放った一閃一閃は俺の人生の中で最高の剣閃だった。

さらに剣が腕の延長のようにも思えるほどの一体感。俺の祖父のような達人にのみ許される境地の業を、俺自身が軽くやってのけたなど未だに信じることが出来ない。

俺自身の事なのに、自分の事がわからなくなってくる。本当に俺はどうにかしてしまっただろうか。

そんな混乱の極みに中であつた俺は、近づく足音に気がつかなくつた。

「よう、兄ちゃん。いい物差してるじゃねえか」

不意に投げかけられた声に、俺はその声のした方へ振り返った。そこにいたのは三人の男。

下卑た笑いを浮かべ、黄巾を頭に巻いた、いかにも荒くれ者といった風情の男達であつた。

先に声をかけた男の弟分なのだろう。平均身長を下回る小柄な男

と、その男とは正反対に縦にも横にも大きな男が俺の服を指差す。

「それに見てくだせえ、アニキ。服もキラキラ光ってますぜ。こんな服見たことねえ」

「さ、綺麗なんだな」

男達の放つ今まで見たこともない酷く醜い悪意に、俺は片足を半歩引くと半身になって身構える。

ここがどこなのかを聞きたいところであつたが、いかにも物盗り然とした男達が本当の事を教えてくれるとは思えない。

ここは最悪の事態を 殺されるかもしれないということを想定すべきだ。

こつこつという事態は初めてなのに、何故か不思議に臨戦態勢が取れたことに内心で驚愕しながらも気は緩めない。

「竜巻が見えたので何が起きたかと来てみれば、これはついてるぜ。豪族のお坊ちやまがお供もつけずにいるんだからなあ」

どうやら俺の身なりから、相当の金持ちだということに当たりをつけたのだろう。見逃してはくれなさそうだ。

「どうしますアニキ？」

「決まってるだろうが。捕まえて引ん剥くんだよ。その後は人質にして身代金の要求だ」

「さっすがアニキっすー！」

「さ、さすがなんだな」

話を終えた男達は腰に差してあつた剣を引き抜くと、まるで俺を怯えさせようとするかのように、その剣を二度三度振るつた。

「とまあ、怪我したくなけりや大人しくしな。なに、大切な金づるだ。丁重にもてなさせて貰うぜ」

刃毀れした汚らしい剣を手で遊ぶリーダー格の男に対して、俺は両の腰に差した雌雄一対之剣を抜くことで応えた。

今俺自身に起こっていることや、今いる場所がどこなのか皆目見当もつかない。

しかし二つ確かなことがある。

一つはここが日本ではないということ。それどころか現代であるのかさえ怪しい。

それはこの見覚えのない土地を見てもそうだし、男達の身なりにしてもそうだ。ゲリラなり非合法の武装組織であるならば、剣なんかよりも銃を装備しているはず。

しかも、男達が頭に巻いた黄巾。

まさかと思う。しかし、この俺の予想は当たることとなった。

「おっ、やるのか兄ちゃん。泣く子も黙る周倉様にたてつこうってえんなら怪我だけじゃすまないぜ」

雌雄一対之剣を引き抜いた俺に対して、獰猛な笑みを見せながら発せられた男の言葉に僅かながらの衝撃を受けた。

やはり黄巾党か！

しかも周倉といえは三国志演義で関羽の部下になり、かの赤兎馬と同等の速度で走ったといわれる武将だ。確か、関羽に仕える前は黄巾に参加していた賊徒でもある。

ならば、導き出される答えは一つ。ここは古代中国、俺がいた時代から千八百年後の後漢時代だ。

しかし、今はその事を長々と考えている暇はない。

現在目の前にある確かな事実のもう片方　それは命の危機だ。

「へっ！　ぶるってんのか、お坊ちゃん。でもお前は剣を抜いたんだ、無事に済むと思うなよ！！」

そう言葉を吐いた周倉は僅か数歩で俺との距離を詰めると、その手に持った剣を振り下ろす。

迷いのない、命を刈り取るための必殺の一撃。

つい一時間前の俺ならば周倉の放つ殺気に吞まれて対処することすら出来なかつたであろう。

しかし俺はいきなり命のやり取りを強要されたというのに何の気概もなく、羽虫を振り払うように右手の剣を振るつた。

甲高い音が響き渡り、周倉の剣が半ばから断たれた。自分の剣を断たれた周倉はその表情を驚愕に染める。

驚愕に動きを止めた周倉はまさに死に体だ。俺はそんな周倉の鳩尾に左の剣の柄頭を打ちつけた。

「ぐおおおッ！？」

周倉が腹を押さえ膝をつく中、俺は右手の剣を振り上げた。

「死ね、下郎」

俺の言葉とは思えない冷たい声が俺の口から漏れ出すと、そのまま剣を。

「ッ！？」

そこで俺はハッとなると、剣を振り上げたままの姿勢で固まった。

俺は今何をしようとしていた？

俺の目の前には腹を押さえ跪く周倉の首を…… 勿ねようとしたのだ。

ただ無慈悲に…… 命の重さも考えずに……。

今までの俺ならばありえなかったことだ。いや、ありえないことならここに飛ばされてきた事をはじめ、何故か剣が使えたりと枚挙に暇がない。

しかし、しかしだ。

命の価値は地球より重いという価値観を持って生きてきた俺自身が正当防衛とはいえ、まるで煩い羽虫を殺すかのように人を殺しそうになるなどは。

だが、それでも俺の中に罪悪感を感じない。

命は尊い、そう思いながらも人を殺すのに何の気概も湧かないのだ。

余りに変わってしまった俺自身の価値観に衝撃を受ける中、今までこの経緯を見守っていた弟分の二人が剣を構えた。

「あ、アニキ〜！」

「お前、よくもアニキを！」

そして二人がこちらに駆け寄ろうと下半身に力を入れた瞬間、俺の前に蹲る周倉が叫んだ。

「やめろおい！！！」

いきなり発せられた大声に、弟分二人はおるか俺自身も周倉に視線をやった。

未だに打ち付けられた腹の痛みに顔をしかめる周倉は、それでも顔をまっすぐ上げて弟分二人を睨みつけた。

「俺だって賊に身を落としたが、それでも剣士の端くれ。引き際つてヤツも心得てるつもりだ。お前達は俺の顔に泥を塗るつもりか？
あああ！？」

リーダー格の周倉にこう言われては従うしかないだろう。弟分の二人は手に持った剣を力なく地面に落とす。

そんな彼等の姿に一つ頷いた周倉は今度は俺の方を仰ぎ見た。

「弟分が失礼したな、兄ちゃん。失礼ついでに出来ればあいつらは見逃してやってくれないか？ 虫のいい話だが俺の首だけで勘弁してくれ。頼む、この通りだ」

地面に頭をこすりつける周倉の姿に、俺はしばらく立ち尽くすと両手の剣を順手から逆手に持ち替え、鞘へと収めた。

この俺の行動に頭を上げた周倉は、不思議なものを見るかのような視線で俺を見上げてくる。

「彼等だけでなく、あんたも許そう。だけど、その代わりに盗賊稼業から足を洗ってくれ」

「あ、ああ！ もちろんだ」

打てば響くといった感じで返事を返した周倉の元に、弟分二人が駆け寄ってくる。

「アニキ～！」

「よかつたんだなあ！」

弟分二人は跪く周倉に抱きつくくと、涙を流し始めた。どうやら悪いヤツではあったが人望はあったらしい。

こういう場面を見れたのなら殺さずにすんでよかったと、俺は息をついた。

しかし、俺の中の歪に変わった命に対する価値観はどういうことなのだろうか。

先ほどは余りの事に内心では衝撃を受けていたが、今ではそんなことはない。極々自然な事として受け入れている自分に全く違和感を感じない。

俺は本格的におかしくなってしまったのであろうか？

そう思案に耽りながら何気なくポケットに手をつっ込んだ時、手に触れるものがあることに気がついた。

手に触れたそれをそつと外へ取り出した。

虞美人草だ。

博物館に向かう前、中庭で一本だけ手折った俺の一番好きな花。

俺は数秒その赤い花を眺めると、不意に寂しさがこみ上げてきた。異国の地で、違う時間で、俺ただ一人が異邦人としてここにいるということに耐えがたき寂しさを覚えたのである。

だからであろう。

俺はその寂しさを紛らわすために、赤い虞美人草を自分の髪の毛に差した。

すると、いつもいっぱいに敷き詰められた虞美人草の花園に寝そべる時と同じ安心感が俺を包み込んでくれる。

そんな俺の心を癒してくれる頭に咲く虞美人草に、そつと手を添えたのであった。

肆話

無人の荒野。乾いた風が頬を打つ中、俺は歩を進めていた。いや、無尽の野を行くのは俺だけではない。

「じゃあ旦那は、今俺たちのいる時代から千八百年も後の時代から来たって訳ですかい」

「今の漢王朝が出来て四百年だから、それよりもずっと長い時間って事ですかあ。すごいっすね」

「な、なんか想像つかないんだな」

つい数時間前に俺を襲ってきた周倉を始めとする三人が俺につき従いついて来ていたのである。

延々と歩くしかない行程の無興を慰めるために、俺は部下となってくれた彼等に俺がどこから来たのかを話してやっていたのだ。

俺が遙か未来から来たと言う話しに目を白黒させながらも、彼等は俺の言葉を少しも疑っている様子はない。

「想像はつかなくて当然だ。俺だって、三十世紀の世界を想像してみろって言われても無理だからな。しかし信じるのか？ こんな与太話」

俺自身が事実と受け止めていることでも、この時代に生きる人にとっては聞くにも値しない絵空事だ。

少なくとも俺ならば、そんな話をした人間を見たならば関わりを持つまいと無視するか、精神化の病院にいく事を薦めるかだ。もつとも、この時代には精神科病棟なんぞあるはずもないが……………。

そんな俺の問いかけに、周倉は得意げに親指で鼻の頭を払った。

「舐めて貰っちゃ困りますぞ旦那。俺たちだって今まで日陰者の世界で生きてきたんでさあ。騙し騙されが常套な世界じゃ、相手の腹の中ぐらい覗けなけりゃ生きていけやせん。よっぽどの詐欺師が相手でない限り、嘘を言ってるのか本当の事を言ってるのかを見分けるくらい朝飯前でさあ」

「そついうものなのか？」

周倉の言葉にいまいち納得のいかない俺に、弟分二人は周倉の言葉に相槌を打つ。

「アニキの言うとおりですぞ旦那」

「んだな」

思っていたよりも過酷な裏の世界の事情に、俺は深く頷いた。

「裏の世界ってヤツも中々に厳しいんだな」

「当然でさあ。所詮は表の世界で生きていけない爪弾き者共の掃き溜めですからね」

「オイラたちだってこうやって旦那に仕えなけりゃ、死ぬまでそこで燻っていたでしょうからねえ」

「心の広い旦那に感謝なんだな」

数時間前まで命のやり取りをやっていたなどと思えないほど、俺たちは和気藹々と会話しながら先へ先へと歩を進めていく。

しかし、何故そんな命のやり取りをしていた彼等が俺の部下となり、つき従っているのか？

その理由は俺が虞美人草を髪に突き刺したところまで遡る。

髪に差した虞美人草に心癒されていた俺は、どうしても確認しなければならぬことを思い出した。

その確認を取るために俺は未だ蹲る周倉とその弟分二人に視線を向け、問いかける。

「二つ聞きたいことがある。ここはどこだ？ それと今の皇帝の名前は？」

この俺の問いに、もう一人の弟分と共に蹲る周倉に肩を貸して助け起こしていた弟分の小さいほうが答えてくれた。

「……おかしな事を聞く人つすねえ。ここは幽州遼西郡、今の皇帝は劉宏つてお人つすよ」

……確定だ。

周倉の名前でまさかと思ったが、今の皇帝が劉宏 靈帝であるならば、ここは本当に三国時代直前の後漢時代ということだ。

となると、いよいよ持って俺は過去にタイムスリップしてしまっただということか。まったく、いつたいてこの漫画やアニメだということだ、この展開は。

心の中でそう毒づいていた俺は、とにかくこれからどうするかを考えた。

とりあえず俺がすべきことは現代への帰還方法の模索だ。

しかし、これには全く持って見当がつかない。

唯一の手がかりといえば、俺と一緒にこの世界にやってきた雌雄一対之剣だが剣舞を舞っても実戦で振るっても何も起こらなかつたのを見ると、時を飛んだ原因は雌雄一対之剣にはないと見るべきか。それとも何なしらの条件下でのみ、発生するものなのか……………。

とにかく考えても全く栓のないことなので、この件は一旦保留にする。

ならば、その目的を達成するために必要なものを考えてくることにすると、答えはいったって単純にして明快だ。

人が生きていく上で必要な三要素、衣食住である。

まずこれを確保しないことには何も始まらない。問題はそれを確保するための金銭であるが、それには実のところ当てはある。

後は無事に街まで行き着くことが出来るのだが、こうやって襲い掛かってきた盗賊を返り討ちに出来たんだ。よほどの事がない限り、そこは心配要らないだろうし、盗賊如きに遅れは取らんとする不可解な自信さえもある。

そうなつてくると、俺の今一番の問題は街がどこにあるかを知らないことだ。

だが、知らなければ、知ってそんな人間に聞けばいいだけのこと。俺は弟分に支えられて立つ周倉を見た。

俺に負けた腹いせに全くの真逆の方向を教えられるかもしれないという一抹の不安もあったが、賊に身を落としてもなお剣士の矜持を持つ彼ならば、尋常に立ち会って敗れた人間に対して嘘をつくことはないだろう。

そこまで考えた俺は、何とかダメージから回復し一人で立つ事のできた周倉に尋ねた。

「ここから一番近い街……いや、この時代では邑か。それはどこにある？」

「ああ、それなら公孫贖って太守が治めてる街が一番近い。方角は確か向こうだったな。距離は歩いても半日もかからないはずだ」

周倉の指差す先を見据えた俺は、なるほどと頷いた。

太陽の位置を確かめてみると位置は真上、すなわち正午だ。ならば長くても半日の距離ならば急いで行けば何とか夜にはたどり着けそうだ。

なんとか先行きに目処が立った俺は、貴重な情報を提供してくれた周倉に礼を述べる。

「そうか、ありがとう。それと、本当にもう盗賊なんて辞めるよ」

さらに交わした約束に釘を刺した俺は踵を返し、公孫贇が治める街へと歩を進めようとした。その時。

「ま、待ってくれ！ 兄ちゃん……いや、旦那……！」

いきなり大声に俺は歩を止めると、周倉の方を振り返る。

俺が立ち止まり振り返ったのを見た周倉は、素早い身のこなしで跪くと俺に足して臣下の礼をとった。

「この周倉、一介の剣士として旦那の剣に惚れやした！ 何卒、この俺を家来にしてくだせえ……！」

いきなりの事に俺は開いた口が塞がらなかった。

それは弟分の二人も同様で、跪く周倉を見てポカーンと口を開けている。だが、やはり弟分というべきか。すぐさま周倉に倣い、俺に対して跪き臣下の礼をとった。

「同じく裴元紹！ 卑しい賊徒ではありやすが、オイラも家来に加えてくだせえ……！」

「て、程遠志なんだな！ アニキとチビ同様がんばって仕えるんだな……！」

俺に対して跪く三人に、俺はこの申し出を断ろうとした。

だってそうだろう。今まで学生として生きてきた人間が誰かを従えるなど到底思いもつかないことだ。

そして誰かを従えると言うことは、従う人に対して主が命を含む全ての責任を負うということだ。一介の学生である俺如きが、たとえ堅気ではない盗賊だった人物とはいえ、その命に責任が持てるのかと問われれば、その答えは当然Noだ。

昨日までの俺ならば確実にそう思っていた。

そう、思っていただ。

今の俺は、その事に対して何の迷いもなくYesと答えることができる。それがさも当然の事のように。

まるで昨日までは自分の事だけで一杯一杯だった俺の器が、急に果てのない大きさになったかのようだ。

跪き返事を待つ三人に、俺は今まで発したことのない鷹揚で威厳に満ちた声色で言葉を放った。

「よかろう。周倉、裴元紹、程遠志……汝等の命、この北郷一刀が預かった。汝等の天命は我と共にあり、我が天命もまた汝等と共にある。己が天命が尽きるその時まで我に尽くし、我の征く道を共に歩むことを許す……ここに主従の契約はなつた！」

この俺が放つたとはとても思えない俺の言葉に、三人は最敬礼を持って応えた。

「……ははあつ……！」

「じゃあ、行くか。公孫贄の治める街に」

声色を元に戻し、その方向へ踵を返す俺に周倉が手を上げて俺を

制止させた。

「待つてくだせえ旦那。旦那の家来にしてくれたからには俺たちの真名を旦那に預けやせんと」

周倉から発せられた聞くことのない言葉に俺は返す足を止めて首を捻った。

「……真名？」

この俺のリアクションに周倉は驚いた顔で俺の方を見てくる。

周倉の反応を見るにどうやら、この世界では誰でも知っている常識的な事らしい。

「もしや、真名を知らないんで？」

「ああ。実は俺、こことは全く違う文化の世界から来たから、その真名とやらは知らないんだ」

そう頷いたことで別の意味で驚きの声を上げたのが裴元紹だった。

「えッ！？ 旦那は豪族のお坊ちゃんではないんで？」

「それはあんた達が勝手に勘違いしてたことだよ。向こうじゃ俺は一般の庶人でしかない」

「そ、そんな。せつかく優良物件に仕官できたと思ったのに……」

どうやら、取らぬ狸の皮算用をしていたようだ。

そんな事を考えていた裴元紹に周倉の怒りが落ちる。

「てめえ、チビ！ そんな不埒な理由で旦那についたってのか！？」

「ああ、冗談！ 冗談っすよ、アニキ！ いやだなあ。オイラだっ

て旦那の男気に惚れ込んだに決まってるじゃないっすか!」

「あ、アニキ。抑えるんだな」

襟首を掴み上げ青筋を浮かべる周倉、そんな周倉に言い訳を述べる斐元紹に、何とか怒りを納めてもらおうと右往左往する程遠志の三人に俺は笑みを漏らした。

このままこのコント然とした三人のやり取りを見ていてもいいかと思ったのであるが、時間も惜しい。

俺はもういいだろうと周倉の肩を叩いてやった。

「はっはは。まあその辺にしろいてやれ周倉。それよりも真名のこ
とについて教えて欲しいんだけど?」

「旦那がそう言うんなら……おっほん。では真名について説明させて
いただきやす」

俺の言葉に従い斐元紹を下ろした周倉は早速、真名の事について
語り始めた。

「真名というのは書いて字の通り、そいつの真の名、本当の名前な
んでさあ。それを呼んでいいのはそいつの家族やそいつが認めた者
のみ。例え真名を知っていたとしても許しがない限り口に出しては
いけないんでさあ」

「なるほど。それで俺の臣下になったお前達は、俺にその真名を預
けるのが筋って訳か」

「一概に臣下になったからって無条件に真名を預ける訳ではありや
せんが、少なくとも俺は旦那に真名を預けたい。そう思っておりや
す」

「オイラもです!」

「お、俺もなんだな!」

力強く頷く三人の姿に、俺は応えるようにして頷いた。

「わかった。お前達の真なる名、受け取るっ」

「へい！ 俺こと周倉の真名は《兄》！ こいつらは俺に敬意を表してアニキと呼んでいやすが旦那は《兄》と呼んでくださいえ」

「旦那、オイラこと裴元紹の真名は《禿》！ どうかアニキやデク同様チビと呼んでくださいえ」

「お、俺、程遠志の真名は《出来》なんだな！ チビと同じで俺の事もデクって呼んで欲しいんだな」

三人から語られた真名を俺は心に刻むようにして呟く。

「兄、チビ、デク……確かに三人の真名預かった。俺には返すべき真名はないが、これからよろしく頼む」

「……へいつ！」「」

こうして俺は周倉、裴元紹、程遠志という三人の部下を従えるに至ったのであった。

肆話（後書き）

New!! パラメータに周倉、裴元紹、程遠志を追加

伍話

俺の部下になった兄、チビ、デクと共に公孫贄の治める街を目指して荒野の中を歩みいく中、遠くで何か怒号のような音が聞こえてきた。

それだけではない。

風に乗って漂ってくるこの臭いはかつて戦場で何度も嗅いだ……
血の臭い。

ええい、またか！

またしても既視感じみた違和感に囚われた俺であったが、それも一瞬の事。命や臣下に対する価値観同様に、それが当然の事として心に解けていく。

それはまるで虫食いになっていたパズルに、ピッタリのピースが一つ一つはめられていく感覚にも似ていた。

そんな違和感が綺麗に消えたところで、俺は思考を臨戦態勢へと切り替える。

俺の部下になった周倉 兄も戦いの気配に気がついたのか、表情を引き締めると俺の方へ視線を移した。

「……旦那、そう遠くないですぜ」

「わかっている。しかし、これだけ離れていてもなお戦いの気配が漂ってくるということは戦いの規模が小さくはないということか」

過去の経験則から戦場までの距離と規模を試算した俺は、その戦いの気配のあるほうへと駆け出した。

「……だ、旦那ッ!?」

この俺のいきなりの行動に三人は驚きを上げた。当然である。わざわざ死地である戦場に自分から近づくなど自殺志願者のすることだ。

だが……嗚呼。血の臭い、人の怒号、高らかな剣戟。その匂いが、音が大きくなるにつれ望郷の念にも似た感情が俺の内から滾ってくる。

死地に飛び込む? それがどうした! かの地こそ我が舞台! ！ 我の首を取らんとするものがいるのならば、我が直々に黄泉路に送ってくれようぞ!!!

その烈火の如き思いを胸に荒野を駆け抜けた俺は、戦場に近い辺りを見渡せる一段高い丘へとたどり着いた。

幾分か高さが足りないが、それでも戦場を俯瞰するにはうつつけの場所である。俺はそこから戦場であるだろう場所を見渡した。

しかし視力は悪いほうではないのだが、それにしても俺の視力はこんなにも良かったであろうか?

この距離、昨日までの俺ならば点の集合体にしか見えなかったはずだ。だが、今は委細までははっきりしないまでも人の姿がしっかりと見て取れる。

何、不思議に思うことはない。いつもの通りだ。

またしても俺の中に湧き上がった疑問は綺麗に解け行き、一つのピースとなって俺の心にピタリとはまる。

鷹とまでは行かないが、それでもかなり先までを見通す俺の視線は向かい合う二つの軍を映していた。

片方の軍、装備の質の悪さから察するに賊徒で構成された連合軍

なのだろう。その賊徒連合の兵がおよそ千。

それと対峙するもう片方の軍は、統一された武具から官軍と見て取れる。

おそらくはこれが遼西郡を治める公孫贇の軍なのだろう。陣内を見渡してみると《公》の牙門旗が見えた。その公孫贇軍の数がおよそ三百。

それが、この戦場に立つ全てであった。

しかし、おかしいことがある。それは未だに二つの軍が交戦していないということだ。

それなのに耳には怒号や剣戟の音が響き、鼻には血の匂いが香り立つ。

不思議に思った俺は音と臭いの出所を探すと、それは賊徒連合から出てきていることに気がつく。さらに目を凝らしてみると、賊徒連合の奴らは手に剣を持って己の陣内で暴れているように見えた。

「まさか、軍内部で内乱か……しかし、解せないな。寄せ集めの賊の軍で敵は寡兵とはいえ、敵を前にして内乱なんて……」

分け前を巡ってのトラブルか、寄せ集め故の不協和音が。

しかし、それにしてもこの状況は公孫贇軍にとっては千載一遇の好機のはずだ。それなのに公孫贇軍はピクリとも動こうとしない。

と、なれば公孫贇軍でも何かしらのトラブルが起きていると見るべきか。

俺がそう思案に耽っている中、俺を後を走っていた兄、チビ、デクの三人が息を切らしながら俺の元へと追いついた。

「や、やっと追いつきやしたぜ……旦那」

「い、いくらなんでも速すぎっすよ……」

「っ、疲れたんだな……」

俺に追いつくために全力で走ってきたのだろう。
そんな散々に息を荒らげる三人に、俺は首をかしげた。

「あれ？ 俺軽く走ったつもりだったけど、そんなに速かったか？」

いつもトレーニングで走り込みをする程度の速さで走ったつもりだったが、思いのほか速度が出ていたと言うことだろうか。
そんな俺の言葉に兄は首を横に振った。

「いえ。俺も足の速さには自信がありやしたが、旦那の速さは段違いでさあ。まさに風でしたね」

兄の言葉に、またしても俺の心に一つピースがはまる。

俺は急に速くなった足に一切の疑問も挟むことなく、再び戦場に視線をやった。

「まあ、俺の足の速さはどうでもいいことだ。それよりも……なッ！？」

そこで俺はとんでもないモノを見た。俺の視線の先、賊徒連合の一画が爆ぜたのである。

まるで木の葉のように舞う賊徒たちの中、俺の目はその爆発を起こしたであろう一人の人物をとらえていた。

いや、爆発と言うのは語弊がある。この場合は蹴散らしたとも言うべきか。

賊徒連合の中で暴れまわるのは白い着物のような衣装を身に纏い、真紅の槍を振るう女性の姿。

彼女が槍を一闪振るえば五人の首が飛び、もう一闪振れば今度は

十人の首が飛ぶ。その様はまさに一騎当千。

その実力に裏打ちされ、流麗な美しささえも漂わせる武は賊が身につけられるものではない。恐らく彼女は公孫贗軍の将か、流れの旅芸人。

そして彼女が前者の場合、公孫贗軍が動かないのも頷ける。

おそらく勇に逸つて一騎で敵軍に突っ込んだのだ。あれだけの武を持っていれば賊如きに遅れはとらないと思つたのだろう。かく言う俺も当然そう思っている。いかに数が多かろうと所詮は雑兵、己が無双の武を持つてすれば殲滅することなど容易きことだ。

しかし、これは軍と軍との戦いだ。

いかに雑兵とはいえ、その戦力差は三倍。公孫贗軍にしてみれば、自軍に一騎当千の将がいるからとて、正面からぶつかり合えば多大な損害は免れない。

何か最小の損失で、最大の効果を見込める策を用意していたのである。だが、彼女が独断専行、戦端を開いてしまった。彼女に続いて今動けば策は失敗する。故に、この状況では動くことが出来ない……そんなところだろう。

しかし………。

「将の女性にしる公孫贗軍にしても機を見誤つたな」

俺がポツリと零したこの言葉にチビが首をかしげる。

「どうということっすか？」

「つまり、あの姉ちゃんか逸ってしかけたんなら、迷わず即座に全軍で突っ込めばよかつたんだよ。そうすりゃあ、こっちの被害もでけえが勢いで一気に敵を蹴散らせた」

俺の言わんとした事を要約してくれた兄の言葉に俺は頷くと、そ

の細かいところを説明する。

「兄の言うとおりだ。しかし、公孫贛軍は動かなかった。そして、すでに将の女性は敵陣中深くまで入り込んでいる。あそこまで軍を進め、彼女と合流するのは至難の業だ。用意していた策を実行するにせよ、その前に将たるあの女性が討ち取られれば大きく士気が揺らぐ。そんな状態で将を討ち取り、士気の上があった敵軍に当たられれば一溜りもないだろうな。ならば損害はあろうとも勝利が見えていた彼女の突撃時に動くべきだったんだよ。もしくは彼女が突撃を自重するべきだったか」

この説明を聞いたチビが、なるほどと頷く中デクがおずおずと手を上げて聞いてきた。

「で、でも、あの人すごく強いんだな。あんな旦那みたいに強い人がやられちゃうなんて俺は思えないんだな」

確かに彼女に武は一騎当千だ。その言葉が事実ならば千の敵軍など彼女一人で十分といえよう。

現に敵兵は誰一人とて、彼女に一太刀も浴びせていない。このままいけば彼女一人、無傷で敵軍を殲滅してしまいそうに見える。

そう思っただのデクの言葉なのだろう。チビも同様にデクの言葉にしきりに頷いている。しかし、彼等は一つ見落としていることがある。

そんな弟分二人の姿に兄は深いため息を一つつくと、敵軍で暴れる彼女へ指を向けた。

「見難いかと思うがあの姉ちゃんの足元、よく見てみな」

「足元って……白い姉ちゃんが殺した敵の死体ですが、それがどうしたんですアニキ？」

「まだ、わからないってのかよ……いいか。どんなに強いやつだつて、しっかり地に足つけないと力でないだろうが。そんな踏ん張るべき地面が死体と血で溢れてたらどうなる？」

この言葉でようやく合点が言ったのであろう。チビとデクは大きな声を上げた。

「あつ!!」「」

「気がついたようだな。そう、このままじゃ彼女は遠からず足場を奪われ、そして討たれる」

そう。いかに一騎当千とて、それは持てる力を最大限出せた場合の話だ。そのような将を相手にする場合、その最大限の力を発揮させないようにするのが鉄則。

特に足場の定まらない場所に敵を誘い出し、叩くのは常道中の常道。まあ、賊徒共は狙ってやったわけではないだろうが、遮二無二の蟻戦が功を奏した形だ。

そんな俺たちの指摘にチビとデクは動かない公孫贗軍を見て呟く。

「そつなつたら……」

「旦那やアニキのいったとおり……」

「公孫贗軍は敗れるだろうな」

そう言った俺はその場から一步を踏み出すと、腰に差した雌雄一対之剣を引き抜いた。

陽光を反射する雌雄一対之剣と臨戦態勢を取る俺の姿を見た兄は、やはりといった様子で俺に問いかける。

「やはり行くので？」

「ああ。彼女の武、賊徒共にくれてやるには余りにも惜しすぎる」

これは偽らざる俺の本音だ。己が愚考で身を滅ぼすは、そいつの勝手ではあるが彼女に対しては別格だ。俺には劣るが、それでも常人から見れば別次元の強さ。

もしかすれば三国志の有名武将かもしれない。しかし、公孫贇の配下にこれほどの武も持つ女性はいたであろうか？ 趙雲なら分かんなくもないが、彼は男であるはずだ。ならば彼女はいったい………。

丁度いい。それも行って確認することにしよう。

そう思い、さらに一步を踏み出そうとした俺の隣に兄が立つ。

「じゃあ、俺もお供しやすぜ」

「あ、アニキ！？ 旦那も！？」

俺と兄の行動が理解できないのであるう、チビとデクが驚愕の声を上げた。

なんといつても相手は賊とはいえ千人だ。白い女性の活躍により数は減っているとはいえ、それでもまだその数は九百は下らない。そのような死地にわざわざ赴くと言うのだから、彼等の驚きももつともといえるだろう。

しかし、今回ばかりは兄を連れて行くわけには行かない。

「いや、今回はいい。兄の剣は俺が折ってしまっただろう。そんな武器で兄を戦わせるわけにはいかない」

兄の武を侮っている訳ではないが、半端な武器では満足にその武も振るえまい。かえって足手まといだ。

「しかし！」

それは兄とて認識しているだろうが、それでも主君と仰いだ俺を一人で死地に行かすには抵抗があるのだろう。なおも食い下がる兄に、俺は意地の悪い笑みを浮かべて言っちゃった。

「なんだ？ 兄は俺が賊如きに後れを取ると思っているのか？」

「思っちゃいやせんが、今戦ってる姉ちゃん同様足場から潰される場合もありやす！」

「何、心配するな。それにこれは臣下となってくれた兄等に俺の實力を見せるいい機会だ。今回は高みの見物と洒落込んでいてくれ」

そういつて俺は三人を振り返ることなく、丘から身を躍らせた。

丘のきつい傾斜を足で滑り降りる俺の背に、兄が身を乗り出して声をかけてくる。

「旦那ッ！！ ったく、とんでもねえお人の下についちまったもんだなあ」

兄の悪態を背に、俺は死の旋律が奏でられる死地へと久方ぶりに飛び込んでいったのであった。

陸話

……まずいな。

賊徒連合の中で単身、真紅の槍を振るう女　趙雲は心の中でその毒づくくと、苦々しい顔で齒をかみ締めた。

弱腰に策の実行を優先する公孫贛との問答の末、単騎敵陣へと乗り込んだまでは良かった。己が愛槍を一閃振るえば一人を殺し、もう一閃振るえば次は二人を殺す。

やはり武人の戦はこうでなければ。

そう思いつつ稲穂を刈るが如く敵を蹴散らし屠ってきたのだが、ここに至って状況が変わった。

なぜならば、己が殺した賊徒共の骸が折り重なり足場を埋め始め、動きを阻害してきたからである。

「えええいッ！」

苛立ちの声をあげ何とかその場からの脱出を試みる趙雲であったが、敵も趙雲の動きが鈍っている原因に気がついているのか、脱出させじと体を張って垣を作る。

それでも趙雲は脱出のため群がる賊徒どもを殺していくが、その骸が無常にもさらに自分の足場を潰していくという悪循環に陥っていた。殺しても殺しても活路を見出すことの出来ない蟻地獄のような状況に趙雲は高らかに舌打ちする。

「ちいッ！……！」

もうその顔には余力はなく、苛立ちと焦りの色が如実に浮かび上がっている。

今までにない、限りなく近い死の予感。

「だが、そんな道理我が武で捻じ伏せてくれるわ!!」

脳裏に走った死の予感を振り払うが如く吼えた趙雲だったが、骸の沼はすでに腰の高さにまで迫ろうとしていた。

しかし、そんなものなど何するものぞ。そう思った趙雲が目の前に迫る賊徒に必殺の一閃を放とうと地面を踏みしめた時、不覚にも血に塗れた地面に足を取られてしまった。

「しまったッ!？」

いつもならば足を取られた程度、どうということもないはずだった。敵の攻撃をあしらい、返す刃で命を刈り取ることなど己にとっては造作もないこと。

しかし、今己を取り巻くのは動きを阻害する骸の沼。

ここで一度態勢を崩してしまえば、それは致命的な隙となる。

その事を認識した趙雲の目に、剣を大きく振りかぶった賊徒の姿が映った。

ああ、これは間に合うまい。

鍛え抜かれた戦闘思考が、そう告げる。時間にして数秒……その未来に自分はあるの剣に斬られて死ぬ。

その未来視じみた光景に、趙雲は不敵に笑うと槍を持つ手に力を込めた。

だが、ただで私の命はやらん! 道連れにしてくれる!!

その気迫を胸に、今まさに自分に斬りかかろうとした賊徒に獰猛な笑みを浮かべた次の瞬間、己がいる場から離れたところから悲鳴が沸きあがった。

「ッ!？」

いきなりの事に、私を殺そうとしていた賊徒は振り下ろす手を止めて悲鳴が聞こえた方を向く。

「な、なんだ!？」

「公孫贄の軍が突っ込んできたのか!？」

私を取り囲んでいた他の賊徒共も断続的に聞こえる悲鳴に動揺が走った。

そのお陰か、私を包囲していた垣が僅かだが緩む。そして、この好機を逃す私ではない。

足を取られた格好から態勢を立て直した私は、今度はしっかりと地に足を踏みしめる。

「はああああッ!！」

そして裂帛の気合と共に上空へと跳躍した。

空へと舞い上がり骸の沼の束縛から逃れた私は、滞空の時間を利用して悲鳴の元へと視線を向ける。

そこには。

「な、なんと……………」

私が絶句するのも無理はない。私の目に映っていたのはまさに白

い嵐であつた。

光り輝く不思議な白い衣裳を身に纏い、両の手に持った二振りの剣を縦横無尽に振り回す御仁。その御仁が放つ剣閃に触れた先から賊徒共の命が刈り取られていく。

しかも私が犯した足場から潰されると言う愚を、常に移動しながら戦うと言う戦術をとることで回避している。

しかし何よりも私が驚いたのは、その御仁の武だ。

賊徒が相手であるのだが、それでも彼の御仁の武は私のそれとは一線を画しているのがわかる。

あれこそまさに天下無双、絶対無敵、万夫不当、国土無双。

私が彼を見る中、不意に彼は私が見つめているのに気がつくると私と視線を交わす。

一瞬の目と目の会話。

合流して蹴散らすぞ。全て喰らい尽くすつもりだが、ついて来れるか？

承知。そちらこそ、遅れることのなきよう。

まるで長年付き従つた夫婦か主従のように彼の御仁と意を交わした。あつた私は、落下点にいる賊徒共に向けて愛槍を大きく振りかぶつた。

「せえええええいッ!!」

気合一閃。

地面を揺らす一撃に、そこに立っていた賊徒共を纏めて吹き飛ばして着地すると、その場に残った残りの賊徒を一閃の内に屠つてやつた。

彼の御仁も私の作つた空間にその身を滑り込ませると、両手に持

った二振りの剣で次々に賊徒の首を跳ね飛ばしていく。

足場が賊徒の骸で溢れて来ると、私は飛び上がり別の地点に再び流星じみた突撃を加える。

そこに白い御仁が続き、二人でその地点の賊徒を殲滅する。

そんな戦いを繰り返しているうちに知らず知らずの間に、私は彼の御仁と背中を合わせて戦っていることに気がついた。初めて背中を預けあうと言うのに、それを意識しないほどに同調していたのである。

このような経験は初めてだ。もしかすれば彼の御仁との相性がいいのかもしれない。

そんな軽口まで心の中でつけるまでに余裕を回復した私は、今まで私を殺そうと躍起になっていた賊徒共が一転して怯みを見せていることに気がついた。

私と彼の御仁から円を描くように取り囲む賊徒共だが、誰一人としてその円の中に入ってこようとはしない。

まるで、その円のこちら側が現世と冥界を分かつ境界線であるかと言うように。

そんな賊徒共の心の変わり身の早さに私は笑みを漏らすと同時に、先ほど見せた自分自身の情けなさに対して少々腹が立ってくる。

私はこんな詰まらない奴等に討ち取られようとしていたのか！

まったく。この様では白蓮殿に言い訳は出来ないな。ならばせめて賊徒共を殲滅することで差し引きぬきにしてもらおう。

そう思っ息を一つついた私は今一度、賊徒共に高らかな名乗りを上げた。

「卑しき賊徒共よ、今一度聞けい！！ 我が名は趙雲！ そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ！ 卑しき賊徒に身を落としてもなお、男

の矜持が残っているならばかかって来るがいい!!」

何とか間に合ったようだ。

俺は背中合わせに立つ女性の気配を感じながら、一つ安堵の息をついた。

俺が丘の上で見た時は、いつ討ち取られてもおかしくない危ないな戦いだっただから間に合うかどうかは微妙だったのだが……やはり名のある武人のようだ。

俺が作った隙から物の見事に離脱。戦況を振り出しに一気に仕切りなおした。

これは是非とも戦いの後に名前を聞かないとな。

そう心の中で呟いた俺であったが、その手間は省かれることとなった。

白い女性が高らかに名乗りを上げたのである。

「卑しき賊徒共よ、今一度聞けい!! 我が名は趙雲! そなたらを黄泉路に誘う死の槍だ! 卑しき賊徒に身を落としてもなお、男の矜持が残っているならばかかって来るがいい!!」

しかし、流石の俺もこれには驚いた。

誰が予想できよう。この白い女性が後の蜀が五虎将の一人、趙雲であろうとは……。

あまりの予想外の彼女の名前に、俺はここが戦場であると言っ

とも忘れて彼女に聞き返していた。

「本当に……君は本当に、あの趙雲なのか？」

ひょっとしたら別人の可能性もと考えていた俺であったが、次の彼女の言葉に、それはもの見事に打ち砕かれる。

「どの趙雲かは知りませんが、常山の昇り龍こと趙子龍ならば私です」

まさしく、あの趙雲だ。間違いない。

しかし、これは一体どういうことなのだろう。男であるべき趙雲が女の姿でいるということなど、ありえるはずがない。

だが、確かに彼女は女性で趙子龍だ。丘の上で見た彼女の持つ武が趙雲の名に恥じないものであったのが何よりの証拠。

いやでも、やはり趙雲は男で……そうなってくると……。……。考えても答えの出ない堂々巡りに陥る俺に、不意に趙雲が言葉をかけていた。

「それよりも白き御仁。私も貴方の名前は気になるところ。どれ、ここで一つ名乗りを上げてみればどうか？」

武人としての好奇心を隠しきれないのだろう。

俺の名乗りを今か今かと待つ趙雲の姿に、俺は一つ思索した。

確かに趙雲が男でないとするならば一大事だが、それは歴史研究かや三国志マニアの間でのみのことだ。

だが、俺が今立つこの場は戦場。男も女の、大人も子供もない。

そこに立って剣を取れば、それは皆戦士だ。そして、この趙雲の武は三国志で語られる趙子龍と何ら遜色はない。

「……そうだったな。君が趙雲であろうが、なかるうがそれは些細なことだった。この場にいるのは一騎当千の君と、絶対無敵の俺。今はそれだけで十分だ」

「……？　どうかなされたか、白き御仁」

俺の呟きに不思議そうな声をかけてきた趙雲を尻目に、俺は大きく目を見開くとかつてそうした様に高らかに己が名を叫んだ。

「我が前に立つ賊徒共よ、刮目せよ！　汝等が相對するは究極にして至高の武の具現！　それこそ我、北郷一刀なり！！　我と刃を交える榮譽と我が名をその魂に刻み、そして逝け！！」

俺の剣気が言葉に乗って大気を揺らし、衝撃波となって賊徒共の間を駆け抜ける。

何も衝撃波と言うのは比喻表現でもなんでもない。現に一番近くを包囲していた賊徒数十人が俺の名乗りで吹き飛んでいるのが見えただけだから。

その光景に趙雲は目を丸くして、こちらの方を見てくる。

「ほおう。名乗りの気迫で敵を吹き飛ばすとは……そのような事ができる御仁を見たのは貴方が初めてですぞ、北郷殿」

「まあ、これで賊徒の士気も挫けた。あとは狩るのみだ。ちゃんとついて来いよ趙雲」

「そちらこそ。あれだけの名乗りを上げておきながら私に遅れるとあつては、末代までの恥ですぞ北郷殿」

戦場でありながらも笑顔で軽口を叩き合った俺たちは共に頷くと、合わせていた背中を離し賊徒の群れへと飛び込んでいったのであった。

漆話

公孫贇が治める遼西の街。その中で一番立派な屋敷に一刀たちはいた。

その屋敷の主　　公孫贇が対面に座った一刀に深々と頭を下げる。

「客将とはいえ我が将のみならず、敗北するしかなかった軍まで救ってくれたこと。重ねて感謝する北郷殿」

あの戦い。

土気の挫けた千弱の賊徒を趙雲とたつたの二人で殲滅した一刀は、周倉たちを連れて公孫贇軍と合流。機を逸し、勝利することが困難であった状況を己が武のみで勝利に導いてくれたことにいたく感銘した公孫贇は、その礼がしたいと己の屋敷に一刀を招いたのである。ちなみに、この応接間にいるのは一刀と趙雲、そして屋敷の主である公孫贇のみ。

一刀の配下である周倉たちは別室での待機を命じられていた。

「いや。俺も趙雲という武人と共に戦場を駆け回ることが出来た。あれだけの人と轡を並べるといふ機に恵まれた事に、俺が感謝こそすれ、感謝されるほどのことではない」

礼に対して礼で返した一刀に、公孫贇は快い笑みを漏らした。

「ははっ。お前、なかなか面白いヤツだな。それだけじゃなくて腕も立つし、星みたいに猪じゃない」

「私が猪とは……それは聞き捨てなりませんな白蓮殿」

公孫贇の言葉に些か唇を尖らせる趙雲であったが、公孫贇は腕を組むと不敵な笑みを趙雲へと向ける。

何といつても彼女には　それもつい先ほど起こした前科があるのだから。

「どこかの誰かさんが単騎で突っ込んだお陰で、用意していた折角の策が台無しになったばかりか、自滅までしでかそうとしたヤツに言い返す資格はないと思うが？」

してやったりとした顔でそう述べた公孫贇の言葉に、趙雲は苦々しげな表情になるが、何とか会話の主導権を握ろうとする。

「ぐツ！　それを言われると少々敵しいが、それでも賊徒はキツチリと殲滅したでしょう」

確かに、結果だけを見れば賊徒はキツチリと殲滅された。しかしそれは、何も趙雲だけの戦果ではない。

そここのところを公孫贇が鋭く指摘する。

「北郷殿の助けがあつてこそ……だがな」

そう言われては流石の趙雲も引くしかない。

「ぬう……確かに。この話はやはり私には分が悪いようだ」

よほど日頃では舌戦で辛酸を嘗めさせられてきたのだろう。

しぶしぶといった形で引き下がる趙雲に公孫贇は会心の笑みを浮かべていた。

「これに懲りたら軍としての規律を乱さないでくれ。客将という身

分だからいいものを、本来ならば生還してきても縛り首だぞ」

確かに、軍の綱紀に照らし合わせれば上官の命令を無視しての独断専行は重罪だ。

趙雲の場合は客将という身分に、高く評価されている個人の武とこれまでの戦果、そして公孫贇との友誼から注意といえない勧告のみといった甘い処分になっているが、本来ならば公孫贇の言うとおり死を持って償うべき大罪なのである。

しかし、そこはさすが趙雲というべきか。

すぐさま飄々とした人の喰えない笑みを甦らせて頷いた。

「ふむ。そこはまあ、前向きに善処いたそう」

「……それは、やるつもりはないと言う意味で受け取っていいのか？」

「ふふふつ。それは白蓮殿の御心次第でしょうな」

まるで現代日本のお役所が出す返事のような回答で返した趙雲に、
疲れた様子で肩を落とした。

「まったく。お前はこれだからなあ……」

そう言っつて肩を落とす公孫贇だったが、趙雲が相手では仕方ないかと思いい頭を振る。

いつものことだ。気にしただけ馬鹿を見る。

そう思わなければ、この趙雲とは付き合っていけないのである。

しかし、扱いにくい将はどうにもいけない。本来ならば、そのような輩は暇を与えるか一兵卒に落とすのが常道なのだが、公孫贇の軍で兵を率いれる有能な将は趙雲のみ。しかも趙雲の場合はさらに

腕が立つから、なお性質が悪い。

目下、公孫贄の目標は有能で忠実な将を手に入れることだ。そして公孫贄の目の前には、見た目人のよさそうな一刀が座っている。武の方も申し分なく、あの戦場の様相を看破した戦術眼も見事なものだ。

そんな優良株を前にして、自軍に勧誘しない手はない。

「そうだ、北郷殿。もし良ければ私に仕官しないか？ お前なら総司令官の椅子を用意するし、お前の部下の三人も一緒に將軍として雇ってやるが、どうだ？」

破格の待遇を用意する公孫贄に対して、やはりと言うべきか趙雲が茶々を入れてくる。

「しかし北郷殿ほどの武を持つ御仁ならば白蓮殿のところよりも、もつといい仕官先があるように思えるのだがいかがだろうか、白蓮殿？」

先ほどの仕返しとばかりに放たれた趙雲の口撃に、公孫贄は眉を顰めた。

「なんだ、それは私への当て付けか？」

「さあ。どうでしょうなあ」

趙雲と公孫贄、二人の間で不穏な空気が渦巻くが、それはすぐに四散した。

「おっと、すまないな北郷殿。星の相手をしていると、どうにも調子を狂わされて仕方がない」

「いけませんな、白蓮殿。客人たる北郷殿をほったらかしにした言

い訳を私の所為にするなどと」

「どうやら、これまたいつもの事らしい。

またしても、ああでもないこうでもない舌戦を始めた二人に、
刀は笑みを漏らす。

趙雲の軽さがなせる業か、公孫贇の人のよさがなせる業か、それともはたまた両方が。

まったく、中々どうしていいコンビだった。

そんなここは、さぞ居心地のいいところなのだろう。昨日までの
一刀ならば、公孫贇からの誘いに一も二もなく頷いたはずだ。

しかし、今の一刀にはそれに頷くことはできなかつた。

何かが　もしくは誰かが自分を呼んでいるような、そんな気が
して仕方がないのだ。

一刀は髪に差しした虞美人草を触ると、首を横へと振つた。

「それでもないよ、中々おもしろい掛け合だった。でも、仕官の
話は悪いけど受ける気はないな。俺には行かなければいけない場所
がある……そんな気がするんだ。折角のお誘いだが、すまない公孫
贇」

窓の外、その景色からさらに遠くを見つめる一刀の姿に、公孫贇
は残念そうに肩を落とす。

本来ならばこれだけの人材、そう易々と諦められるものではない。
しかし窓の外を見つめる一刀の姿を見れば、そんな思いなど四散
してしまった。

ああ。こいつには行かなきゃいけない場所があるんだな……

……。

そして、それは少なくとも自分の元ではない。その事を自覚した

ならば一刀の仕官の件、惜しくはあるが諦めることに躊躇いはなかった。

しかし。

「そうか……まあ無理強いはよくないな。でも、仕官の事は別にして私の事は白蓮と呼んでくれ」

これだけの傑物、仕官してくれなかったのは残念だが真名くらいは交換したい。

それが公孫贄の想いであった。そしてそれは趙雲とて同じ。

「いいのか？ 誘いを蹴った俺に真名を許すなんて」

「言っただろう、お前には軍を救われたって。ならばそれ相応の態度で臨む事は当たり前だろ」

「白蓮殿は底抜けにお人がよろしいからな。では、私も命を助けてくれたことに対する感謝と、貴方の絶対無敵の武に敬意を表して真名を預けましょう」

と、そこまで趙雲が言ったところで一刀は会話の端々に聞こえた趙雲の真名であろう名前を口にした。

「星……だったか？」

「おや、北郷殿もお人が悪い。私が教える前に我が真名を呼ぶなどと」

己が真名を教える前に真名を呼ばれたことを少し拗ねながらもそれでも少しは嬉しいのだろう、趙雲は妖艶な笑みを見せる。

そんな真名を預けてくれた二人に、一刀は少々申し訳なげな顔になる。

「真名を預けてくれた二人には悪いんだが、俺の生まれた国では真名って文化はないんだ。だから俺には返すべき真名がない……その代わりと言っちゃなんだが、今までどおり北郷とでも、一刀とでも好きに呼んでくれ」

「ほう、真名がないとは珍しい。しかし、一刀というのが名なのですね……ならば私は一刀殿と」

「なら、私は今までどおり北郷殿と、姓の方で呼ばせてもらおうか」
「ああ。白蓮、星……確かに君達の真名、預かったよ」

こうして真名の交換を終えた三人であったが、ここで公孫贇は頭を悩ませた。

「いったい公孫贇は何に頭を悩ませているかいるのか？」

それは、軍を救ってくれた一刀に対する即物的な礼である。

謝辞を述べ、この世界では絆の証というべき真名を交換したのであるが、それだけで恩人を帰したとあらば遼西の太守として名折れ。公孫家の沽券にも関わる。

「なのだが。」

「と、なると困ったな。北郷殿にはウチの仕官を持って礼に変えようと思ったのだが……どうするかなあ」

そう。公孫贇は高待遇での仕官を一刀に対する謝礼にするつもりだったのだ。

しかし謝礼にかこつけて自陣に引き込んでしまおうとは公孫贇、人がよさそうに見えて中々に強かな人物である。もともと、それくらい強かさがないと太守としてやっていけないのかもしれない。

だが、仕官の話は一刀自身に断られてしまっている。

と、なると別の物をもって礼とするしかないが……。

そこまで考えた公孫贇であったが一刀の姿を見してみる。

一刀の腰に差ししていた剣を見てみても、着ている服を見てみても、この世のものとは思えないほどに上等だ。どちらかでも売れば洛陽の一番地に屋敷を買えるほどの価値があるであろう。

恥ずかしながら、これ等以上のものは公孫贄自身持ち合わせていない。

それならば金子という手もあるが、それは何だか味気がない。

などと一人考えを廻らせる公孫贄に、それならばと趙雲が救いの手を差し出した。

「白蓮殿、一刀殿はまだ旅を続ける様子。ならばアレを一刀殿に与えてみては？」

「アレかあ！？ でもアレはなあ……………」

確かに趙雲の言うアレならば彼が身につけている剣や衣装と比べてみても遜色がない。いや、逆に非常に絵になり、かつ彼の役に立つであろう。

だが、それはアレが一刀に懐けばの話だ。

アレは生まれてからというものに懐くところなど一度として見たことがない。そんなアレが一刀に懐くかどうかと問われれば、やはり分の悪い賭けだ。

自分ならば懐かないほうに全額賭ける。いや、そうした場合全員がそちらに賭けるから賭けは成立しないか……………。

そんな益体もない事を考えているうちに、趙雲が公孫贄の背中を一つ押す。

「一刀殿は先の戦いで見せたとおり、私すら凌駕する武人。ならばアレとて御せましよう」

「ううん。星がそこまで言うんなら、一度試してみるか……………」

不安に顔をしかめていた公孫贄であったが、武人としては自分よ

りも優れている趙雲が笑顔で太鼓判を押ししたことに、消極的ではありながら頷いたのであった。

しかし、ここに彼女達の話がまるっきりわからない人物が一人。当の一刀本人である。

「なあ、さっきの会話に出てきてるアレってなんだ？ かなり物騒な物に聞こえるんだけど……」

アレだとか、趙雲を超える武人でしか御せない等の単語や、二人の会話の雰囲気に対し表情を引きつらせていた。

「いったい、何が出てくるって言うんだ？」

それが一刀の偽らざる本音である。

そんな一刀の本音を知ってか知らずか、彼女達は座っていた椅子から立ち上がると、一刀を外へと促した。

「まあ、ある意味では物騒な代物ですな」
「とにかくついて来てくれればわかる」

何だか少し不安になる一刀であった。

捌話

公孫贄に連れられた一刀が足を踏み入れたのは公孫贄軍が軍馬を管理している厩舎であった。

厩舎へと足を踏み入れた公孫贄はざっと辺りを見回すと、今年生まればかりの幼駒の世話をしていた厩舎の責任者の元に歩み寄った。

「軍馬の世話、ご苦労。白天王はどうしてる？」

いきなりの公孫贄の来訪に厩舎の責任者は臣下の礼をとって応える。

「これはこれは伯珪様。白天王ならば、いつもどおりでございます」

白天王　それが先ほどの会話に上がっていたアレの名前らしい。そして、この場所から察するに馬　それも軍馬なのだろう。

確かに軍馬であるならば旅の行程はかなり楽になるし、戦いの時も役に立つ。今の一刀にはピッタリの贈り物だ。

「そうか。少し中に入れてもらおうぞ」

その目当ての馬の元へと赴こうとした公孫贄を厩舎の責任者は大慌てで止めに入る。

「い、いけません！　白天王は伯珪様にさえ懐かなかつた暴れ馬、万が一白天王が暴れでもすればお命はないやもしれませぬぞ！」

顔を蒼くして語る厩舎の責任者に公孫贇は笑顔で後ろにいる一刀と趙雲を指差した。

「その所は大丈夫だ。心強い護衛が二人もいるからな」

公孫贇軍唯一の将にして一騎当千武人である趙雲と、先の戦いで趙雲と共に千の敵を殲滅した一刀。

特に窮地に立たされた趙雲を超絶的な武で一刀が救ったという話は、今日のことだというのに既にここまで聞こえてきていた。

そんな二人がいるならば万が一の事があっても大丈夫だろう。

そう判断した厩舎の責任者は腰にぶら下げていた鍵の束を公孫贇へと渡した。

「わかりました。ですがくれぐれもお気をつけて」

「ああ。行って来る」

鍵を受け取った公孫贇は一つ頷いて、一つ目の扉に鍵を差し込んだ。

そう、一つ目だ。一つ目の折を抜けると、その中にさらに檻があった。

しかもそれは二つだけではない。二つ目の檻の奥に、もう一つ檻があったのである。

檻の中に檻があり、さらにその中に檻がある。

この嚴重に囲まれた牢獄の様な檻を用意しなければならない馬とは、いったいどのようなものなのであろうか？

ありえない物々しさに好奇心を刺激された一刀は、少し楽しそうな表情を見せると最後の檻の中へと足を踏み入れた。

そんな二重三重に閉じられた堅牢な檻の扉を潜り抜けた先で、公孫贇はそこにいたモノを一刀に紹介する。

「どうかな北郷殿。アレこそ百年に一頭の名馬にして百年に一頭の駄馬、白天王だ」

名馬なのに駄馬とは、これいかに？

そんなトンでもない紹介をした公孫贇の視線の先に一頭の馬が立っていた。

しかし……なるほど。名馬と言うのは見るだけでわかる。毛色は韋毛だろうか。

一点の染みもない白く美しい体躯は一切の無駄なく引き締まり、その身に秘めた能力の高さをうかがわせる。その身を飾る鬣と尾も、まるで清らかな川の流れを連想させる薄い蒼で雅な趣を漂わせる。

それはまるで、不世出の巨匠が造った芸術品のよう。

いや、白い龍の化身と言われた方がじっくり来る。それほどの神々しさを溢れさせていたのだ。

そんな白天王の姿に、一刀から漏れた言葉はただ一つ。

「……すごく……綺麗だ」

一刀から漏れたこの言葉に、公孫贇は微妙な笑みを浮かべて頷く。

「そうだろう。しかしこの馬、見てくれだけではないぞ。幼駒の時には既に大人の背丈ほど合った柵を跳び越えた程の名馬なのだ。なのだが……」

確かに、それが本当ならば凄いことだ。

幼駒の段階で既に超一級のパネを見せたと言つことは、全盛の今であればどれほどの走りを見せてくれるのだろうか。もしかすると、かの赤兎馬以上かもしれない。

しかしそれほど名馬が何故こんなところに閉じ込められているかといえば、当然それには理由があった。

「どうにも気性が荒くて誰にも乗りこなせない　いえ、乗ることすらできないのです。かく言う私も一度試してみましたが、私でもお気に召さなかったようで振られてしまいました」

「近づくことが出来る私や星はいいほうだよ。しかし、それ以上は嫌がって暴れだす　鞍をつけようとただけで人に襲い掛かる始末なんだ……幸い死人は未だ出ていないが、一生物の大怪我をした者はかなりの数に上る」

まさか一騎当千の武人である趙雲や、白馬長史として名高い公孫贇でさえ上に乗ることが出来ない馬がいるとは驚きだ。

不世出の力を秘める馬にして、誰にも背中を許さない馬。
それが白天王が名馬にして駄馬たる所以である。

「一旦は処分も検討されたが、これほどの名馬を殺すには惜しいと、こうして繁殖用に閉じ込めていたのだ……って、北郷殿!？」

公孫贇がここに白天王が閉じ込められた経緯を説明している中、いきなり白天王に近づいた一刀に驚きの声を上げる。その白天王に近づく一刀の姿勢は余りにも無防備。

白天王は極一握りの人間にしか近づくことすら許さない馬。そう見なされなかった者には、その前足が凶刃となって襲い掛かるのだ。あれでは如何に趙雲を超える武を持つ一刀とて、襲い掛かれたときに咄嗟に動くことなど出来るはずがない。

しかし、近づくことしか出来ない趙雲と公孫贇は白天王を暴れさせずに済ます術を持っていない。

こうなっては是非もない。

恩人たる一刀に危害を加えようとするのであれば、いかに白天王とて生かしておく理由はない。それが趙雲と公孫賛の共通認識だった。

初撃を感知したならば斬りますが、よろしいな白蓮殿。

ああ。頼んだ星。

短いアイコンタクトで会話を終えた二人はいつでも動けるように脚に力を入れる。

そんな二人が臨戦態勢を取る中、白天王に一步一步近づくと一刀の胸には得も知れぬ懐かしさが満ちて来ていた。

その真白の体躯も……蒼みがかった鬣と尾も……………。

確かに一刀は、この白天王とやらに似た馬を知っている。その頭に甦った、かつての愛馬の名を白天王に問いかけた。

「お前……誰か？」

どこの馬とも知らない名を問いかけられた白天王はブルルツと鼻を鳴らして首を横に振る。

当然といえば当然といえる白天王の反応に一刀は些か肩を落としました。

「違うのか……そうか、そうだよな」

そんな一刀の反応に、白天王は何の不満があるのだと不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「いや、すまない。お前によく似ていた馬を知っていたから、ちょっとな」

一刀の言葉に、そう言うことならば構わないと言う風に首を縦に振る白天王の姿に趙雲と公孫贄は啞然となった。

何故なら、一刀は白天王と意志の疎通　会話を行っているのである。

馬と心を通わせることならば、趙雲にも公孫贄にもできよう。

しかし、それは何となく馬がやって欲しいことを汲み取るという漠然としたものだし、こちらの意志を馬に伝えたとしても、伝えられることに上限はある。

つまりは馬との完璧な意志の疎通など、できた試しがないのだ。

しかし、一刀と白天王はそれを成している。まるで、それが当然の事だと言うように。

趙雲と公孫贄は白天王に対する警戒を忘れ、一人と一頭の不思議な会話に見入る。

「それにしても……その眼、いい眼だ。そして毛並みも……体軀も……まるで騅の生まれ変わりだ。なに？　そんなに自分はその騅とやらに似ているのかって？　ああ。その美しき姿も、気高き気意も俺のかつての愛馬とそっくりだよ」

そこまで一刀と話した白天王はそれならばと、一回首を檻の外へと向け挑戦的な笑みを一刀に見せた。

「ふむ、試してやる……か。いいだろう、振り落とせるものなら振り落としてみる」

その挑戦的な白天王の笑みに不敵な笑みを持って返した一刀は、後ろにいる公孫贄に問いかけた。

「すまない、白蓮。コイツの鞍つてどこにある？」
「それならコレがそうだけど……」

あまりの非常識な展開に素で鞍を手渡しそうになった公孫贇だが、その意味することについて考える。

鞍が必要ということは、乗馬するのに必要ということだ。じゃあ一刀はいつたい何に乗馬するというのか？ 決まっている。そこにいる白天王だ。

遅ればせながら、その事実気がついた公孫贇は大声を上げて驚いた。

「つて！？ の、乗るのか白天王に！？ いや、さっきの会話を聞いているようじゃ一応は乗せてもらえるみたいだけど……」

「ああ、俺が乗り手に相応しいか試験してくれるらしい」

その言葉の通り、公孫贇から受け取った鞍を背中に乗せても白天王は嫌がるそぶりを見せなかった。

どうやら、本当に一刀を背中に乗せて試す気らしい。

「ふむ。大人しく鞍をつけられているところを見ると、やはり一刀殿には見込みがあると言うことでしょうか」

「白蓮、どこか迷惑にならずに思い切り走れるところはないか？」

星がしきりに頷く中、白天王の体に鞍をしつかりと装着させていた一刀からの問いかけに、公孫贇は右手の方を指し示した。

「それなら厩舎を出て右手に行けば直ぐに街を出られるようになってる。星、門衛にこの事を伝えてきてくれるか」

「承知。では一刀殿、楽しみにしていますぞ」

「ああ。トビきりを見せてやるよ」

厩舎から出て行った趙雲を尻目に、一刀は装着した鞍の具合を確かめると、白天王の手綱を引いて厩舎の外へと出た。

そこで一刀は白天王の背に勢いよく跨ると、白天王の腹を蹴った。

「はッ！」

一刀の掛け声と共に白天王が駆け出し、僅か数歩で最高速度に達する。

いきなりの事に何かを言おうとする公孫贇の姿が見えたが一刀はそれを無視して白天王を走らせる。

白い風となった白天王と一刀は、余りの速さに驚く門衛と趙雲の姿を尻目に開けられた街の門から身を躍らせると、街の外周部を走り始めた。

風になって走る一刀はもちろん、白天王もどこか心地よさそうに大地を駆ける。

そんな白天王の気持ちを読み取った一刀は笑顔で白天王に問いかけた。

「どうだ、白天王よ。俺の走りは？俺はお前の乗り手足りえるか？」

だが、白天王は何も応えない。しかしこれは一刀を嫌ったの事ではないことは一刀自身が一番良くわかる。

白天王は初めて乗り手にその身を任す心地よさに酔っているのだ。今まで体感したことのない快感に身を打ち震わせているのである。

その心を汲み取った一刀は笑顔で白天王に言ってやった。

「ならば、我と共に来い白天王。我と共に道を征き、その道にお前

の軌跡を示せ。お前にはそれを成すだけの力がある！」

この言葉に白天王は減速して立ち止まると、前足を大きく上げると、喜びの嘶きを上げた。

それは白天王が一刀を主と認めた証。

その白天王の嘶きに一刀は大きく頷く。

「そうか。ならばお前は今日から我のものだ。お前の歩む道は我の道であり、我の歩む道はお前の道でもある……よろしく頼むぞ我が愛馬、白天王よ」

それから暫くは、遼西の大地に白い風が吹き荒れたとか吹き荒れなかつたとか。

玖話

遼西の街の外周を白天王に跨り一周した一刀は厩舎へ続く門へと戻る。

そこには、この騒ぎを聞きつけてきたのであろう。兵や民衆が門の前へと詰め掛けていた。

その中には周倉たちの姿も見える。

白天王の姿と、それに跨る一刀の姿に兵の中からどよめきの声があがる。

そんな中、白天王から下馬した一刀は白天王に一言いつて聞かせると、その手綱を驚愕の表情で眺めていた厩舎の責任者に差し出した。

「あ、あの……これは？」

その手綱の先に繋がれる白天王の姿に震えながら問う厩舎の責任者に、一刀は心配ないといった様子で手綱を握らせた。

「白天王には俺から言いつて聞かせたから、背に乗ろうとする以外では襲われることはない。だから安心して普通の厩舎で休ませてやってくれ」

一刀の言うとおり、手綱を握つて引いてみても白天王は暴れもせず静かに後をついてくるではないか。

これがあれだけ手を焼かされた、じゃじゃ馬かと不思議に思えてくる。

しずしずと静かに歩むその姿は、その美しい毛並みと相まって、まるで深窓のご令嬢のようではないか。

「わ、わかりました」

それほどの白天王の豹変振りに目を白黒させながら、厩舎の責任者は一刀に一礼すると厩舎の方へと白天王を引いていったのだった。

「よろしく頼む」

そう言つて厩舎に戻る白天王の後姿をしばし見守つた一刀は、そんな白天王の姿を啞然と見ていた公孫贇に声をかけた。

「白天王、とても良い馬だ。でも本当にあんなにいい物を貰つてもいいのか？」

自分を満足させた、かつての愛馬 騅に勝るとも劣らない白天王の走りに、つい一刀はそう聞いてしまった。

これほどの名馬、やはり貰つてもいいものか。

そう思つた一刀であつたが、公孫贇は笑顔で返してくれた。

「あんなのを見せられたら、お前に譲る以外の答えはないさ。こちらこそ白天王をよろしく頼むよ」

まるで恋に目覚めた乙女のような白天王の姿がよほどおかしかつたのだらう。白天王に対して常々思つていた本音を口にする。

「それに人を乗せない馬など、あつてもただの金食い虫だからな」

そこまで言つた公孫贇は、ふと思案に耽る。

確かに白天王は名馬であるが、これまでは公孫贇軍のお荷物であったのだ。それを見事に乗りこなした一刀へ贈ると言うのは、何か厄介者を押し付けてしまったように思えたのである。

これでは差し引きしてもマイナスである。恩を返すつもりが、余計に恩を感じる羽目になってしまった。

公孫贇は何とか頭を絞り、代わりとなるものを考える。

すると、白天王を一刀に与えた理由　旅路に役立つものをつと理由を思い出した。

そして一刀が乗っていた白天王を眺めながら、しきりに何かを語り合う周倉たちを見て考えた。

そう言えばこの者等は北郷殿の部下であったな。北郷殿のみが乗馬となれば旅の行程も狂おう。ならば彼等にも馬を与えて……いや、長旅になるならば馬車が良いか。あとは旅の道具を用意すれば……………。

そこまで考えた公孫贇は、よし！　と頷くとこの場に集まっていた兵士の何人かに命を下した。

「旅をする北郷殿のため、馬二頭と馬車を用意しろ。馬車には旅に必要な物資を満載しとけ！」

いきなりの事に唾然になる一刀をよそに、趙雲も妙案があるのか、周倉たちに手をむけて発言する。

「白蓮殿、それならば一刀殿の部下たちの装備も整えられてみては？　一刀殿の武器や装束は立派ですが、やはり主君の器は臣下に見るもの。あの三人では一刀殿が軽んじられてしまいます」

臣下への評価は、そのまま主君の評価になる。

これは常識だ。

その常識に照らしあわすのであれば、彼等三人の容貌は一刀の評価を落とすことはあっても上げることはない。

「そう言われてみればそうだな。ならばそれも用意させよう」

そう言つて別の兵士を鍛冶屋へと走らせる公孫贄の姿に、やっと一刀は声を出すことが出来た。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 白天王という名馬を貰った以上、これ以上の物を貰う必要はないって！」

これ以上の事をして貰う云われはない。

そう思つての一刀の言葉であつたが、公孫贄はそうではなかつた。

「これはこつちの自己満足だよ北郷殿。贈り物が白天王だけじゃ、厄介者を引き取ってもらつたみたいで、何だか気持ちが悪くつてな。それに北郷殿一人が馬上だと、旅も思うように進まないだろう？ まあ、ついでと思つて受け取ってくれ」

「それに周倉殿の剣は折れている様子。どちらにしろ、この街で新調するおつもりでしたでしょう？ ならば白蓮殿のご厚意、受け取り成され」

確かに一人が馬上で、あとが歩きでは旅の行程は両者にとって辛いものになるし、周倉の剣を新調するつもりでいたのも確かなことだ。

今の一刀にとって、この申し出は非常にありがたいものである。ありがたいのであるが……。

しかし、ここで断るは公孫贄の顔を潰すことになると考えた一刀は、敗北を認めるように両手を挙げて微笑を浮かべた。

「……わかった。白蓮の気持ち、ありがたく頂くよ」
「そうしとけ、そうしとけ」

そんな一刀の姿に笑顔で首を縦に振る公孫贄に、それはそうと一刀は話を振る。

「ここまでの事をして貰ってで悪いんだけど、一つ頼み事いいか？」
「当然、北郷殿の頼みだ。よほどの無理難題でない限り無碍にはせんよ」

「よかった。なら、この街で珍しいものを蒐集している商人がいれば紹介してくれないか？」

「それなら、大通りに軒をつられる商人が蒐集家として有名ですが……一刀殿は彼の商人に何用で？」

この一刀の申し出に首を捻る趙雲に、一刀は胸ポケットから一本のボールペンを取り出すと二人に見せた。

「これを売って路銀にしようと思ってね。なら、その道の人に高く買ってもらったほうがいいと思って」

これこそが先に一刀が述べていた金のあてである。

この時代には分不相応な文明の道具。

一刀が見せたボールペンを不思議な様子で見入る二人の姿は未来から来た一刀が見るに、失礼ながら非常に滑稽であった。

何とか笑いをかみ殺す一刀に、趙雲は視線をボールペンの固定したまま問いかけてきた。

「これは、棒……ですか？」

「そう見えるだろうけど、実はこれ筆なんだ」

この一刀の言葉に二人は驚きの声を上げた。

「筆！？　これがか！！」

「毛のない筆とは、何と面妖な……」

当然といえば当然の二人の驚きは辺りに伝播し、周りを囲んでいた人々が一刀の手元を一気に覗き込んできた。

誰もが好機の目で一刀のボールペンを見つめるこの状況は、期せずしてデモンストレーションにはもってこいの状況だ

狙っていなかった現象ではあったが、これ幸いにと一刀はこの状況を利用することにする。

「まあ、見てみな」

そう言っつて、一刀はボールペンの芯を押し出すと、自分の手の甲にスラスラと字を書いていく。

黒いインクで次々にかかれて行く文字に、辺りはどよめきに包まれた。

公孫賛と趙雲もまた、それぞれに驚嘆の声を上げる。

「お、おお！？　墨もつけてないのに字が書けている！？」

「これはいよいよ持って面妖な一品……　もしかや仙人の寶貝では？」

ここまでの反応が貰えたのならば、デモンストレーションは上々だろう。

そう一刀は判断すると、ボールペンの尻を押し芯をしまつとボールペンを掲げて説明を再開させる。

「これはボールペンといって俺の国の筆なんだ。この大陸にあるの

はコレ一本のみ。好事家が見ればかなりの高値で買ってくれると思うんだが、どうだ？」

一刀以外に未来からの来訪者がいて、尚且つその者が持っているばそうとも言えないが、そのような確率など天文学的な数字だし、二つも三つもあつたとしても数が少ないことには変わりはない。

ならば希少価値としては格段に高い、このボールペンはかなりの値がつくはずだ。

そう考えた一刀の考えは、まさにその通りだった。

「ああ。これ程の逸品なら好事家でなくとも、かなりの値がつく……なあ、北郷殿」

そう言ってお墨付きを与えた公孫贄は視線をボールペンと、それで書かれた文字の間を歩き来させながら言葉を続けた。

「この、ぼうるぺんだったか。これを私に売ってくれないか？」

「えッ!? いいのか? でも白天王だけじゃなく、馬や馬車、兄たちの装備まで面倒見てもらった白蓮にこれ以上してもらうのは……」

一刀の言うとおり、ここまでしてくれた公孫贄にこれ以上の事をしてもらおうというのは気が引けることであつた。

そんな一刀の言葉を公孫贄は笑顔で一蹴する。

「それは違つぞ、北郷殿。白天王や馬車は遼西の太守としての恩返しだが、これの買取は極々個人的なこと。友の一助になろうと言う、北郷殿への私からの友情だ。それに、大陸で一つしかないと言う物を持つのは太守として箔がつくと言うものだし、ここどころ政務だ賊の討伐だと忙しすぎて金が溜まるばかりでな。使う暇がな

かったんだよ。これはいい機会さ」

そこまで言われては一刀とて断る理由はない。
手に持っていたボールペンを公孫贇へと差し出した。

「……わかった。そういうことなら願います」

「ああ。じゃあ支払いは屋敷に戻ってからということだ」

一刀から受け取ったボールペンを懐に入れた公孫贇は、一刀を屋敷の方へと誘いながら言葉を続ける。

「それと、今日は色々あったとはいえこの界隈の賊徒を殲滅できたし、白天王の乗り手も見つかった。そんなめでたい今日の日を祝い、宴にしよう。主賓はもちろん北郷殿だ」

「おっ！ いいですなあ白蓮殿。では私も秘蔵のメンマを振舞いましょう」

屋敷への道すがら楽しげに話す、公孫贇と趙雲に後ろをついてきていた裴元紹がおずおずと言った感じで問いかけた。

「あのお、それはオイラたちも参加しても……？」

「もちろん。北郷殿の部下であるならば、お前達も北郷殿と同じく客人だ。今夜は好きに飲んで食ってくれ」

この返事に裴元紹と程遠志は飛び上がって喜んだ。

何せ酒もご馳走も、トンとご無沙汰であったのだ。これを喜ばずして何を喜べと言っのか。

「よっしゃあああッ！ 久しぶりの酒だ！ 飲みまくりやすぜ！！」

「た、食べ放題なんだな！」

しかし、そんな浮かれあがる二人の頭に周倉が手痛い拳骨を落とすとともに、額に青筋を浮かべて二人に怒鳴った。

「おい！ あんまり旦那に恥をかかすような見つとも無い真似するんじゃない！ 俺らは昨日までの賊とは違って、今は栄えある旦那の家来なんだからな！！」

頭を抑えて涙目になる裴元紹と程遠志は、その余りにも殺生な兄貴分の言葉に情けない声を上げる。

「そ、そんな〜！」

「後生つす！ 後生つすよ、アニキ〜！」

しかし目の前にご馳走があるのに、それを前にしてお預けなど余りにも不憫だ。

それに、部下に酒を飲ませずに自分だけ飲むと言うのも何だか気分のいいものではない。

そう思った一刀は、弟分に説教を聞かせる周倉の肩を一つ叩いた。

「まあ、兄。今日くらいはいいだろう」

「しかし、旦那……」

一刀の言葉に、まだ何か言いたげな周倉であったが一刀は微笑を向けて、もう一度周倉の肩を叩く。

「俺に感謝する兄の気持ちも嬉しいが、そんなんじゃないや直ぐに倒れてしまうぞ。羽目を外せとまではいわないが、明日に酔いを残さない程度に兄たちも楽しんでくれ」

この言葉に裴元紹と程遠志は、まさに地獄に仏と一刀を仰ぎ見た。

「さっすが旦那！」

「は、話しがわかるんだな！」

またしても調子に乗り出した弟分に拳骨を落とそうと拳を握り締めた周倉だが、一刀の微笑みを前に、その拳を解くと、笑みを持って主君である一刀に返した。

「……わかりやした。俺も道半ばで倒れるのは本望じゃありやせんからね。今日は楽しませていただきやす」

そんな周倉の言葉に一刀は、よろしいと一つ頷いたのだった。

拾話

公孫贇から白天王を譲り受けてから数日。

その白天王に跨る一刀と、馬車に揺られる周倉たち一行は幽洲の大地を歩んでいた。

「いやあ、それにしても旦那。公孫贇の姐さんは太っ腹なお人でしたね」

そう言って馬車の手綱を握る周倉の姿は数日前とはまるで違っていた。

一刀が纏うフランチエスカの制服と同じく白を基調にした軽装鎧を身に纏い、その腰には無骨ながらも業物の雰囲気が漂う長剣が差されていた。

もちろん衣装や得物が変わっているのは周倉だけではない。

「へへッ。なんだか俺たち、生まれ変わったみたいでさあ」

「だ、旦那とお揃いなんだな」

馬車の中から顔を覗かせた裴元紹と程遠志の装備も、周倉のそれと同じ色使いだった。

しかし、それぞれに大きな差異が見受けられる。

周倉の鎧は軽装といえども胸部や腕、足などの重要なところを護る部分は鉄製で出来ているのに対し、裴元紹は素早さを重視してか全てが皮製。程遠志は裴元紹と対極で、兜こそないものの全身を金属の鎧で覆っている重装備だ。

それぞれに与えられた武器も周倉は長剣、裴元紹は弓と短剣、程遠志は巨大な楯と槍といった風に見事に攻撃、支援、防御と三拍子

揃っていた。

しかし、馬子にも衣装とはよく言ったものだ。

先日まではただのごろつきにしか見えなかった彼等が、こうやって身なりを正してみると立派な一介の武人に見える。

勿論の事、遼西の太守が手配した武具だ。彼等が身に纏う武具の数々はどれを見ても一級品。

白天王に跨る一刀と並んでみても恥ずかしくないほどであった。そんな彼等の姿を見た一刀は苦笑を浮かべつつ言葉を返す。

「白天王だけで十分だって言うのに、ここまでしてもらっては逆に心苦しくはあるけどな」

「それに旦那のぼうるペン……でしたか？ それも、えらい高値で買い取ってもくれやしたしねえ」

そうなのだ。

あのボールペンの代金にと公孫贄が一刀に渡した金額は、後になつて周倉に聞いてみたのだが彼等が三ヶ月は遊んで暮らせるほどの大金だったのである。

そうまでされて、何も感じないほど一刀は厚顔無恥ではない。

「まったく……本人はこれで借りを返してゼロにしたつもりだろうが、逆にこつちが借りを感じてしまったよ」

「まあ、生きてりやまた会うこともありましようや。その時に返しやしよう」

「そうだな」

一刀は周倉の言葉に頷きながら天高く蒼が貫く空を見上げた。

雲ひとつない蒼天の空。しかし大陸の現実、この空のように晴

れ渡っているわけではない。

これから先はまさに乱世の世だ。関羽の部下となるべき周倉が一刀の元にいたり、趙雲や公孫贇が女だったりと、一刀の知る歴史から違う道を辿ってはいるが乱世の予兆はそこかしこにある。

賄賂の横行、重税に苦しむ民、賊徒の暴動。

未だに黄巾の乱 周倉たちに聞きいたところ黄巾党はまだ結成されていないらしい は起こってはいるが、この世界でも恐らくはそれを皮切りに漢王朝の弱体化が露呈し群雄化割拠の時代となるであろう。

そして史実をなぞるならば公孫贇は袁紹によって滅ぼされる。

なら借りを返すのは、このタイミングになるだろうな。

そう考えながら風の向くまま、白天王を進ませていた一刀であったが不意に甘い匂いが風に乗って鼻をくすぐった。

「うん？ この匂いは……」

鼻に香る匂い。

それは、ここ大陸では不老長寿の象徴である果実の匂い 即ち、桃だ。

その桃の匂いに周倉も気がついたようで、その胸に甘いにおいを満たすかのように大きく息を吸った。

「桃っすね。この近くに桃園があるんでしょう」

「そういえば、今は桃の花が咲く時期か」

日差しは暖かく、風は優しいそよ風。

まさに春の天気だ。

「ええ。春も麗らかな時期ですから……どうしやす？ 寄っていきやすか？」

何となしに言った、この周倉の言葉に一刀が何かを答える前に裴元紹と程遠志が喰いついた。

「旦那、ここは是非寄っていきやしょう！ ここに酒と肴もある」とですし！！」

「は、花見なんだな！」

馬車の物資の中に詰め込まれていたのだろう。

その手に酒とメンマの壺を掲げながらはしゃぎ出す二人の弟分の姿に、またしても周倉はこめかみに青筋を浮かべた。

「またお前えらは！ 公孫贄の姐さんのところでアレだけ飲んで食ったつてのに、まだ足りねえのか！！！」

「い、いや……そうはいいやすがねえアニキ……」

「は、花見をしながらの酒はまた格別なんだな……」

それでも未だに愚図る二人の弟分の姿に周倉は拳を握り震えさせた。

すわ、二人に周倉の拳骨が炸裂かと思われた瞬間、一刀が呟くようにして言葉を紡いだ。

「ふむ……花見か」

この言葉に竦んで頭を抱えていた裴元紹が、活路を見出した戦士の如き勢いで一刀に問いかけてきた。

「やっぱり旦那も花見に興味があるんで！？」

「ああ。俺の故郷では梅や桜を愛でながら花見をしたもんだが、桃つてのは初めて　いや、すごく久しぶりでな。興味がないといえは嘘になる」

「そ、それなら是非行くべきなんだな。これだけのいい匂いがするんだから、きつと大きな桃園なんだな！」

しかし彼等、よほど花見　　というか、それにかこつけて酒が飲みたいのだろう。

何とというか必死さがにじみ出ていた。

そんな二人の必死さに一刀が笑みをかみ殺す中、我慢のならない人物が一人　　。

そう。彼等二人の兄貴分、周倉だった。

「お前えら……そこに直れ！　修正してやるッ！」

もう我慢ならんとばかりに、手綱から片手を外して馬車の中にいる二人を捕まえようとするのだが完全に手綱を離すわけにもいかず、二人に手が届かない。

はたから見ればじゃれ合ってる様にしか見えない彼等の光景に、とうとう一刀は笑みを抑えきれずに噴出してしまった。

「はっははははは！　本当にお前達は見てて飽きないな」

「だ、旦那あゝ。旦那もこいつらにビシッとやってくださいよ」

カラカラと白天王の背で笑う一刀の姿に縋る様な調子で言ってきた周倉に対して、一刀は一つ頷きながら言った。

「そうだな。行ってみるか、花見」

「や、やったんだな！」

「オイラ、旦那についたこと本当に感謝してるっすよ！」

「ちょッ!? 旦那!?!」

一刀の言葉に裴元紹と程遠志が喜びの声を上げるなか、声を上げかけガクリと肩を落とした周倉は、少し恨めしげな視線を一刀に向けた。

「旦那はあいつらに、ちと甘えんではないですか？」

「締めるだけが部下の扱いではないぞ兄。時には働きに報いてやらないとな」

「……俺も含めてですが、あいつらは未だに旦那の恩に報いたことはいやせん。それなのにですか？」

一刀の臣下になってからというものの日の浅いのもあるが、周倉たちが何か一刀の役に立った覚えなど一つとてない。

唯一の戦いだった趙雲を救ったときの戦いだった一刀に言われたとおり観ていただけ。こうやって旅の物資を運ぶ馬車の御者をやっているものの、これしきの仕事、仕事の内には入らない。

周倉はそう自分達を認識していたが、雇い主たる一刀は違ったようだ。

一刀は笑みを周倉に向けながら言っただけ。

「少なくとも、こうして話をしてくれたり笑わせてくれたりして旅の無興を慰めてくれているじゃないか。一人旅はやっぱり孤独だからな。俺は今の賑やかなのがいいよ」

そうまで言われては、周倉としても何となく気恥ずかしいが悪い気はしない。

それに、自分達の事をそう評価してくれるのは後にも先にもこの

一刀のみだろつ。

周倉は、そんな主君の言葉に頭をたれた。

「あいつらの五月蠅さが旦那の役に立っているってえんなら恐縮です」

「もちろん、兄が締めるところを締めしてくれるのはありがたく思っているよ。俺はまだ彼等の全てを知っているわけじゃないからな。そこからへんの匙加減は兄に任すよ」

「はッ！ お任せを！！」

そう言ってくれた一刀の言葉に周倉は笑みも持って頷くと、馬車の進路を桃の匂いが香る方向へと向けたのであった。

小高い丘を越えた先、甘い匂いを漂わせる桃園はそこにあつた。しかしその桃園は、一刀たちの想像を遥かに超えたものだった。

「匂いから規模が大きいとは思っていたが……」

「こりゃ、おつたまげましたね」

「みてくませえ。全部満開つすよ！」

「だな。オイラもここまで立派な桃園は初めてなんだな」

彼等の言葉が述べるように敷地面積は野球場一つが丸々治まるくらいに広い。

そんな広い敷地の中に大輪の花を咲かせた桃の木が幾十幾百と植えられ、その全てが満開に花開かせていたのである。

桃の木が植えられた中を馬車の通れる大きな道を選びながら通つ

ていくうちに、周りに比べてみても一段大きな桃の木が眼に入った。

「おつ、あそこがいいな。兄、馬車を止めてくれ」

「了解しやした」

大きな桃の木の側に白天王を泊めた一刀の横にピタリと馬車が停止する。

馬車の御車台から降りた周倉は、同じく馬車から出てきた弟分二人に早速命令を下す。

「おい！ チビ、デク、馬車から敷物を出せ！ 飲みたいからにはしつかり働けよ！！」

「了解！！」

ここところは流石、賊として行動をともにしていたことはある。周倉が指示を下し、体の小さな裴元紹が狭い積荷の中から敷物を探し出し、程遠志が運び広げる。

その連携にはまるで無駄がなかった。

この三人、各自戦わずよりも三人一組で戦わせた方がいいかもしれないな。

そんな三人の連携の良さに一刀が頭の中で三人の動きからフォーメーションをシミュレートする中、どこかしらか一刀たち以外の声が聞こえてきた。

「愛紗〜！ 早くするのだ！！」

「そうだよ〜。急がないと、お花散っちゃうよあ〜！」

「鈴々、桃香様も！ 何も急がなくても急に花は散ったりはしません！！」

声からするに女三人といったところか。
声は段々と近づき、そして遂に木々の間から、その女　少女たち
姿を見せた。

「まったく。少しは二人共もう少し落ち着きというものをですね

「愛紗く、こんなところまで来てお説教は勘弁なのだ……あれ、誰
かいるのだ？」

「あつ、本当だ！　先客さんがいる」

長い黒髪が美しい娘に、首に赤いマフラーを巻いた小さな娘、そ
してその二人に挟まれた桃色の髪を伸ばした優しげな娘。

そんな彼女達の見目麗しい姿に、つい周倉も昔の癖で口笛を吹い
てしまう。

しかし、一刀は彼女達　いや彼女を視線に捉えた時から驚くほ
どに眼を見開いていた。

かつての記憶が甦る。

俺が我であった頃の記憶。共に実力を認め合って義兄弟にな
り、ついには覇権をかけて死闘を演じた友がいた。

彼女のその優しげな瞳が、全てを包み込んで溶かしてしまいそう
な瞳が、かつての友の瞳と重なり合う。

そう。我が義兄弟にして最大の敵でありながら、最後の刻まで友
と思つた彼の名は　。

「劉……邦……」

誰に聞こえるともない呟きを、桃園の桃たちは確かに聞いたので

あつた。

捨巻話

「劉……邦……」

誰に聞こえるとなしに呟いた一刀の心に、また一つのピースが収まった。

劉邦。

それはかつての一刀と義兄弟の契りを交わし、共に戦った友の名かつての一刀と同じく天下に覇を唱え、終にはかつての一刀を降し天下を取った男の名。

今の今まで思い出せなかった、かつての友 劉邦の姿や声が今はハッキリと昨日のように思い出せる。

酒にだらしなく、特に秀でたところがあるわけでもない、ただの男。しかし、不思議と劉邦の周りには人が集まっていた。

その中には名将もいれば名軍師もいた。そんな彼らが劉邦の足りないところを補っていったのだ。

そして何よりもまず民草を思い、民草のための政をする。

その姿勢にかつての一刀は、彼にならばと国を二つに分けることを提案したのだ。

我が友、劉邦ならばきっと我が国に勝るとも劣らない良い国をつくるはず。

そう思ってこそ、本来ならばどちらかが屈服するまで続く戦を国を分けてまで終わらせたのだ。

しかし、そこで劉邦の取った行動は和議が成ったことに安堵の息

を漏らす敵軍への強襲だった。

この強襲が決定打となり、天下は劉邦の物となったのである。

友情を裏切った友　本来ならば憎しみ、怒り、憤るところであるが一刀は違った。

戦が終わると、そう笑顔で和議を交わした彼が……あの人の関わりを何よりも大事にする彼が約束を反故にするはずがない。

そう信じて疑わなかったのである。

恐らく絶対的な勝利にこだわる家臣の言が大きすぎ、聞き入れる他なかったであろう。彼にとっては身を切る思いで強襲の命令を出したに違いない。

そもそも戦の勝敗など兵家の常だ。騙し騙されも策の内、恨むと言うのも筋違いというもの。

だから一刀には彼に対する恨みはない。

それどころか、彼と同じ瞳を持つ桃香と呼ばれた少女に喜びと懐かしさが湧き上がってくる。

彼女は似ているだけで劉邦ではない。

当然といえば当然のことを頭では理解できるが今一度、かつての友と友誼を交わしたい。

その欲求が一刀の足を前へと踏み出させた。

「やあ。君達も花見かな？」

懐かしさに若干声を震わせながら問いかけた一刀の言葉に、桃香と呼ばれた少女は笑顔で頷いた。

「そうですよ。見たところ旅をしていらっしやるようですが、そち

「らもお花見ですか？」

「ああ、甘い匂いに誘われてきてね。どうだろう？　ここで会ったのも何かの縁だ。一緒に花を愛でながら一杯やらないか？」

しかしこれ、傍から見るとナンパである。

本来ならば女の子に対してこんな誘いの文句は言わないはずの一刀であるが、相手がかつての友の面影があるとなると話しは別のもうだ。

そんな一刀の誘いに、彼女は笑顔で頷いた。

「いいですねえ。じゃあお言葉に甘えちゃおうかな……いいよね？」

愛紗ちゃん、鈴々ちゃん

「断る理由はありませんからね」

「大勢でお花見したほうが、より楽しいのだ！」

連れの二人からも了解が取れたところで、一刀は三人を周倉たちが用意した敷物の方へと案内する。

「じゃあ、三人はこつちへ」

「かたじけない。ええっと……」

そこで礼を言おうとした黒髪の少女だったが、未だに一刀たちの名前を聞いていないことに気がついた。

そんな中、一刀の頭に差した虞美人草を見た小さな少女が名を問うてきた。

「お花のお兄ちゃんは何て言うのだ？」

花を頭に差しているから、お花のお兄ちゃん　　なかなか言い得て妙だ。

そう呼ばれた一刀も未だに互いの名前を知らない現状を認識した
ようで、今一度少女たち三人の方を振り返ると一礼した。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は北郷一刀、見ての通り
旅人だ。そしてこつちが」

「旦那の家来筆頭、周倉です」

「裴元紹っす」

「て、程遠志なんだな」

「ご丁寧にどうも。私は劉備、字は玄德だよ」

「私は桃香様の一の家臣、関羽。字は雲長だ」

「鈴々は張飛！ 字は翼徳なのだ！」

そうして互いに名前を交換したところで、またしても一刀は驚い
た。

劉備、関羽、張飛 それは三国志の主人公に位置する大物の名
前だ。特に劉備。この時はまだ一介の侠であるのだが、そこから身
を興し後に蜀の王となる傑物である。

そんな彼らが趙雲や公孫賛と同じように、ここでは女であったの
だから一刀の驚きは当然といえば当然と言えよう。

しかし既に趙雲や公孫賛という事例を知っていたからか、幾分か
驚きは緩和されているようだ。

だがそうなつてくると、いよいよ持つてこの世界は一刀の知る歴
史とは違っていることを認めざるを得ない。ひよつとすれば曹操や
孫堅、呂布までもが女である可能性が出てきたのだ。

そんな可能性を頭の隅に浮かべつつも、一刀は劉備の名前になる
ほどと言ったように頷いていた。

そうか。彼女が劉姓ならば彼に似ているのも頷ける。

三国志では自分を中山靖王、劉勝の末裔とうそぶいていた劉備であるが……なるほど。ひよっとすればそれは本当の事だったかもしれない。少なくともこの世界の劉備は劉邦の血　と、というか魂を色濃く受け継いでいるのだから。

自己紹介を終えたところで関羽が一刀の雌雄一対之剣や白天王、周倉たちの鎧に視線を映す。

「しかし、その装備に馬の質……もしや名のある豪族の方ですか？」

やはり今の周倉たちの身形だと、そうとう立派な一団　それこそ豪族の子息とお付の護衛に見えるらしい。

いつか周倉が言っていたのと同じ言葉に、一刀は笑みを浮かべると首を横に振った。

「いや、俺自身は庶人の出だよ。周倉たちも元は山賊だ」

「でも、すっごい立派な剣や馬なのだ。それにお花のお兄ちゃんのお服、鈴々たちのと何か違うのだ」

「本当だ、日の光を反射してる。絹かな？」

「そう言えば俺達も旦那の服は不思議に思ってた。それは一体何なんで？」

張飛の指差した先を周倉たち家臣を加えた六対の視線が見つめる。そんな皆からの視線に多少のくすぐったさを覚えた一刀は、苦笑しながら自分の纏うフランチェスカの制服を摘んで言った。

「ああ、これはポリエステルって言う化学繊維なんだけど……理解できないよな」

「ぽりえすてえる？　かがくせんい？」

案の定、劉備をはじめ全員が首を捻る。

そんな彼らに一刀は苦笑しながら説明してやった。

「石油　燃える水から作った布だよ」

この説明に当然、皆は驚いた。

「なんと！　燃える水から服を作れると!?!」

「すっごいのだ！　だからキラキラ光っているのか!?!」

「旦那はやっぱり仙人か何かなんで?」

何といつても千八百年も後の技術である。

彼らにしてみれば、それは仙術や道術となんら変わるものではない。
い。

だが仙人かと問われれば一刀の答えは当然、否だ。

「俺は仙人でも道士でもないよ。ただ、俺の国には燃える水から布を作る技術が当然のようにあるだけさ」

「……俄かには信じられません。そのような摩訶不思議なことができる国があるなどと……貴方が仙人であると言ってくれたほうが余程納得がいきます」

「だよねえ。北郷さんの剣も馬もすっごい立派だし……ねねっ、本当に北郷さんは仙人様じゃないの?」

「火も吹けなければ空も飛べない、真正正銘ただの人間だよ。雌雄一対之剣は鍛えられたのは大陸だけど、紆余曲折あって俺の国にやって来たヤツを持ってきただけだし、白天王は白蓮　公孫贇のところで貰ったものだから」

一刀が不意に出した公孫贇の真名に、劉備は大声を上げて驚いた。

「白蓮ちゃん!?　北郷さんは白蓮ちゃんを真名で呼ぶ仲なんです

か!？」

自分の友人の名前を気安く呼ぶ者がいきなり現れたとなれば、この反応は当然だろう。

一刀は一つ肩をすくめると、そこまでに至った経緯を簡潔に述べる。

「成り行きで白蓮の軍を助けてな。この白天王や馬車はそのお礼なんだ」

「へえ、そうなんだ。白蓮ちゃんは変わらないなあ」

しみじみと頷く劉備に、一刀は三国志の中の劉備と公孫贇の関係を思い出した。

「そういえば、劉備は白蓮と同門だったか」

若かりし頃の劉備と公孫贇は盧植という人物の元で机を並べて共に学びあった仲のはず。

そう思っただけの言葉であるが、ひよっとすれば一刀のいた世界とは違うこの世界の事だ。違う関係を築いているのかもしれない。などと思っただけであったが杞憂のようだった。

「そうなの。昔、一緒に盧植先生の元で学んだんだ。北郷さんってば、そんな事まで白蓮ちゃんから話してもらってるだなんて、すごい信頼されてるんだね」

そここのところは概ね同じ歴史を辿っているらしい。

まあ最後の一文は公孫贇から話してもらった訳ではなく、ただ知識として知っていただけであるが……そこは言わぬが吉というものだ。

だが、公孫贇から信頼されていないかといえばそう言うわけでもない。

一刀は白天王の顔をさすりながら苦笑を劉備へと返した。

「こつちが借りを感じてしまつくらいの贈り物をされるくらいには信頼されているな」

この一刀の言葉に何かを閃いたのか、劉備は一刀の元へと詰め寄った。

「あつ！ それなら白蓮ちゃんのところの軍はどうだった？ 実は私達、その白蓮ちゃんのところでも働こうって思って遼西を目指してただけど、将として雇ってもらえなかつたらどうしようって思ってたの。北郷さんの眼から見て、私達は白蓮ちゃんの軍に将として入れてもらえるかな？」

劉備のその言葉に、一刀は公孫贇軍の陣容を思い浮かべる。

と、言っても思い浮かべなければいけないほど公孫贇軍の陣容は厚いものではない。

いや、この言い方では語弊があろう。公孫贇軍の兵の数は決して少なくはない。

あの時は演習中の不幸な遭遇戦ということで三百対千という兵数で遅れを取ったが、実際のところ公孫贇軍の正規軍総兵力は千五百に上る。

それだけの数を揃えておきながら、なぜ公孫贇軍の陣容が薄いのか。答えは至って簡単。将と呼べるものが一人しかいないのだから。

「そうだな。現時点での白蓮の軍で将と呼べるのは客将の星 趙雲の一人だけだ。音に聞こえる青龍偃月刀の関雲長や燕人張飛ほどの武人なら、まず問題なく将として雇ってくれるよ」

そして彼女達があの関羽や張飛だと言うのならは何ら問題はないと、というか公孫贛は諸手を挙げて喜ぶことだろう。そう思っつての言葉に彼女達は顔をほころばせた。

「ほう。そこまで我が名が売れているとは思いませんでしたな」
「にやはは。何か照れるのだ」
「当然だよ。愛紗ちゃんと鈴々ちゃんはとっても強いんだから」

太鼓判を推された三人がキヤイキヤイと騒ぐ中、一刀は馬車から取りだした酒の入った瓢箪と杯を掲げた。

「まあ、何はともあれ乾杯するでしょう」
「サンセーなのだ！」
「これは、かたじけない。少ないが、どうか私達の酒も使ってくれ」
「皆、杯は行き渡った？」

わいわいと手に杯を持ち、それに並々と酒を満たした七人が円陣を組んだところで周倉が首を捻りながら一刀に問いかける。

「で、旦那。いったい何に乾杯するんで？」
「そうだな。劉備たちの仕官を祈って……かな」
「じゃあ私達は北郷さんたちの旅の無事を祈って」

そう言った一刀と劉備は眼を合わせると一刀の記憶にあるように、かつてのように笑いあった。
そして。

「『乾杯ッ！！』」

桃園の一番大きな桃の木の元、七人の杯が天高く掲げられたのであつた。

捨式話

全員で乾杯をした後、一刀一行と劉備一行はそれぞれ思い思いの相手と酒を酌み交わしていた。

すこし、それに眼を向けてみることにしよう。

「でな、鈴々にしろ桃香様にしろ後先考えずに動くものだから、その後の事後処理が大変で……早いところ、ああなればこうなると言う常識を身につけて欲しいと常々考える毎日……」

「わかりやすげ、関羽の姐さん。俺のところもチビとデクが旦那に迷惑をかけねえように気を張る毎日……いや、旦那の役に立ってえんなら何でもしやすが、流石にあいつ等にはそろそろ自分達が旦那の家来だつてことを自覚して欲しいところだして……」

互いに臣下筆頭ということもあるのか、関羽と周倉は皆から少し離れたところで酒をチビチビとやりながら日々の愚痴を言い合っていた。

片や主君と妹分の常識のなさ、片や部下の不甲斐なさを嘆いていた二人は、それぞれの言葉に眼と眼をあわせあう。

「ほう、お主もか。そうやって話を聞くと何だか人事のようには聞こえてこないな」

「奇遇ですね。俺もですよ」

気苦労の耐えない話に、お互いシンパシーを感じたのだろう。まるで相手の話が自分の事のように感じられる二人であった。そんな周倉に対して親しみやすさを覚えた関羽は杯に並々と酒を注ぐと、それを周倉へと差し出して言った。

「周倉殿だったか……仕える主は違えど、共に主を下より盛り立てる者同士。よければ貴公と真名の交換をしたい」

「それは願ってもないことですが……いいんっすか？ 関羽の姐さんほどのお人が俺みたい先輩に真名を預けられるだなんて」

目の前の少女、見た目は見目麗しい黒髪の美女だが周倉は関羽の実力をはつきりと見抜いていた。

立ち居振る舞いには一分の隙もなく、闘気を発していないにもかかわらず滲み出てくる気の流れは豪傑のそれ。腕に覚えがある周倉が立ち会ったところで、三合あわせられれば良い方だろう。

この御仁に勝てる武人は周倉の知る限り一刀しかない。それが周倉の認識だった。

そんな雲の上の武人に真名を許されるなど思いもよらなかったのだ。

「いや。貴公の主への忠義、この関雲長のそれと比べても何ら見劣りするものではない。そんな貴公だからこそ、私は真名を預けたいと思ったのだ」

そうまで言われては周倉に断る理由はない。

周倉も自分が持っていた杯に酒を注ぎ、それを関羽へと差し出した。

「……わかりやした。なら、関羽の姐さんの真名ありがたく預かり

やす」

「うむ。私の真名は愛紗だ」

「確かに受け取りやした愛紗の姐さん。俺の真名は兄です」

「うむ。こちらも受け取ったぞ兄」

互いに真名と杯を交換した関羽と周倉は、高らかに杯を掲げたのであった。

関羽と周倉が真名を交換している頃、こちらでは賑やかな酒の飲み比べが行われていた。

「ぷっは〜。どうしたのだ？ オジちゃん達はここまでなのか？」

「冗談じゃねえ！ ここからが本番よ！！」

「っ、次いくんだな！」

張飛、裴元紹、程遠志が次々と瓢箪や壺に入った酒を飲み干して行く。

その場には彼らが酒豪であると言っ証の如く、瓢箪や酒壺が散乱していた。その数、どう見ても馬車の中にあつた全ての酒を持つてきたと思えない数である。

事実そうであつた。

彼らのお目付け役である周倉が関羽と話を始めたのを確認した裴元紹と程遠志は、これ幸いと馬車にあつた酒をありつたけ持つてきたいたのである。

その大量とは言えないまでも決して少なくはない酒の前に、始まったのがこの飲み比べである。

そんな飲み比べの最中、まるで酔っている様に見える張飛が新しい酒を開けながら飲み比べ相手である裴元紹と程遠志を称賛する。

「鈴々についてくるとは、オジちゃん達もなかなかやるのだ！」

世に酒豪はいたけれども、ここまでついてこれる人間はいなかったよ。張飛はかなりのご機嫌の様子。

機嫌よく新しい酒に手をつける張飛に、二人も負けじと今ある酒を飲み干し新しい酒に手をつけた。

「へっ！ オイラを沈めたけりや、瓶三杯は持って来いつてんだ！」

「お、俺もまだまだいけるんだな！」

しかし、体の大きい程遠志はともかく体の小さい張飛や裴元紹はいったいどこに酒が消えているのだろうか？

すでに酒の量は二人の体積分をとうに超えているようだが……謎だ。

そんな謎をよそに、三人は同時に酒を煽ると喉を鳴らす。

「んつく、んつく……ふあ。でも鈴々についてくるとは、オジちゃん達すごいのだ！ そんなオジちゃん達にケイイをヒョーして、鈴々を鈴々と呼ぶのを許してやるのだ」

「それはこつちの台詞よ。嬢ちゃんこそ、オイラの事は気安くチビつて呼んでくんない」

「お、俺もデクでいいんだな」

何やら三人の間で酒を通じた友情が育まれたようだ。

互いに真名を預けあった三人は、さらに新しい酒を手にとって空に掲げる。

「じゃあ、チビにデク。もう一勝負いくのだ!!」

「おうよ！ 受けて立つぜ鈴々嬢ちゃん!!」

「ま、負けないんだな!!」

酒の席で真名を交換し、さあ、もう一献と酒壺に手を伸ばした時、彼らの背には二人の鬼が立っていた。

誰であろう、関羽と周倉である。

「いい加減にせんか!!」

両者共に額に青筋を浮かべ、鬼の様な形相で酒盛りをする三人へと鉄槌を下すと、それぞれの弟妹分を引っ張り正座させた。

「鈴々！ 己の酒だけならまだしも、北郷殿や兄の酒まで浴びるほど飲むとは、お前は遠慮というものを知らんのか!？」

「チビ、デク！ お前えら、眼を離れたらまたこの乱痴気騒ぎか！ いい加減に賊気分から脱しやがれ、この阿呆共ツ!!」

兄妹からの説教に、さつきまでの勢いはどこへ行ったと言ったのか。三人は互いの体を抱き合い身を震わせることしか出来なかった。

「……でも……」

しかし、何とか言い訳を聞いてもらおうと意を決して兄妹の顔をうかがうように見上げながら口を開こうとするのだが。

「言い訳無用！ そこに直れ!!」

二人の兄妹は相当にお冠らしかった。

桃園に響く説教と悲鳴のクインテットに、大きな桃の木の下で一刀と飲んでいた劉備は申し訳なさそうな顔になり、一刀に頭を下げた。

「なんかゴメンね。騒々しくしちゃって」

「それを言うならお互い様だ。それに、これもまた良い酒の肴になる」

「……うん、確かに。愛紗ちゃんや鈴々ちゃんには悪いけど確かにそうかも」

悪戯つ子の様な一刀の言葉に、劉備も不謹慎ながら笑みを見せる。気心のしれた友のように接する一刀に対し、少し違和感を感じる劉備であったが一刀と飲む酒は不思議と楽しいものだった。

こんなに楽しく酒を飲めたのはどれくらいぶりだろうか。そんな事を思いながら劉備は杯に残っていた酒を胃に収める。

そんな劉備の杯に一刀は瓢箪を掲げた。

「どれ、もう一献」

「あつ。ありがとう」

そう言っただけから注がれた酒に一口口をつけた劉備は、高らかに咲き乱れる桃の花を見上げると、急に真剣な目つきになって呟いた。

「こんな麗らかな日にお花見なんて、今の世の中を見れば信じられないよね……」

劉備の呟きに一刀は静かに耳を傾けながら杯の中の酒をすすする。

「たくさんの人たちが重い税金や襲ってくる山賊に怯えて暮らす今の世の中……私はそんな世の中を変えたい。誰もが笑顔でいられるようにしたい。だから今まで愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの三人で旅をしては困っている人を助けていったの……。でもやっぱり三人じゃ助けられる人は余りにも少なく、他にもたくさん助けを求めている人がいるのに、私たちが助けられない人たちもいて……」

「だから少しでも多くの人たちを助けられるように兵力のある旧友、白蓮の元に行く……か」

自分達の間では足りないから、誰かの力を借りる。

……安直だが確かな方法だ。

劉備は一刀の指摘したことに對して素直に頷く。

「うん。兵隊さんがいれば、今までよりもっと多くの人たちを山賊から護れるし、それが人々の笑顔に繋がることだから。そしていつかはこの大陸を皆の笑顔で一杯にしたい……それが私の夢」

酒に映る自分の姿に視線を移して語る劉備に、一刀は又しても劉邦を重ねてしまった。

どこまでも、それこそ地平線の彼方まで続いているかのような志不純物のない、未だ誰にも踏みにじられたことのない処女雪の様な心。

彼と同じ志を持つ彼女ならば、あるいはと思う。それでも、あえて彼女にこれだけは言っておかなければならない。

そう思った一刀は重々しい雰囲気纏うと劉備に言ってやった。

「一つだけ言っておく。君のそれは傲慢だよ劉備。君の言うそれは

天の道　ただの人が歩むことは適わない道だ。英雄も豪傑も、人である限り誰も彼も救えはしない。俺に言わせれば君の目指す道など取るに足らない夢物語だ」

「で、でも……！」

そう吐き捨てた一刀に劉備が食い下がろうとしたところで、その劉備を一刀が片手を上げて制する。

何かいいたそうな劉備に対し、一刀は笑みを持って返してやった。

「しかし、君がその道を信じるならば、迷わずその道を征け。俺にとっては取るに足らん夢物語だが、君にとってその道は大いなる王道なのだから」

百人いれば百通りの道がある。その中に適わぬと知ってなお、天の道を進む者が一人くらい居てもいい。

その者が信じて進む限り、そこに道はあるのだから。

「北郷さん……ありがとうございます。私、何かやる気でてきちゃった！」

「それでこそ、劉の名に連なるものだ」

一刀の励ましの言葉に頬を赤くしていた劉備は、何か思いついたのか急に飛び上がった。

「えへへ……あ、そうだ！　北郷さん、私達の仲間にならない！？　私が天の道を歩くところ、北郷さんに見せてあげる！　うん、名案！　そうしよう……！」

いきなりの誘い文句に一刀は苦笑する。

しかし、本当にこう言うところもそっくり劉邦そのままだ。しかし、それでこそ劉備は天の道を歩む資格があるということか。

「それは出来ない相談だ。俺は探しモノの途中でな。それを見つめるまで歩みを止める訳にはいかないんだよ」

「じゃあ、その探し物が見つかった時は私達の仲間になってくれる？」

「どうかな？ 未だに探しモノが人なのか物なのか場所なのかも定かでないんだ。この旅とて明日終わるかもしれないし一生終わらないかもしれない。それに言っただろう？ 君の歩む道は俺にとって取るに足らない夢物語だと」

「そうだった……」

「でも一つだけ言える事がある」

一刀の発した最後の一文にガクリと肩を落とす劉備に、一刀は笑顔でこう続けた。

「今は交わらぬ道でも、長い人生だ。いつかは交わる時もあるだろう。その時、またこうして一緒に酒が飲めれば……俺はそう思うよ」

「……うん！ そうだよな。仲間にならなかつてお友達にはなれるよね！」

「友……か……」

劉備から紡がれた友の一言を一刀が反芻する。

まさか、かつての友人の面影を感じる者からその言葉が聞けるとは思わなかった一刀は瞳をそっと閉じた。

今、眼を開ければ喜びで涙が流れてしまいそうだったからだ。

そんな一刀の様子に、劉備はあたふたと手を動かす。

「どうしたの、北郷さん？ あっ！もしかして私とお友達になるの嫌だった？」

「まさか、光栄だよ劉玄德。そうか……俺達はまた友になれるのだな……劉邦……」

心配無用と首を振って答えた一刀の最後の言葉は誰に聞こえらななしに風に溶けていく。

劉備が頭の上にクエスチョンマークを浮かべる中、一刀はかぶりを振った。

「いや、こちらの話しだ……そうだ。ならばいつその事、義兄弟の杯を交わそう」

「それ、名案！ 愛紗ちゃん、鈴々ちゃん！！」

「何でしょうか桃香様？」

「うう……足がしびれたのだ」

劉備の呼びかけに説教を切り上げた関羽と、しびれた足を引きずる張飛が歩み寄ってくる。

ちらりと周倉たちの方を見てみると、そっちの方はまだ説教の途中のようだ。

そんな彼女達に劉備は杯を手渡しながら言った。

「さあ、杯を持って！ ここで私達の義兄弟の契りを結ぼう！！」

ここで一刀は一つ失念していたことに気がつく。

それは、劉備と義兄弟になるということは関羽や張飛とも義兄弟になるということである。

しかも、今この場は桃園。と、いうことは今この場が三国志の各場面として語られる桃園の誓いのシーンなのであろう。

そこに自分が紛れ込んでしまったのである。

しかし一刀にとって、もはやそんな事はどうでもいい事だった。

すでに史実や演技から逸脱しまくりのこの世界だ。ならば何を遠

慮する必要があるのか　そう思った一刀は杯を掲げながら関羽と張飛に笑いかけた。

「と、言うわけだ。よろしく頼む関羽、張飛」

「どついう経緯かはわかりませんが、桃香様がそう言うならば私に否やありません。それに兄の主人となれば兄弟と仰ぐに相応しいお人であることでしょう。私の事は愛紗とお呼びください」

「鈴々も！　チビヤデクと仲良くなったんだから、お花のお兄ちゃんとも仲良くなりたいのだ！　だから鈴々のことは鈴々でいいのだ！　！」

「そして、私の真名は桃香。北郷さんの真名は？」

「ああ、俺の国には真名って文化はないんだ。だから一刀って呼んでくれればいい」

ここに来てからというものの、もはや自己紹介のお約束となった台詞を語った一刀に劉備は一つ頷いた。

「じゃあ、真名の交換も終わったところで結盟だね！」

劉備の言葉に皆が頷き返したところで、四人は杯を天高らかに掲げる。

「我ら四人。この桃園に誓う！」

「我ら姓や出身、歩む道は違えども！」

「同年、同月、同日に生まれなくても！」

「願わくば、同年、同月、同日、同じ場所で死せんことを！」

劉備、一刀、張飛、関羽と続けられた契りの言葉の最後に乾杯の音が重なった。

こうして一刀は劉邦の面影ある劉備と義兄弟の契りを交わしたの

であつた。

捨参話

一刃が桃園で劉備たちと義兄弟の契りを行っていたちようどその頃。

「ありがとうございますー！」

「次、もう一曲行つて見ましょう！」

「姉さん、伴奏おねがいね」

曹操が治める陳留の街で歌を披露する三人の女たちが居た。

彼女達は張角、張宝、張梁の張三姉妹。見ての通り旅芸人で、諸国を回つて歌や踊りを披露する歌手だ。

しかし、彼女達の周りを見ても人だかりは余りにも少ない。察するに歌は余り売れていないようす。

何も彼女たちの歌う歌や踊りは下手というわけでもなく、三人共見目麗しい少女であるのだが、足を止めて聞く人は余り多くない。当然集まるおひねりも微々たるものだ。

それでも足を止めて歌を聴いてくれる人の前では笑顔を崩すことはない。

そんな彼女達の、芸人足らんとする心意気だけは超一流であった。

「皆あー、今日もありがとう！」

最後の歌を歌い終え、今日の演目を終えた三人は最後まで聞いてくれた客に笑顔を振りまき、頭を下げる。

少ない拍手にそれでもありがたく頭を下げる中、聴衆が解散するのを見て取ると三姉妹はやっと肩の力を抜くことが出来た。

しかしながら、本日の手ごたえにつく息は青色吐息であった。

まずは張三姉妹末っ子である三女、張梁　真名、人和が本日の収入を計算し終えたところで、トレードマークである眼鏡のブリッジを押し上げながらため息をつく。

「……はあ。今日も実入りは今ひとつだったわね……」

「それに何かお客さんもあんまし集まってくれなかったし……あーあ、こんなんで大陸一の旅芸人になれるのかな……」

ついで元気が売りの次女、張宝　真名、地和もいつもの元気さはどこへやら。

よほど自信があつたのだろう。それなのに客の入りが思わしくなかつた事に気落ちしているようだ。

そんな妹達の姿に長姉、張角　真名、天和は二人を元気付けるように明るい笑顔と声で語りかける。

「ほら、二人とも気にしないの。明日はきっといいことあるって」

まるで太陽の様な長姉の笑顔も、今の彼女達には現在を楽観しているようにしか見えなかつた。

「天和姉さんは気楽でいいわね……」

「そつよねえ……」

「えええー！　ちーちゃんもれんほーちゃんも、ひつどーいー！」

二人の妹からの言葉に頬を膨らませた張角であつたが、このままでは楽観視できないことは確かである。

何と言つても目の前には少ない収入という現実があるのだから。

先日かかつた宿代と三食の食事代を即座に計算し収支を見てみれば疑うことなく赤字なのだ。

「それより何か新しい策を考えないと、本当に行き倒れよ。この調子じゃ今日明日はいいとしても、一週間後の食事代や宿泊費は危ないかもしれないだから」

「ええーっ！ わたし絶対に野宿はやだからね!!」

「お姉ちゃんだってご飯が食べられないのはいやだよ……」

姉二人が愚痴を漏らすのが現実は覆ることはない。

そもそも予定では今まで溜めていたお金でしばらくは持つはずだったのだ。

しかし、彼女達は都会の物価をなめていた。

「とは言っても都会を侮っていたことは確か。曹操様が治める街は治安が良くて物価も安定してるって聞いたから陳留に来たけど、こんなに物の値段が高いなんて予想外もいいところだわ」

確かに汚職をしていない曹操の治める陳留は税金も他と比べれば遥かに易く、物価も他の都市に比べれば安いほうだ。しかし、所詮それは都会を比較してのもので田舎のそれとは天と地ほども差もあったのである。

「その割には、おひねりは変わらないからねえ」

それでいて収入は以前と変わらず。

このまま行けば張梁の言っていたとおり、干上がるのは時間の問題である。

目の前に立ちはだかった大きな問題を前に、張梁は手を口にあてながら呟いた。

「ここは出直すことも考えないといけないかも……」

「ちょっと、せっかく都会まで来たって言うのにまた田舎周り!？」

野宿以上にそれはヤよ！！」

頑として首を横に振った張宝の言葉は、三姉妹共通の認識だった。

「私だつて嫌よ。それに私達の夢のためには大きな街で成功するつて言うのが大前提になつてくるんだから」

「だよねえ。お姉ちゃんも、もっと大きなハコで歌いたいし」

有名になりたい。

大きな舞台で歌いたい。

そんな夢を胸に、ここまで来たのだ。それを後戻りするだなんて彼女達には考えられなかった。

しかし、現実是非常である。

夢だけでは今日の飯にもありつけない　そんな現実が三姉妹に重くのしかかっていたのだ。

「誰か後援者でもついてくれないかな」

「それが出来たら苦労しないわ。それにもっと有名にならなくちゃ

……」

ままならない現実に三姉妹が悲嘆にくれる中、彼女達の元に外套を羽織った男が語りかけてきた。

「ふっふふふ。そこな道行くお嬢さんたち、どうやらお困りのようやな」

声をかけてきた男の姿に張宝と張梁の身は硬くなる。

なぜなら、その男はフードを目深にかぶり顔を見せていなかったからである。

見るからに胡散臭い人物。

こう言う手合いには関わらないのが一番。

そう思った張梁は姉二人の手を引こうとするが一步遅かった。

「あなたは誰ですか？」

張角がこともあろうに声をかけてきた男の方に歩み寄っていったのである。

そんな長姉の姿に妹二人は、あちゃ〜と天を仰ぎ見た。

姉が生来天然であることは知っていたつもりだが、こんなにあからさまに怪しい男にホイホイついていくなんて思いもよらなかったのである。

もうこうなつては相手の出方次第だ。

治安のいい陳留の街頭と言えども油断は出来ない。もし誘拐されそうになったのなら何とか逃げて警邏している人に助けてもらわな
いと……。

そう思いながら怪しい男を睨みつけるように見る張宝と張梁に、
男はまるでそれを意に返さないかのような軽い口調で張角に答えた。

「いや、その道でお嬢さんたちの歌を聞かせて貰った者や」

「あッ！ ひよっとして私達の歌を好きになってくれた人ですか？」

「まあそんなところや」

「わあ、ありがとうございます！」

純粹に自分達の歌を好きになってくれたことが嬉しいのだろう、
ぴよんぴよんと飛び跳ねる張角に妹二人は天を仰いだ。

本当にどうしてこの人は、こんなに警戒感と言つか緊張感が薄い
のだろう。

そうは思いつつも、かけがえのない姉だ。何とか姉に注意を喚起

しようと二人は張角の袖を引っ張った。

「ちょっと、姉さん……」

「この人、かなり怪しい感じだよ……」

しかし天然の張角には注意と言う概念はないようである。

「ええ〜。怪しい人でも私達の歌を好きになってくれた人は大事にしないと」

などとのたまい、妹二人を撃沈させたのだった。

そんな三姉妹の姿に怪しい身形の男は、唯一見える口に笑みを浮かべる。

「ふつ。ワシが怪しいかどうかなんてどうでもいいことや。実はお嬢さんたちに助言をと思ってな」

いきなり怪しい男から発せられた怪しい言葉に張梁は眉を顰めた。本来ならば相手にせず、ここで切り上げるのが上策なのだろうが、そういわれると聞いてみたくなるのが人の性と言う者だ。

「助言？」

欲求に負けて、そう聞き返した張梁の言葉に怪しい男は一つ頷くと、その助言とやらを口にしました。

「そうや。お嬢さんたちの歌、聴かしてもらたけどアレだけじゃあテッペンを取られへん」

「あ、あなたに私達の何がわかるっていうのよ!？」

怪しい男の口から放たれた余りにも失礼な言葉に張宝は顔を真っ赤にして叫んだ。張角も張梁も、男の言葉に怒り心頭といった様子で男を睨みつけている。

しかし、三姉妹にすごまれても怪しい男の軽さは些かも薄れない。それどころか、その台詞を待っていたと言つように口を三日月の形に変えると、怒りに顔を赤くする三姉妹に言つてやった。

「わかるでえ。自分達、歌は上手いし、顔も可愛い……でも売れない。違うか？」

怪しい男のこの一言に三姉妹は言葉を失った。

そう。それは今まで三姉妹が疑問に思ってきたことだったのだ。

確かに自分達の容姿はいい線を言っていると思うし、歌や踊りも一流と呼べるところまで修練を積み、どこに出ても恥ずかしくないものだと思自負もしている。

それなのに何故か売れない

この街でもそうだし、他の田舎の方でもほどほどに売れる、それだけだった。

そんな彼女達の心の意を汲み取ったのだろう。怪しい男は我が意を得たりといった感じで言い放った。

「そこが甘いんや。いいか？ 歌が上手い、顔が可愛い……そんなだけで上にいけるほどアイドルの道は甘くない！」

怪しい男から発せられた謎の言葉に三姉妹は首を捻る。

「あい……どる……？」

「なに、それ？」

「聞いたことがない名称ね」

今まで聞いたことのない言葉を放った男は、首を左右に振ると大仰な仕草で腕を横へと広げた。

それはまるで託宣を授ける神官のように。

「知らなくて当然や。何故ならお嬢さんたちが人類初めてのアイドルになるんやからな」

「あなたはいつたい……？」

そう問いかけられた男は、僅かにフードを押し上げると己が何者であるかを明かす。

「ワシか？　ワシは通りすがりのアイドルマスターや」

男の目深にかぶったフードの奥で、眼鏡がキラリと輝いたのだった。

捨肆話

桃園で劉備たちと義兄弟の契りを終えた一刀は公孫贄へ向かう劉備一行と別れた後、進路を袁紹が治める街、へと取っていた。

そんな幽洲から冀洲への境界線を超えるか超えないかという一刀一行だったが、ここで問題が発生した。

それは小川のせせらぎが静かに流れる森の中を進むうちに起こったことだ。

「あ、アニキ！ 旦那！ 大変なんだな！！」

何事もなく道を進む中、いきなり馬車の中から響いた程遠志の大声に、馬車の手綱を握る周倉と白天王に跨る一刀はそれぞれの馬を止める。

敵襲かと思い辺りの気配を探ってみるが、それらしきモノは感じないし。

それに言っでは悪いが、武人として程遠志は一刀はもちろん周倉にも及ばない。そんな彼が一刀や周倉と言う武人が感じられない気配を感じられるはずがないのだ。

となれば、問題は馬車の中で発生したと言うことだ。

「どうしたってんだ、デク！？」

馬車の御車台から手綱を手放した周倉が後ろを振り返りつつ問う

たこの言葉に、程遠志は馬車の中からグツタリとした裴元紹を抱えながら出てきたのである。

「ち、チビがすごい熱を出してるんだな！」

「なにっ!？」

程遠志に抱えられる裴元紹の姿に周倉が驚きの声を上げる中、白天王から下馬した一刀は裴元紹の額に手をやり熱を測る。

その裴元紹の余りの体温の熱さに、一刀は眉をしかめた。

「……確かに。これはすごい熱だ」

「こ、これは医者に診せたほうがいいんだな！」

しかも熱だけではなく全身をグツタリ倦怠させていたのだ。程遠志が医者に診せることを声高に叫ぶのは無理からぬこと。

しかし、医者に診せるにしても問題があった。

「そいつは言われるまでもねえことだが……どうしやす、旦那？
医者に診せるつつても、まだまだ次の街までかなりの距離がありや
すぜ。ここは幽洲の？まで引き返しやすか？」

そう。ちよつどここは幽洲と冀洲の洲境。

進むにしろ引くにしろ余りにも中途半端な位置すぎた。

「いや、ここまで来ればどっちに進むもうとかかる時間はそう変わらない。それに今までの旅の疲れが出ただけかもしれない……とりあえず、今はチビを安静にさせよう」

とりあえず、そう判断した一刀は木陰に裴元紹を寝かせながら二人に命令すると、周倉は少し心配げに裴元紹を見る。

やはり周倉にとっては日々の頭痛の種とはいえ掛け替えのない弟分であるのだろう。その視線が雄弁に物語っていた。

しかしそれもつかの間、自分が今出来ることは別にあると頭を振る。そしてそれは一刀の言うとおり、まずは安静にさせることだと気がつく。一刀に対して敬礼を取った。

「……わかりやした。おい、デク！ 今日はこちらで野営するぞ、準備しろ！ 終わったら薪集めだ！ 俺は水を汲んでくる！！」
「りよ、了解なんだな！」

すぐさま程遠志に命令を送った周倉は桶を手にとると、裴元紹の側に立つ一刀に一つ頭を下げる。

「旦那、悪いですがその間チビのこと看っていてくださいえ」

「当然だ。臣下の不幸は我が身の不幸、しっかり看病させてもらうよ」

「ありがとうございます。……すぐに戻ってくるからな、チビ」

一刀から帰ってきた言葉に周倉は伏せる弟分を心配しながらも、部下を思う一刀の元につくことができた己の天命に感謝したのであった。

それから半日、野営をするため小さなキャンプを張った一刀たちは裴元紹の看病をしていたのだが、一向に良くなる気配は見せなかった。

「熱が一向に下がらない……やはり過労ではなく何かしらの病気と診るべきか……」

苦しそつに息を吐く裴元紹の額の汗を川の水で冷やした布でふき取る中、一刀が漏らした言葉に全員の空気は重いものとなる。

まだ半日しか経過を見ていないが、そもそも自分達は医者ではない。この裴元紹の症状が緊急を要するものなのか、軽いものなのかは見分けることが出来ないのだ。

しかし、ひよっとすると命を落とすような病なのかもしれない。

一刀たちはそう思い始めたのである。

そこで、業を煮やした周倉が立ち上がった。

「こつなつたら、俺がチビを連れて？の街までひとつ走りしてきやす！」

「いや、それならば俺の白天王の方が早い。ここは俺が行くべきだろう」

ことここに至っては医者に縋るしか道はない。

？の街は決して大きくないが、それでも公孫贄が治める遼西に負けるものではない。当然、そこには医者もいた。

ならばここは一人が裴元紹を連れて先行する　それが今考える上での最善策であった。

しかし、ここで反対の声を上げる者がいた。

「で、でも、もう日没なんだな。夜道の一騎駆けは旦那でも危ないんだな！」

程遠志の言うとおり、現代とは違いこの時代の夜は暗い。

幸いにして空は晴れ星と月の光があるが、それでも暗闇の中、馬

を駆るといふのは酷く危険な行為なのに変わりはない。

それに加えて周倉は致命的な点を指摘する。

「デクの言うとおりですぜ、旦那！ それに白天王は旦那しか乗れない馬……チビを乗せるなんてこと出来ないはずでさあ！！」

「なら、なおさら俺が行かないといけないだろう。俺はともかく白天王なら暗闇の中でも上手く障害物を避けてくれる。まあ、白天王の件は今回ばかりは緊急事態だ。白天王にはこっちの我俣を聞いてもらうよ」

確かに白天王は一刀以外を背に乗せたがらないが、何せ緊急事態だ。白天王もいい顔はしないだろうが、主人である一刀の言うことならば最終的には従ってくれる。

そこまで言われては周倉も程遠志も口を紡ぐしかなかった。

「旦那……」

しかし、それでも一刀が心配なことには変わらない。

二人が心配げな視線を一刀に送る中、一刀は二人を安心させるように一つ頷いた。

「そう言うわけだ。それにこうして議論している時間も惜しい。全速力で駆ければ街が眠りにつくまでには着くことができるだろう」

一刀は裴元紹を背負い紐で自分と裴元紹の体を固定しようとした、その時。

「待てっ！！」

夕暮れの赤い日が差す森の中に一人の男の声が響き渡った。

「誰だ!？」

その声に周倉は腰に差した剣に手をかけながら一刀の元に駆け寄ると辺りを警戒する。程遠志も周倉に倣うように巨大な楯と槍を構えて一刀と裴元紹を護る姿勢をとった。

そんな彼らの視線に一人の青年の姿が映る。

鍛え抜かれた肉体、赤い頭髮、翠の瞳、その体に纏うは燕尾の様な裾を持つ白い外套。

男は腕を組みながら高らかに名乗りを上げた。

「金の鍼に希望を乗せて、救え命の緊急治療! 五斗米道、舞人凱! 患者の治療にただ今到着!」

この高らかな男の名乗りにも周倉は戦慄した。五斗米道に舞人凱……この二つの言葉に聞き覚えがあったのである。

「あ……あの方は……まさか噂の舞人凱!？」

あの噂が本当であるならば、裴元紹が助かるかもしれない。そう思った周倉は剣の柄から手を離す。

そんな周倉らしからぬ行動と先ほどの叫びに、一刀は首をかしげつつ周倉に問いかけた。

「兄、知っているのか？」

「へい。噂ほどですが……何でも風来坊の医者がいるとかで、そのお方はぶらりと現れては無償で患者を治していくという……しかも掛かった患者は皆全快していることから神医、超医者、医者王とまで呼ばれてるお人です。確か名前は……華佗先生」

周倉が答えた彼の名前　華佗に一刀はハツと息を呑んだ。

華佗。それは後漢時代の名医の名前だ。薬学と鍼灸に精通し、麻酔薬を開発、初の腹部切開手術を行った医者としても有名である。もし彼が華佗であるのならはこの状況、まさしく天の助けといえよう。

しばし唾然としていた一刀の元に青年　華佗は歩み寄ると、一刀が背にした裴元紹を一目見て言った。

「患者の気配がして来てみれば、どうやら切羽詰った状況のようだな。よければ俺に彼の診察をさせてはくれないか？」

こちらが話を持ちかけるまでもなく治療を買って出てくれた華佗に一刀は安堵の笑みを浮かべる。

しかし患者の気配を辿るなど、どのようにすれば出来るようになるのか……それだけが謎だったが、今そんなことはどうでもいい事だ。

「あの華佗に見てもらえとなれば心強いことこの上ないんだが……さっきの名乗り、舞人凱っていうのはまさか」

背負っていた裴元紹を元の位置に寝かせながら一刀は、先ほどの華佗の名乗りを反芻する。

その時に名乗られていたのは華佗という名前ではなく舞人凱という名前。

華佗の字は元化であるから、そうなってくると消去法で残るは一つ。すなわち。

「そう、そのまさかさ。舞人凱は俺の真名だ」

そう、真名である。
しかしここで一つの疑問が持ち上がる。

「……真名というのは、そう易々と名乗るものではないと思うんだが違ったか？」

今の今まで少なくとも人たちを見てきたが、いきなり真名で名乗りを上げる人物はいなかった。

そもそも名乗りに真名を使う者などいないはずだ。

そう思つての一刀の言葉であつたが、華佗は笑顔とともにその理由を語つてくれた。

「いいや、違わないさ。でも、俺にとつてみれば患者やその家族には真名を明かすのは最低限の礼儀だと思つている。何といつても時には命を俺に預けてもらわなければいけない時もあるからな」

命を預かる。それは唯一にして無二たるその人物の一番の財産を預かることだ。

それに命がかからないまでも、怪我や病気の治療でも体を赤の他人である自分に任せてくれるのである。

ならば命や体を預けてくれる患者と、その家族には真名を預けるのが筋。それが華佗のモットーであつた。

華佗の持つ心情に心地のいい感情を感じた一刀は一つ頷くと華佗に向かつて頭を下げる。

「そうか……なら舞人凱。どうか俺の臣下を診てやつてくれ」

「わかつた。それと俺の真名、言い難いだろう？ よければ舞人でも凱でも好きなほうで呼んでくれ」

「なら、舞人と呼ばせてもらおうか」

真名の件で一刀と一言二言話しを交わした華佗の元に、今度は周倉と程遠志が一刀に倣い頭を下げた。

「先生、どうかチビをお願いします!」

「お、お願いします!」

命は皆平等で貴賤はないと考える華佗であるが、これだけ心配され思われている患者はやはり助け甲斐がある　そう思うのだ。だからこそ、そんな彼らの姿に華佗は満面の笑みで頷いた。

「ああ、こんなに仲間に思われている患者を病魔に殺させはしないさ。じゃあ早速診せてもらうぜ……はあああああッ!」

そう言うつや否や華佗は診察のため、気合に声を震わせると全身に氣を滾らせる。

そうして全身に滾らせた氣を眼に集め、視線を人の見えるそれとは別のモノへと変える。

それは、あたかもサーモグラフィや暗視スコープを身につけたかのような独特の視界。人の体に住まう病魔を漏らさず見つけ出す鷹の目だった。

「どこだ……どこにいる……胃か、肺か、腸か……ッ!?　見つけた!　肝臓か!」

裴元紹の体の隅々を調べていくうちに、肝臓に黒い澱みを見つけた華佗はその手に銀に輝く鍼を手取る。

「貴様の様な病魔など、この鍼の一撃で蹴散らしてくれる!　はあああああッ!」

今まで喋ることすら苦痛だった苦しみが綺麗に消えていることに、
裴元紹は首をかしげる。

その様は皆が今まで見てきた裴元紹の姿そのままであった。
そんな裴元紹の姿に眼に涙を浮かべた周倉が裴元紹の肩を抱く。

「ち、チビ……本当に大丈夫なのか？」

「へい。何かこう、胸に刺さってた棘が抜けたっていうか……いつもと変わりありやせん」

「よかつたんだなあ！ チビいいッ！！」

この裴元紹の言葉に遂に程遠志の涙腺は崩壊。周倉と裴元紹に抱きついたのであった。

そんな涙を流して生還を喜ぶ三人の姿と、安堵の息をつく一刀の姿に華佗は満足げな笑みを浮かべると患者であった裴元紹に向かって言った。

「君の肝臓に住まう病魔は俺が倒した。だけどこれから酒は控えたほうがいいぞ。今回の病は酒で疲れた肝臓に病魔がとりついたことが原因だ。健康ならばこの程度の病魔、人の持つ抵抗力のみで倒せるものだからな」

華佗が言うに、つまるところは酒の過剰摂取による肝臓機能の低下が原因だそうだ。

こここのところ、公孫贇のところでの宴会や劉備たちとの桃園での花見など酒を飲む機会が多かったのだから無理もなからう。

いかに酒豪とはいえ、やはり肝臓に負担がかかっていたということだ。

そこで裴元紹は、今になって初めて自分を治療してくれた華佗の姿を見た。

「あ……もしかして先生がオイラを治してくれたんで？」

「ああ。それにしても君は運が良かった。いくら強くない病魔とはいえ、もう少し遅れていれば命はなかったんだからな」

首をかしげながら聞く裴元紹に華佗は笑みを持って返したが、釘を差しておくことも忘れない。

予防も立派な医者の仕事だ。

事実、裴元紹の肝臓に巣くっていた病魔は格で言えば下から数えたほうが早いほど弱いものだったが命の危険は遙かに高いものであったのである。

「わかりやした。これから酒は断つことにしやす」

下手をしていたら死んでいたと言う事実を肝を冷やした裴元紹は禁酒を宣言するが、それは華佗によって止められた。

「いや、何もそこまでは言っていない。酒は百薬の長だからな、ほどほどにたしなむ程度にはとってもらっても問題はない」

「だけど二、三日は飲むのを控えたほうがいいがな　そう付け加えられた華佗の言葉に裴元紹は頭を下げるばかりである。

そんな裴元紹に対しての注意を終えた華佗に対して、周倉と程遠志がこれでもかとはばかりに頭を下げた。

「先生！　ありがとうございます！！」

「あ、ありがとうなんだな！！」

部下達に倣い、一刀も華佗に深く頭を下げる。

「助かったよ、舞人。君には何て礼をいったらいいか……」

「俺は五斗米道の教えに従ったまでだ、礼には及ばない」

頭を下げる四人に対し、そう言って格好をつけた華佗であったが、その腹から盛大な虫が鳴り響いた。

その音に、当の本人は顔を赤くする。

無理もなかるう。格好良く決めたところで腹の虫がなるとは、これはどこの喜劇だと言うのだ。

あまりにもその場を喜劇的に変えた華佗の腹からの一鳴きに、一刀は笑みをかみ殺しながら一つの提案を持ちかけた。

「……くつくく。なら、礼としては些か不足かと思うが、一緒に晩飯でもどうだ？ 大した物は出せないが腹を満たすことは出来る」

この一刀からの提案に華佗も顔を赤くしながらも快く頷く。

「それは助かる。路銀はあるんだが食料が尽きてな、次の街までかなりあるからどうしようと思っていたところなんだ」

そう吐露した華佗の言葉に一刀は、ならばと言葉を続ける。

「なら、俺たちと一緒に行くか？ 俺達も大陸を巡る旅の途中だし、馬車もあるから物資の不足もそうそう起こらない」

「いいのか？ それなら俺も旅の負担が減って治療に専念できるから願ってもないことだが……」

遠慮がちな華佗の言葉に一刀は首を横に振る。

何も一刀はただの善意で華佗と旅路を共にする訳ではないのだ。

「かの高名な華佗と一緒に旅が出来るんだ。万が一病気にかかったり、負傷しても医者がいれば百人力だろう？」

「要は持ちつ持たれつということか。俺は必要とあれば君達に医療を提供し、君達は俺の旅を助ける」

「まあ、そんなところだ」

これは願ってもない提案だ　華佗はそう思った。

旅慣れているとはいえ、食糧不足になって飲まず食わずで数日を過ごしたこともある彼にとって、一刀の申し出は非常に魅力的な提案だったからである。

ならば、答えは一つ。

「わかった。五斗米道が継承者、華佗　　舞人凱。君達の旅に付き合うことにしよう」

この華佗からの色いい返事に一刀は笑みを浮かべて頷いた。

「ああ、よろしく頼む。俺は北郷一刀、真名はないから一刀でいい」

「一刀か。こちらこそ、よろしく頼む」

こうして一刀一向に名医、華佗が参加したのであった。

捨肆話（後書き）

New!! パラメータに華佗を追加

捨伍話

名医、華佗を加えた一刀一行は袁紹が治める街、？に立ち寄っていた。

洛陽にも負けない大都市、？。

四世三公を輩出した袁家が治める街とあって、活気に満ち溢れた都市であった。

「旦那、今日の宿取れやしたぜ」

馬車を置ける行商人向けの宿にチエックインの手続きを済ませた周倉が宿の前で集合していた一刀たちの輪に加わる。

周倉から宿代の釣り銭を受け取った一刀は、それを財布に収めると一つ頷いた。

「ああ、ありがとう兄。さてと……じゃあ、足らなくなった物資の買い付けに行くか」

一刀一行がここ？の街に立ち寄ったのは、物資を補充するためである。

馬車に満載されていた物資も流石に半月近くの旅でだいぶ心もとなくなってきたのだ。

「それなら何組かに分かれたほうがいいですかね？」

効率化を図ろうとする周倉の提案であったが、別に急ぐ必要もあるまい。

そう思った一刀は首を横に振った。

「いや、今日一日は？に滞在するんだ。ここは皆で見て回ろう」

その提案に皆が頷き、まずは市場の方へと足を向ける。

流石に袁紹が治める街とでも言っべきか、数々の食料品や生活雑貨が並ぶ市場の規模は今まで見てきた中で最大のものではあった。

そんな大規模な市場の姿に、裴元紹が手を叩いて喜んだ。

「これだけデカイ市なんでさあ、上手い酒がきつとありやすぜ」

「つたく、チビのヤツは酒で痛い目見たっというのに相変わらず酒に眼がねえな」

先日の病気で懲りたかと思えば相も変わらず酒に眼がない裴元紹の姿に周倉がため息を漏らす中、裴元紹は並んで歩く華佗の方を向く。

「先生からたしなむ程度にはっってお墨付きもらってますからね。ね、先生？」

「ああ。言っまでもないことだが酒は百薬の長だからな。しかし、薬も過ぎれば毒になる。それさえ覚えて適量に飲むのが一番だ」

今一度、華佗からお墨付きを貰った裴元紹は得意げな顔になると、胸をそらして言葉を続けた。

「だからこれからは安酒をたくさん飲むより、いい酒を少し飲むって趣旨を変えたんでさあ」

「……医者である先生がそう言っんなら俺からは何もありません。だが」

華佗の言っていることはわかる。それに大陸に名の知れた名医だ。

こと健康や病の事に関しては彼の言っていることは絶対正しい。正しいのだが。

そう考えた周倉は、そこまで言ったところで裴元紹を睨み付けた。「飲む量減らしても値の張る酒飲むんじゃあ、金銭的に結局差し引き変わらねえじゃねえか！ お前の酒道楽がどれだけ旦那の懐に響いてるのか理解してんのか！？」

馬車に積まれた酒はもとより、立ち寄る村落で酒を買っては浴びるように飲んできたのである。いかに値段の安い酒とはいえ量が量だ。

その少なからぬ負担に周倉は頭を痛めたのである。

そこに結果として酒の怖さを知らしめる契機となった先日の酒の飲みすぎによる病気騒動。これで酒の消費 ひいては出費に歯止めがかかると思った周倉だが甘かったようだ。

飲む量が減ったからといって高い酒に変えたのでは、結局のところ何の解決にもなりはしないのだから。

しかしそんな事はおかまいなしと、程遠志までもが市場に立ち並ぶ屋台の数々を目の前に勝手なことを口走る。

「だ、旦那、後でいいから飯屋に連れてって欲しいんだな。これまで干し肉とか保存の利く食べ物ばかりだったから、ここで上手いもんを食べたいんだな」

「お前の食い道楽もだ、デク！」

丸つきり言っていることを理解していない弟分二人に周倉はまたしても怒り心頭。

いつかのように裴元紹と程遠志の頭上に周倉の雷が落ちた。

「いいか！ 公孫贄の姐さんから貰った金が大金だからって限度が

あるんだよ、限度が！ 少しは節約しようって思わねえのかお前えらは！！」

「だ、だけどアニキ……」

「言い訳無用！！」

またしてもブツブツと言いつく事を述べる二人に周倉は腕を振り上げるが、それを一刀がやんわりと止めた。

「兄、天下の往来で大声を上げるものではない」

「しかし、旦那……」

確かに天下の往来で騒ぎを起こすのは弁えるべきではある。

しかしそれを抜きにしても、ここはビシツと言って置くべきだろうと周倉は考えていたのだ。それを止められた周倉は不満げな顔を一刀に向ける。

そんな周倉の表情に一刀は苦笑しつつ言葉を続けた。

「それに金の残高に注意を払わなければいけないのは元をただすと俺が根無し草なのが原因なんだ。そんな給金も払ってやれない中、ついてきてくれる三人には感謝してるよ。だからこそ、ほんの少しの贅沢くらいは許してやりたいんだ」

ここまでの旅路、報いるべき褒賞がないと言うのに彼らは一刀に文句を言わずについてきてくれたのだ。

そんな彼らに、一刀は出来る限り報いてやりたい。

さきほどの一刀の言葉は、そう思っただけの言葉であった。

主君からのこの言葉に三人は目頭を熱くさせる。

「だ、旦那……」

そう言ってもらえるならば家臣冥利に尽きる。そう感じたのだらう。

漢泣きを始めようとする三人に、一刀は陽気な笑みを見せると三人の肩をたたいた。

「まあ、それに今までは馬車に用意してもらった物資を食いつぶしながら来たから白蓮から貰った金には言うほど手をつけていないんだ。今日だけはパアツと行こう」

「……あ、ありがとうございやす！ 旦那！！」「」

「舞人も何か入用があれば言ってくれ。出せる範囲なら俺の懐から出させてもらおうよ」

しきりに頭を下げる三人に頷き返した一刀が隣に立つ華佗にそう問いかけると、華佗は少し悩むそぶりを見せる。

時間にして数秒もなかったらう。顔を上げた華佗は、ならばと口を開いた。

「それなら本はいいか？」

「本……医術書か？」

「ああ。医術の道は日進月歩だからな。俺が旅してる間に新しい治療法が確立されたかもしれない。それにこれだけ大きな街になると羅馬から来た医術書もあるかもしれないからな」

名医と崇められてもなお、新しい医術や遠い異国の医術をも体得しようとする華佗。

そんな、世に溢れる患者を救済せんとする一心の姿勢に一刀は快く頷いた。

「わかった。じゃあ行くか」

「ああ」

「へいッ！」「」

一刀の言葉に頷いた四人は市場の中の雑踏へと消えていったのだ。
った。

一応の物資の買い付けを終えた一刀と華佗は街一番の本屋へと来ていた。

周倉、裴元紹、程遠志はあまり本に興味がないのか、外に並ぶ雑貨屋台を冷やかして回っている。

しかし流石、？の街の本屋というべきか。この時代でありながらもかなりの品揃えを誇っている。

これならば華佗の欲する物も見つかるだろう。

そんな感想を抱いていた一刀の元に一冊の本を抱えた華佗が歩み寄ってきた。

どうやら眼に留まる一冊があつたらしい。

「お目当ての医術書があつたみたいだな」

華佗の持つ本を見てそう言った一刀であつたが、当の華佗は首を横へと振った。

「いや、新しい医術書や羅馬から来た舶来品はなかったよ。これは前から評判になっていた御伽噺だ。阿嚙という都市を舞台にした物語で、青年の導士が妖書を手に活躍する活劇だよ。これはその新刊だ。」

どうやら医術書の類ではなく架空の世界を舞台にした小説 現
代で言うところのライトノベルであつたらしい。

あらすじを聞いてみても、本当に現代日本にありそうなヒロイツ
クファンタジー物っぽい作品のようだ。

やはりそう言うお約束的な書物は娯楽として人気が高いのである
う。

しかし、医者 of 華佗にラノベとは些か似合わなくはないか。そう
思ったからこそ一刀は首をかしげた。

「御伽噺？」

「行く旅の先々で評判になつていたから、俺も一度は読んで見たい
と思つてたんだ」

訪れる先々で評判になつていれば興味はない分野であろうとも見
てみたくもなるだろう。

それにしても、この時代にも流行り廃りがあるものなのだなと一
刀はしみじみ思った。

「それは運が良かったじゃないか。しかし、いつの時代でもベスト
セラー作品つてあるんだなあ」

「べすと……せらあ？ 一刀、君は時たま意味のわからない言葉を
使うな」

「俺の国の言葉で一番売れている本つて意味だよ。それより誰が書
いてる作品で、題名は何ていうんだ？」

「それが題名は読めるんだけど、作者名が異人のようで読めないん
だ。一刀、お前は読めるか？」

そうして手渡された本の表紙に書いてあつた題名は『炉利婚探偵・
肉食派』。

そして著者の欄にはハワード・フィリップス・ラヴクラフトとオ

ーガスト・アジア・ダーレスの名前があった。

「……って、ちょっと待ってッ!？」

余りにも衝撃的な文字が眼に飛び込んできたことに、その本を地面に叩きつけそうになったのも無理からぬこと。

題名は非常にアレであるが、それはまだいい。

問題は作者の名前のほうだった。

ハワード・フィリップス・ラヴクラフトと言えばクトゥールー神話の産みの親として有名だし、オーガスト・アジア・ダーレスというのはオーガスト・ダーレスの事だろう。彼もまたラヴクラフトと同じくクトゥールー神話の樹立に大きく貢献した人物だ。

しかし、しかしである。

!!
何で今から十五世紀も後の人間の名前がここで出てくるんだ

そう、ここでの問題はこれにつきる。

有名武将が男から女になっていたり、歴史がチグハグだったり、生活様式や食事の所々が現代に通じるところもある世界であるが、それでもこの二人の名前はありえないものだ。

仮に本人でなくともペンネームとして彼らの名前を使っている人間がいると言うだけで問題である。

まさか、自分以外にもこの世界に來ている者がいるのではないか
そう考えている一刀の耳に可愛らしい少女の声が響き渡った。

「えええええッ! 『炉利婚探偵・肉食派』の新刊、売れちゃった
んですかあ!？」

「いや、売れちゃいねえんだが……そこにいる兄さんが買うつもり
らしいんだよ。しかもまあ、運の悪いことにアレが最後の一冊でな。

人気のある作品なんで次の入荷がいつになるかもわからねえんだわ。すまねえなお嬢ちゃん達」

「どうやら、件の書籍の新刊を求めに来たようだ。」

本屋の店主が一刀と華佗の方を指差しながら申し訳なそうに少女達に謝る姿を察するに、本当に人気のある書籍なのだろう。

「題名や著者の名前が非常にアレであるが……………」。

「……………そうですか」

店主の言葉にベレー帽子をかぶる少女が大きく肩を落とす中、連れである魔女の様な帽をかぶる少女が視線を下に落としながら首を横に振る。

「朱里ちゃん、残念だけどここは諦めるしかないよ……………」

「そうだね、雛里ちゃん……………はあ……………大拾字探偵のお話、楽しみにしてたのになあ……………」

小さな少女が二人して肩を落とす光景に、一刀と華佗は何だか悪い事をしたかのような後ろめたさを覚えた。

「だからこそだろう。」

「舞人」

「ああ」

一刀と華佗は視線を合わせて頷き合うと少女たちの下へと歩み寄り、その手に持っていた新刊を少女達に差し向けた。

手に入らないと諦めていた物が目の前に差し出されたことに驚いているのだろう。新刊の書籍とそれを差し出す一刀を眼を白黒させて見つめていた。

「あ、あの……これって？」
「いや、この本も俺みたいな俄者より君達のような熱心な愛読家に読まれたほうが幸せかと思ってるな」

華佗からの思ってもいなかった申し出に二人の少女は目を輝かせる。

「「い、いいんですか!？」」

「買うつもりでいた舞人がいいつて言っているんだ。素直に受け取っておけばいいよ」

「あ、ありがとうございます！ はうう、噛んじゃった……」

「あああの、なananと、おおお礼を言ったらいいか！ 本当にありゆがとうございませう！ あう……」

二人して礼の言葉が噛み噛みになったことに顔を赤くする中、一刀から受け取った本をギョツと抱きしめた。

「じゃあ、行くか一刀」

「ああ。外で兄たちも待っていることだしな」

そんな微笑ましい光景に一刀と華佗は満足げな笑みを漏らすと踵を返し店内を後にしたのであった。

。この時はまだ彼女達が臥龍と鳳雛であることを知らぬまま

捨陸話

物資を補給するために立ち寄った？で、また一つの謎を抱えてから二週間。？を経った一刀一行は、ようやく冀洲から？洲へと差し掛かっていた。

幽洲が遼西から冀洲の？への行程と同じ時間を要しても、それだけの道のりしか進めなかったのは理由がある。

「まさか、ここで黄巾党が蜂起するとはな……」

そう。ついに一刀が予感していた黄巾党が蜂起したのである。

最初はただの集まりにしか過ぎない集団であったが、実力行使に出ようとした官軍を何の手違いか間違つて撃退してしまったのが事の始まり。

勢いづいた集団は誰が定めたのかトレードマークである黄巾をかぶり、天下に覇を成そうと各地で暴乱を巻き起こしたのだ。

最初はそれこそ五千人程の連隊規模であったが、今や大陸全土に飛び火し、その数三万人を優に超える大軍団といって差し支えないほどのものになっていた。

当然、そこに利を見出した賊徒共も参加。

賊徒共は当然のように村々を襲つては略奪を繰り返し、その賊徒に触発される形で純粹な黄巾党の面々までもが略奪を始めたのだ。

まさに大陸全土に血と略奪の嵐が吹き荒れたのである。

そうなつてくると、世の患者を治すのが使命と豪語する華佗がじつとしているはずがない。当然、華佗の同行者でもある一刀も無垢の民が危険に曝されているのを見過ごせるほど冷酷ではない。

立ち寄る村々で黄巾党が出れば民達を率いて撃退し、負傷者の救済にあたっていたのだ。

そんな国境なき医師団と国境なき軍隊を合わせたかの様な活動をしながら旅を続ける中、周倉は幾度か戦った黄巾党の面々を思い出すと顔をしかめる。

「しかし黄巾党のヤツ等、蝗のようでしたね……俺らも旦那に出会わなけりゃあ、アノ中にいたと思うとゾツとしますぜ」

その日その日を刹那的に享樂的に生き、人を人とも思わない黄巾党の姿にかつての自分達の姿を見たのだ。

裴元紹と程遠志もその姿を想像したのだろう、何ともいえない難しい表情を作る。

そんな元山賊の彼らに、一刀は前を見据えながら声をかけた。

「だが、兄たちは心を入れ替えてここにいる」

この言葉に皆の視線が一刀へと集まった。

八対の視線を集めた一刀はとつとつと語り始める。

「悲しいかな、人と言うのは善にも悪にも容易く染まる生き物なんだよ。それ故に全ての人が永久に善の心を持ち続けると言うのは夢の世界ですらありはしない。だからこそ人の善意は尊いんだ」

表側に善が溢れ、時折醜悪な悪が垣間見える現代を知り、悪が蔓延る中、人が時折見せる善に輝きを見出すことのできた過去を知る一刀の言葉。

二つの全く違う価値観を生きてきた一刀の発するその言葉は得も知れぬ重みがあった。

「じゃあ三人の悪の心は一刀が治療したってことか。心の病を治すとは、なかなかやるじゃないか一刀」

そんな一刀の言葉に華佗はしきりに頷きながら周倉たちを見た。内科的にも外科的にも、治せないものなどこの世にないと豪語する華佗が唯一治せない病気。

それが心の病だ。

恋に苛まれる心であったり、悲しみ傷ついた心であったり、心に巣くう悪意であったり。

これらばかりはいかに修行を積もうとも治療するには至らなかった。

だからこそ、周倉たちを山賊から更正させた一刀に華佗は一種の尊敬の様なものを抱いていたのである。

その華佗からの言葉に、一刀は苦笑すると首を横へ振った。

「そこまで上等なものではないよ。ただ、兄らが進むべき道を善と見定めただけだ」

「ふッ、全く……一刀の様な人間が時代を動かすんだろっな」

「だから舞人、それは持ち上げすぎだ」

謙遜してみたものの余計に持ち上げられる格好となった一刀だが、そう思っていたのは華佗だけではなかったようだ。

「そんなことはありません！ 旦那なら動かすどころかテッペンだつて取れますよ!!!」

「そ、そうなんだな！ 旦那はただの剣士で終わるお人じゃないんだな!!!」

「この件に関しちゃあ、俺も二人と同意見でさあ。旦那が旗揚げするってえんなら今一層働かせていただきやすぜ」

さも当然のように語る裴元紹、程遠志、周倉の三人に一刀は胸に熱い灯火　天下への野心が灯ったことを自覚する。

いや、これには多少語弊があるか。甦ったと言うほうが正しい言い方であろう。

しかし……しかし、それは未だ早い。

胸に灯った熱い灯火を天下に掲げ、覇を唱えるにはまだピースが足りない。

そう一刀は感じたのだ。

「お前達……わかった。立つか立つまいかは別として、その心意気だけは受け取っておくよ。だけど忘れないでくれ。俺はここに来た答えを未だ得ていない……だから、今は風が道を指し示すまま進むだけさ」

三人に笑みを見せてそう言った一刀は髪に差した虞美人草をなでた。

そうすれば己の進む道がわかるとでもいうように。

そんな一刀一行が道が交わる合流点に差し掛かった時、左手に見える道にトンでもないモノを見た。

「なツ!？」

「だだだだだ旦那! と、虎ですぜ!!」

「しかも、大熊猫もいるんだな!」

何と道を獣二匹が闊歩しているのである。しかもそれがホワイトタイガーとジャイアントパンダと来た。

パンダ、虎共に肉食だ。

もしもあの二匹が空腹であれば襲い掛かってくるかもしれない。

そんな危惧の中、周倉たちは手にべつとりと汗をかいていた。

それでも周倉たち三人は主君である一刀と、その友人であり裴元紹の命の恩人である華佗を護ろうと、手に手に武器を取ろうとした。そんな二人を一刀は手を掲げて制する。

「待て……皆、虎の背をよく見てみる」

いきなりの虎とパンダの出現に、それだけにしか視界がいつていなかった三人に対し一刀は虎の背にあるモノを指摘した。

その一刀の指差す先へと周倉は眼を凝らす。すると、さらにトンでもないモノが見えたのである。

「虎の背って……ありゃ？ あれは……ッ、人オオツ！？」

そう。道に行く虎の背中に人が乗っていたのである。

それも体の体格からして女性でなおかつ少女だろう。そんな小さな少女が白い虎を従え背に乗っている事実に一刀一行は開いた口がしばらく塞がらなかった。

しかし、人に飼われているとしても虎は虎、パンダはパンダだ。警戒するに越したことはない。

部下の中でいち早く回復した周倉が、主である一刀にお伺いを立てる。

「どうしやす、旦那？ 一応人が乗ってるって事は大丈夫そうですね、ここはやり過ぎしやすか？」

「ふむ。危険はないだろうが万が一ということもあるから……よし。ここは向こうを先に行かせ　ッ！？」

そこまで言ったところで、一刀は眼に映る光景に絶句した。

虎に跨る少女と、それに追隨するパンダ。

……だがしかし、それはいい。

問題はそのパンダの影から現れた、少女と共に歩く一人の男の存在だった。

どこにでもいそうな顔の男。着ている服も、そこらの百姓が着るような粗末なもの。

背中には調理道具だろうか？ ジャラジャラと金属音をさせる重そうなバックパックを背負っている……ただ、人が見ればそれだけの男だった。

しかし、気付けば一刀は白天王の手綱を操り、その彼女達の元へと白天王を走らせたのである。

「だ、旦那！？」

この一刀の行動に周倉は驚きの声を上げるが、一刀の耳には入ってこなかった。

なぜならば、ひどく懐かしい顔が虎に跨る少女と共にいたのだから。

ひよつとすれば他人の空になのかもしれない　その考えは何故か一刀には浮かばなかった。

むしろ、別の可能性が一刀の脳裏に浮上する。

何故、ここに来たのは俺だけと言い切れる？

俺に起こったことは、あの場にいた者全てに起こりえるものではないのか？

ならば、彼女と道を歩むアイツはアイツは………！

その考えに至った一刀は距離を詰めるのももどかしく、その男の名前を　友の名を呼んだ。

「章仁!!」

大陸の空に一刀の音が木霊する。

その名を呼ばれた男は立ち止まり自分の名を呼んだ人物へと視線を移す。男はその視線の先に捕らえた一刀の姿に、その表情を驚愕の色に染めた。

まるで信じられない。

そんな顔で馬上の一刀を仰ぎ見た男　早坂章仁は震える声で言葉を紡いだ。

「お前……まさか……まさか、一刀か!？」

遙か昔の大陸で、現代日本からタイムスリップした友人同士が邂逅した瞬間だった。

捨漆話

ここに来てまさかの再開を果たした一刀と章仁は、互いの名前を呼び合つた後しばらく動けずにいた。

それは異郷の地で知つた顔にあつた事に対する安堵であろうか。それともこの殺伐とした大地に友も巻き込まれたことに対する哀れみか。はたまた心許せる頼もしい友の出現に震える心の滾りか。

しばし、二人して見詰め合う一刀と章仁の耳に甲高い少女の音が響き渡つた。

「もおっ！ 二人して訳わかんない！！」

いきなり耳に響いた大声にハツとなつた一刀は声を発した少女の方に視線を移す。

章仁の同行者であろう、虎に跨りパンダを従えた少女が可愛く頬を膨らましていたのだ。

旅の仲間の下に、自分の知らぬ人物が親しそうに声をかけたのは気が気でなるまい。

そう思った一刀が彼女に対して何か言おうと口を開きかけた時、彼女は驚くべき行動に出た。

勢いよく虎から飛び降りると章仁の側まで駆け寄り、その腕をギョツと抱きしめたのである。

しかも、それだけではない。

「そこのお兄ちゃん！ お兄ちゃんが誰だか知らないけど章仁はシヤオのなんだからね！！」

章仁の腕を取りながら自分の所有物だと声高に宣言したのだ。当然、この言葉に驚いたのは一刀。ではなく、腕を抱きしめられた章仁だった。

「ちょ！ シャオ！？ 何を誤解されるような言い方を」

主語と述語しかないストレートな物言いは、時に要らぬ誤解を招く。しかも相手が年端も行かない少女であれば尚更だ。

腕に抱きついた少女に何かを言おうとした章仁が友である一刀の方を見てみると、そこには一刀ばかりか後を追いかけてきた周倉たちの姿があった。

その面々の表情はまるで蛆虫を見るような眼であったと、後の章仁は語る。

「……章仁、お前……」

眼を見開き、信じられないといった表情で後ろに一步退く一刀の姿に、章仁は必死に弁解する。

「ち、違う！ 誤解だ！ お前の考えてる様なことは全く違うぞ一刀！！」

しかし日頃の行いがいいのか、ここで天は章仁に味方した。

「むう〜！ 章仁はシャオの専属料理人なんだから！ 絶対に、ぜえ〜つたいに渡さないからね！！」

もう辛抱たまらないといった少女が高らかにそう宣言したのである。

この少女の叫びに、章仁を辛辣な眼で見ていた周倉たちは表情を

崩した。

「……はっ？」

「専属」

「料理人？」

「精神疾患者ではなかったのか……いや、よかった。俺の五斗米道は心の病気までは治せないからな」

その面々の反応に、安堵の息をつく章仁の下に一刀が歩み寄ると、その肩を一つ叩き頷いた。

「……章仁。俺は信じてたよ」

「絶対嘘だろ！！」

大陸の空に章仁の叫びが木霊したのであった。

章仁ロリコン疑惑に一通りの決着がついた後、改めて一刀一行と章仁一行はそれぞれの自己紹介に入った。

「まずは、俺からだな。俺は北郷一刀。章仁とは同郷で同じ学校ここで言う私塾に通っていた同級生で友人だよ」

「俺は華佗。五斗米道の医者だ」

「旦那の家来筆頭の周倉です。コイツ等は部下の裴元紹に程遠志、どうか見知りおきを」

最後に頭下げた周倉たち三人に章仁は驚きの声を上げた。

「つて！？ 家来つてお前のか！？」

章仁が驚くのも無理はなからう。

この戦乱渦巻く時代に少数であろうとも部下を従えると言う事實は、現代育ちの章仁には考えられないことであつたである。

虎とパンダを従えているとはいえ、年端も行かない少女の料理人として付き従う章仁にはとても真似できないことであつたのだ。

「まあ、いろいろあつてな」

そんな眼を白黒させる友人に笑みを漏らす一刀の姿に、章仁の隣に立つ少女は目を細めると一つ、なるほどと頷いた。

「ふん。でも何かわかる気がするなあ。だつて一刀つてお姉ちゃんと同じ感じ 王の氣つていふのかな？ そう言う感じするもん」

王の氣。

別の言葉で言うならば王の器とも風格ともいえる言葉。それを身近で感じていた。しかもそれは姉であると言う少女……………。

ならば彼女は天下に近い人物の肉親ということである。

その事を察した一刀は彼女に名前を聞いてみた。

「そう言う君は？」

「シャオはね、孫尚香つていうんだよ！ こっちは周々に善々。よろしくね一刀」

虎とパンダの名前まで紹介してくれたが、一刀の耳には彼女の名前の方が大きく響いていた。

孫尚香。それは孫堅の娘にして孫策、孫権の妹である。劉備や関

羽たち主人公級には及ばないまでも三国志のビッグゲームの一人である事には変わらない。

しかも、どうやら彼女は周倉や華佗と同じく性別はそのままであつたらしい。

それにしても初対面の男相手だというのに屈託のない明るい表情で言葉を交わす孫尚香。さすが江東の虎の娘にして小霸王の妹……そして自身、弓腰姫と呼ばれることはあると言ふことか。

どうして肝が据わつた……もしくは邪気を知らない天真爛漫な娘だつた。

「で、最後は俺か……。俺は早坂章仁。一刀と同じ聖フランチエスカに通つてた学生で、今はシャオの専属料理人をやりながら一緒に旅をしている……と。まあ、こんなところかな」

最後に章仁の自己紹介が終わつたところで、一刀は不思議に思つていたことを口にした。

「それより章仁、フランチエスカの制服はどうした？」

そう。章仁の格好はみすばらしいとは行かないまでも、庶人が着るような質素な服。

こちらに飛ばされて来る以前一刀同様、聖フランチエスカの制服を着ていたのなら、ここでも制服を着ているはずである。

この一刀の疑問に答えてくれたのは章仁ではなく孫尚香だつた。

「それがね！ 章仁つたら目立つって言って次の村で、あの服売っちゃおうとしたんだよ！ 本当にもう信じられない！ あんなに綺麗でカッコイイ服を売ろうとするなんて！！」

どうやらこの世界にないフランチエスカの制服を気に入つた様子。

顔を赤くして熱弁をふるう孫尚香の姿を尻目に一刀は、ならばと章仁の今身に纏う服を指差して問うた。

「じゃあ今、章仁が着ている服は？」

「恥ずかしながらシャオに買ってもらった物だ……」

年下の少女に養われているという現実を実感したのか、肩を落とす章仁に一刀は優しく章仁の肩を叩く。

「まあ、ドンマイ」

「……ああ、ありがとう。……しかし一刀、お前はよく着れているな。そんなんじゃ襲ってくださいって言っているようなもんだろ？」

ポリエステル製の制服は光を反射し、デザインも海軍の正装のようで非常に見た目がいい。良くも悪くも目立つ一品だ。

そんな物を着ていたら追いはぎに会うのは眼に見えている。そう判断した章仁はの考えは正しいものであった。

現に一刀自身、こちらに来てすぐに制服のせいでトラブルに巻き込まれたのだから。

「まあな。最初、兄たちに会った時もコレのおかげで金持ちと勘違いされて襲われたし」

「やつぱりなあ。どうだ、シャオ。俺の言ったとおりだろう」

自分の判断は間違っていないなかった。その事が体験談で持って照明されたことに章仁は胸を張って孫尚香の言ったのだが、返ってきたのは孫尚香の膨れ面であった。

「もおお！ ちょっとやさそとの賊なんてシャオの敵じゃないし、周々や善々だっているんだから章仁は気にしなくていいの！ー！ー」

「シャオの強さは知ってるし周々や善々も心強い味方だっわかつてはいるけど、それでもなるべく危険な道は避けて通るべきだろう？」

「むう……それはそうだけど、何か納得いかない……そうだ！」

とつとつと理路整然と語る章仁にフラストレーションを溜めていた孫尚香であったが、一刀たちを見て何かを閃いたようだ。

孫尚香は早速その閃きを実行へと移すべく一刀に語りかけた。

「ねえ、一刀！ 一刀の旅にシャオたちもついて行っていい!？」

何を言い出すかと思えば、一刀たちとの旅の同行だった。

しかしこれは一刀にとつて願ってもない申し出。本来ならばこちらから申しかけようとしていたところであったのだから、渡りに船というものだ。

「もちろんだよ。こんな殺伐とした時代なんだし章仁の事は放っておけないから、こつちから誘おうと思つていたところだよ」

「それじゃあ、よろしくね一刀！ あつ、それなら真名を預けないとね。小蓮つて言うんだけど家族は皆シャオつて呼ぶの。だから一刀もシャオつて呼んで!!」

話はトントン拍子に進んでいき、終には真名まで託されてしまった。

余りの孫尚香のパワフルさに一刀を除く一刀一行の面々は声も出ない様子。

一刀も青信号全開な孫尚香に額に汗を流しながら少し後ずさつてしまった。

「あ、ああ。俺の事は」

「章仁から聞いてるよ。章仁たちの国には真名はないんですよ。だから一刀の事は一刀って呼ぶね。さてと……章仁!!」

強引に一刀の話を切り上げた孫尚香はイキイキとした笑みを見せながら章仁を呼んだ。

そんな孫尚香に、いい予感を感じるといふのは酷な話か。

章仁は一刀以上に額に汗を浮かべながらも無視するわけにはいかず、恐る恐るといった感じで聞き返した。

「な、なんだよ？」

「これでシャオたちは一刀たちの旅に参加することになったんだけど、一刀はアノ服着てるよね。なら章仁が言う危険ってヤツも一人が着ていようが二人が着ていようが変わらないんじゃないかな。ってな訳で、ハイッ!!」

そう捲くし立てた孫尚香が章仁に差し出した手に持っていたのは何であろう、フランチェスカの制服であった。

一刀に対する旅の同行の申し入れはこれが目的であったようだ。

まるで万の大軍を一人で破ったかの様な会心の笑みを見せる孫尚香の姿に、章仁は仕方がないと一つ頭を振ると孫尚香の手からフランチェスカの制服を受け取った。

そしてここに来てからは暫くぶりに、その制服へと袖を通す。

白く輝くフランチェスカの制服を着た章仁は、孫尚香の眼から見ても魅力度五割り増しとなっていた。

やはり売らないで正解だった。大いにそう実感した孫尚香であった。

「うん！ やっぱり章仁にはそっちの方が似合う似合う!」

章仁に対して拍手を送る孫尚香の微笑ましい姿に、一刀は笑みを

讚えながら章仁の耳元で呟いた。

「何だかんだ言って、シャオに甘いな章仁」

そんな一刀の囁きに章仁は何ともいえない表情になると、こちらも小声でポツリと漏らした。

「何だかな、妹に似てるんだよ」

「羽未ちゃん……だったか」

「ああ。天真爛漫なところとか、無邪気なところとか、そっくりだよ」

一人っ子の一刀にはわからない感覚であったが妹を持つ章仁にとっては、どこか妹に似ている孫尚香は放っておけない存在なのだろう。

例え自分に力がなく護られる立場であろうとも、付き従う従者に近い立場であろうとも。

「だからかな。俺にはシャオには笑顔でいて欲しいんだ」

章仁は元の世界の妹に思いをはせながら、こちらで出来た新しい妹の喜ぶ姿に少し満足げな笑みを見せたのであった。

捨漆話（後書き）

New!! パラメータに早坂章仁を追加

捨捌話

孫尚香と章仁が一刀一行に加わってから数刻

「うんめえっ!!」

冀洲と？洲の洲境。そこに張られた野営の陣から大きな声が上がった。

誰であろう。一刀臣下の一人、裴元紹である。

大声を上げた裴元紹は、手に持った碗を高らかに掲げた。

「これがいつも食ってた保存食が元だとは、とても思えねえ!!」

「ま、街の飯屋の飯よりも上手いな！」

碗に注がれたスープをもう一飲みして再び舌鼓を打つ裴元紹に、程遠志も先日ので食べた食事と勝るとも劣らない。それをいつもの保存食に手を加えただけの料理に大きく頷いたのだった。

満足げに料理を口に含んでいるのは彼らだけではない。

この場にいる全員が手に持った椀に注がれた料理に舌鼓を打っていたのである。

そんな彼らの様子に、この料理を作った者の同行者である孫尚香が胸を張る。

「当然、章仁が作るご飯だもん！ 美味しくないはずないよ」

そう。この料理、一刀と共に大陸に飛ばされてきた章仁が作ったものだったのだ。孫家の姫君を唸らせた料理が、彼らの舌を満足させないはずがない。

章仁の料理をまるで自分が作った物であるかのように振舞う孫尚香の姿に、章仁は優しい笑みを向ける。それと同時に孫尚香の碗が空になっているのを見て取ると、手を差し出しながら問いかけた。

「シャオ、おかわりは？」

「いる！！」

章仁の問いかけに元氣よく答えた孫尚香の姿　それは、まるでお転婆な妹と、世話焼きな兄の図に見えた。

そんな二人のやり取りに皆が微笑ましげな笑みを向ける中、一刀だけが違和感を覚える。

確かにシャオは羽未ちゃんに似てはいる……しかし、それを抜きにしても章仁の彼女に対する接し方は本当に妹である羽未ちゃんに接するそれ……何か章仁にあったのか？

聖フランチェスカに二年時から編入の短い間であるが、それでも男女比一対四十の乙女の園での生活である。気の会う男友達というのは非常に貴重で、それ故に親密な関係を結びやすい。

当然、一刀・章仁・及川の三人はその例にもれず固い友情で結ばれているし、章仁や及川の友人や家族関係もある程度は知っているし、見てきている。

そこにはもちろん、章仁の妹である羽未や幼馴染の結衣佳も含まれていた。

故に一刀にはわかる。

何か章仁が無理をしていると言うことに。

しかし今は食事の場だ。この穏やかな空気を壊すのはどこか忍びない……。そう思った一刀は、一旦この考えを棚上げすることにした。

一刀が章仁に違和感を覚えていることなど気付きもしない孫尚香

は、いつしか食べた章仁の料理にウツトリと思いをさせる。

「それに章仁の故郷の料理　はんばあくとか、かれえなんて食べた時なんか頼つぺた落ちそうになつたもん！　また食べたいなあ」

「はんばあく……」

「かれえ……」

かつて食べた料理の名前を挙げて行く孫尚香の姿に、自分なりにハンバーグとカレーを想像したのだろう。ジュルリと口の中を唾液で満たす裴元紹と程遠志の二人に、周倉は一つ息を漏らした。

「ったく。……食い気だけは一人前なんだからなあ、アイツ等」

そんな苦労人、周倉のいつもの呟きに一刀は笑みを漏らすと一つ彼の肩を叩いた。

「腹が減つては事を成すことはできんよ、兄。よく食べるということとは戦士にとって欠かせない技術でもある」

そこに、一刀の言葉に続く形で華佗も合いの手を入れる。

「食と言う物は健康の根幹を成すものだからな。食べられると言うことは健康の証さ」

敬愛する主君と弟分の命の恩人である医者言葉に、周倉はなるほどと頷く。

確かに戦闘の面で見ても健康の面で見ても、食事と言うのは基礎になる大事な部分だ。兵糧がなければ戦争などできるはずもなく、健康でなければ今日を生きることできない。

誰が言ったか『健康な体こそ最大の財産である』　この言葉こ

それが真理である証である。

「旦那や先生の話にはいつも頭が下がりやす。食事にそれだけ深い意味があつただなんて、今の今まで考えもつきやせんでした」

当たり前前の事だからこそ、生きるうえでの根底にあるからこそ気がつけない事に容易く気がつく二人の慧眼に頭を下げる周倉に、一刀は笑顔で今一度周倉の肩を叩いた。

「まあ今は兄も楽しみ。食事と言うのは一期一会だつてウチの爺さんも言つてたしな」

「へい。……確かにこれはチビやデクが叫ぶだけの事はありやすね。俺も大したもん食つてきたわけじゃありませんが、それでも旦那のご友人が作る料理は文句なしに美味い」

一刀の言葉に今一度、碗に注がれた料理を良く味わつて腹に収めた周倉がしきりに頷く中、章仁は少し照れているのか頭をかきながら答える。

「ははは。まあ、一手間か二手間かただけだけどね」

こうなつてくると調子に乗るのはいつもの二人だ。

「でも、これで味気ない旅の食事とはおさらばでさあ！」

「つ、次は出来ればさつき言つてた旦那や料理長の国の料理を食べたいんだな！」

これからの明るい食事情に勝鬨の声を上げる裴元紹と程遠志の二人に、いつもなら拳を振るわせた周倉であつたが、今回ばかりは周倉本人も美味くなつた食事や、未だ見たこともない一刀や章仁の

国の料理への関心に、ただただ章仁に頭を下げるだけであった。

「こんなんですが、これからもよろしくおねがいしやす。料理長」
「ああ。材料が揃う機会があれば作ってやるよ」

これだけ好評をもらえれば気を浴しない人間はいない。章仁が周倉たち三人に向かって力強く頷いた。

そんな力強く頷いた章仁の下に、孫尚香が元気よく空の碗を突き出す。

空の碗、それが意味することはたったの一つ。それは。

「章仁、おかわり!!」

「はいはい。ちょっと待ってな」

孫尚香のおかわりコールに裴元紹と程遠志も一気に碗の中身を胃に治めると、それぞれの碗を章仁へと突き出した。

「オイラも頼みます!」

「お、俺もなんだな!」

こうなると、もうお決まりのパターンだ。

「お前等は少しは遠慮しろ!!」

お約束となつた周倉の雷が二人の頭に落ち、笑いが焚き火を囲む皆に伝播して行く。

そうやって楽しい食事風景は賑やかに過ぎていったのであった。

食事が終わり、火の番以外の皆が寝静まった夜。一人、火の面倒を見る一刀は自分に近づく気配に対して口を開いた。

「眠れないのか、章仁」

振り返らないままに名を呼ばれた張本人　章仁は降参するように手を上げると、肩をすくめてみせた。

「よくわかったな。足音も立てなかったのに……って、それは向こうでも一緒だったか」

元の時代でも、要らぬことをしでかそうとする及川の不意打ちを尽く撃退してきた一刀である。

一刀にとって人の気配を察することなど今さらなことであったのだ。

そんな一刀の下に歩み寄った章仁は、一刀の隣を指差して問いかけた。

「横、いいか？」

「もちろんだ……っと言っても断る理由がないだろうに」

「そういうなよ、社交辞令みたいなもんだらう」

「友人の間に社交辞令がいるもんかね」

「親しき仲にも礼儀ありだ」

などという他愛もない会話を楽しげに繰り返す友人二人であったが、そこで一刀は意地の悪い笑みを見せる。

「ならば、こちらも客人にそれ相応のもてなしをしないと……」

しばし待たれよ章仁殿。今、茶を用意する」

「うへえ……嘘だ、嘘！ お前の言うとおりだよ」

言うや否や、やおら立ち上がった一刀に章仁は慌しく手を振って止めに入った。

余りにも一刀の他人行儀な言動に面食らったのである。

あまりにも予想通りのリアクションを返してくれた章仁に、一刀は肩を笑みで震わせた。

「くつくく。なら最初からそう言っていればいいだろうに」

肩を震わせる友の姿に、慄然とした章仁は両腕を組んだ。

「……全く。一刀、こつちに来てから一層強かになってないか？」

「そうかもな」

確かに一刀は元の世界にいたときも的確な点を突いたり、上手く間を取ったり、相手のペースを崩したりと、話術やそれに関連する心構えの様なものは頭一つ飛びぬけて得意であったが、この世界で見た一刀は更に手ごわくなった印象がある。

しかも今一刀が手にしているには、それだけではない。

「それに家来なんかも連れてるしさ」

「彼らは俺の強さに惚れ込んでるだけだよ」

一刀は強さにほれ込んだだけと知っているが、彼らを見ていればそれだけでない事は一目瞭然だ。彼らは心の底から一刀を慕っている。

しかもこの時代の名医である華佗までもが、一刀を慕っているのだ。

「それだけには見えなかったけどな。まあ一刀が強いのは今に始まったことじゃないか」

「そう言う章仁だって飛び込み胴の打ち込み速度と威力は大したもんだろうに。剣を取るうとは思わなかったのか？」

確かに、章仁の飛び込み胴は元の世界での女子学生剣道最強である不動如耶をも打ち倒すほどのキレがある。

だがそれは所詮、命のかからないスポーツであるからだ。

一刀のように元の世界で強かったからといって、こっちの世界で剣を取って命のやり取りを行うなど正気の沙汰ではない。

そしてそれを言い出せば歳不相応な強かさも、他人を家来とすることも、あの時代で育った章仁にとってはとても信じられないことだった。

それを何の事もないように言っただけのけた一刀が、どこか遠いところに行ってしまったとうな感じがしたのである。

だからであろう。章仁の口から、あの世界での禁忌が一刀に問われた。

「あれは剣道だからだよ……命のやり取りは流石に……な。一刀はやっぱり……こっちで人を殺したのか？」

「ああ。コッチに来てかなりの人を殺した。数は三桁を優に超え、四桁に届こうとしている」

この殺伐とした時代だ。正当防衛である殺人は予想していた。章仁自身、手をかけたことはないが道中襲ってきた賊を孫尚香と周々、善々が屠っていくのを幾度か見てきたのだ。

しかし、一刀の口から放たれた数は章仁の想像を絶するものだった。

四桁 千人に届こうかという人たちの命を一刀が屠ってきたと

言う事実には、章仁は息を呑んだ。

「ッ!!!」

「お前は見下すか、章仁？ 人殺しの俺を」

そんな章仁の反応に、一刀は少し寂しげな表情を見せたことで章仁は大地を踏みしめた。華佗や周倉の話から、その殺人は全て罪なき人たちが苦しめる賊徒からであったからだ。

だけでも章仁には納得できない部分もある。やはりそこは現代人としてのモラル故か。

「……いや、一刀のことだから殺したって言っても護るためだろ。それに一刀が黄巾党を殺さなきゃ、罪のない人がたくさん死んでいた……だから一刀のしたことは正しいとは思えないけど、間違っているとも思えない……でも」

しかし、しかしである。

現代人としてのモラルを持っているからこそ、章仁は一刀の異常性を指摘せずにはいられなかった。

「それでも一刀、やっぱりお前は変だ。確かにお前は向こうでも強かったし向かってくるヤツ等には容赦なかったけど、それでも精々が病院送りだったはずだ。こんな殺伐とした世界だからって平気に入殺しが出来るなんて……お前、おかしいよ」

「……ああ。そうかもな」

まるで泣き出しそうな章仁の問いかけに、一刀はただ静かに眼を伏せてそう答えるだけ。

そんな一刀に章仁は今一度問いかける。

「お前、本当にどうにかしちゃったのか？」

二度目の章仁からの問いかけに、一刀は頭を一つ振ると静かに語りだす。

まるで自分の頭の中を整理するかのよう

「いや、気が触れた訳でも壊れたわけでもない。何ていうのかな…この時代の価値観っていうものが実感としてわかるんだ。まるでその世界で長いこと生きてきたように」

「お、お前……何を言ってる……」

「まあ最後まで話を聞け。この世界に降り立ったその時から、ふとした時にパズルのピースがはまる様に次々と見たこともない人や物が心に甦るんだ。その中には、かつての俺が歩んできた人生も含まれる」

まるでSFかファンタジーの様な一刀の独白に章仁は驚きの声を上げる。

今までの世界で生きていたならば、こんな世迷いごとなど切つて捨てただろう。友人に精神科の病院を紹介しているところだ。

しかし、今はこの世界へのタイムスリップを経験したのだ。ならば一刀の話など、未だ良識的な範囲内　そう認識することにしたのである。

「それって!？」

「前世返りとも言うのかな。だから俺の感じる人の命の価値は、重くもあり軽くもあるんだ」

「だ、大丈夫なのか？ 一刀が一刀じゃなくなってしまっなんて事はないのか？」

章仁が声を荒らげるのも無理はない。

今の状況、一刀の中には現代を生きてきた一刀としての価値観と、かつての前世の価値観が混在しているのだ。

今はまだ価値観の混在だけでいいが、前世の人格が眼を覚ましたとなると二重人格になる可能性も否めない。

いや、それよりも一刀の人格が消えてなくなるのでは……………。そんな章仁の危惧に、一刀はただ首を横に振るだけであつた。

「それはわからない。まだ完全に過去の記憶を思い出したわけじゃない。まだ重要なピース　自分の過去が誰だつたかというのがわからないんだ」

いや、これは詭弁だ。確かに自分の前世が誰であつたかを思い出すには至っていない……………だが、既に一刀には自分の前世が誰であつたかということの予想はついている。

しかもそれは十中八九外れることはないだろう。何故なら腰に差した二振りの剣と、劉備を見て思い出した過去の友の名前から繋がりえる人物はただの一人。

そして自分の前世が彼であるならば、夢に出てきた　今でも恋焦がれる彼女の名前は……………。

そこまで考えたところで、またしても頭に霧がかかる。

まただ！

自分の前世と彼女を思い出そうとすると、またしても頭にもやがかかったようになる。

まだ、それを思い出すには早いと言うことか、もしくは劉備にあつたときのように何かしらの人が物が鍵になるのか……………。

全てを思い出すには来るべき時を待つしかないのだ。

例え、それが北郷一刀という人格が消えるときだとしても……………

……………

「そんなことよりも、俺もお前に違和感を感じたんだが……何があった？」

人知れず心の中で覚悟を決めた一刀は、今度は自分が感じていた事を章仁に問うたのだった。

拾玖話

焚き火を前にして座る一刀は真剣な顔を章仁に向けて、気になつていたことを問いかけた。

それはこの世界で章仁と再開したときから感じていた違和感。

普通に見る分には何も変わったところなど見られない。それこそあの平和な時代に生きていた一高校生そのままだ。

しかし一刀にはわかる。

短い付き合いとはいえ、それでも親友として付き合い合ってきた章仁の心に影がかかっているのを。

「そんなことよりも、俺もお前に違和感を感じたんだが……何があった？」

しかして、一刀のこの問いかけは章仁の心の闇に抉る様にして打ち込まれた。

「ッ!？」

章仁が息を呑む音が聞こえる。

それだけではない。焚き火と星明りと言う光量の足りない暗中にはあるが、一刀の眼は章仁が表情を引きつらせたのを確りと捉えていた。

「……………」
「……………」

火に炙られた薪が乾いた音を弾かせ火の粉を夜闇に散らせる中、

一刀と章仁の間にしばしの静寂が去来する。

静かに言葉を待つ一刀の姿に対し、章仁は言葉を捜すように視線を泳がすと何を言っているんだとばかりに苦笑を浮かべてみせた。

「……何がとは何だ？」

まるで仮面を張り付かせたかのような章仁の笑みに、一刀はここから先を口にするかどうか思索する。

先の反応と今のやり取りを見る限り、章仁にとって一刀の感じた違和感は触れて欲しくない事案なのだろう。下手に踏み込めば章仁を傷つけてしまう可能性もある。

しかし、それでも一刀は章仁に問わずにはいられない。

何故なら、一刀には章仁が泣いている様に見えたのだから。

だから一刀は多少強引にでも、章仁の歪みを指摘する。

「とぼけるな、シャオのことだ。彼女に対するお前の接し方、まるで羽未ちゃんに接してるソレだったぞ」

夕食時の時の孫尚香に対する章仁の対応、それは些か優しすぎるくらいはあったが元の世界で妹である羽未に対するモノに一刀は見えたのだ。

この一刀からの指摘により章仁の仮面に罅が入る。

しかし、それもつかの間。

一瞬眉根を顰めた章仁だったが、すぐさま済ましたような表情を取り繕うと首を横に振って見せたのだった。

「それだつたらどうしたって言うんだよ？ 別に俺は、どこか羽未に似ている彼女を大切に」

確かに、妹の面影があれば優しくもなるだろう。それが人の情と

いうものだということも一刀は理解している。

しかし、しかしだ。

「そう。お前はシャオを大切にしている……いや、しすぎている。

しかもそれは傍から見れば、まるで羽末ちゃんに贖罪するかの様に」
「ッ!？」

一刀に核心を突かれた章仁は今度こそ言葉を失う。

放たれた言葉に表情を取り繕うのも忘れ愕然となる章仁だったがしかし、一刀にはどうにも腑に落ちない点が一つだけあった。

一刀はその疑問点を章仁へと問いかける。

「だが、お前がそうする動機がわからない。こっちに飛ばされたことで妹の前から勝手に消えた事に対する後悔故かと思っただが、それは不可抗力だ。抗いがたい力に対してそこまで氣に病むというのも可笑しな話だ。だとするならば、お前が必要以上にシャオに羽末ちゃんを重ねる理由はなんだ？」

「……………」

一刀の問いに章仁は何も答えない。

やはり章仁には何かがある。そう思った一刀は真摯に章仁を見つめつつ今一度問うた。

「沈黙は肯定ととるぞ。章仁、お前が何を抱えているかは知らんが、それは友人である俺にも言えないことか？」

「……………」

しかし、それでも章仁は答えようとはしない。

ここまで意固地になられては、流石の一刀とて手出しのしようがない。こうなれば、向こうから話しをしてくるまで待つしかないだ

る。

そう思った一刀は瞳を閉じて章仁に言ってやった。

「まあ、いい。言いたくないのなら聞かんよ。……さあ、今日はもう寝ろ」

それだけ言うと、一刀は弱くなった焚き火の中に薪をくべていく。新たにくべられた薪が火にあぶられ乾いた破裂音と共に火の粉が舞い散るのを見つめながら、遂に章仁は静かに口を開いた。

「……思い出したんだ」

「何を思い出したんだ、章仁？」

ようやく口を開いてくれた章仁の言葉に一刀は耳を傾ける。

一体章仁は何を思い出したのであるうか　そう思って彼の言葉に耳を貸す一刀に章仁が語ったことは俄には信じられないことだった。

「この世界に降り立ったとき、不意に思い出したんだよ！　羽未がもう死んでることに！！」

章仁の放った言葉に一刀の思考は一瞬停止する。

死んでいる？　誰が？　羽未？　それって　。

その言葉の意味を理解するところを理解した一刀は驚愕した。

「ま、待て！　言っている意味がわからないぞ、章仁。羽未ちゃんは俺達と一緒にフランチェスカに通っていたじゃないか？　こつちに来てからはどうかはわからないけど、それが何で死んでるって事に　」

生きている人間が死んでいる。
その矛盾を指摘する一刀だったが、章仁は沈痛な面持ちで首を大きく横に振った。

「違う、違うんだ！ あの娘は……あの娘は羽未じゃないんだ……」
「……どういうことだ？」

本当にどうということだろうか。

章仁の言っている事が余りにも唐突過ぎて理解が追いつかない。
しかし、一つだけ確かな事がある。それはこの事案が一刀の予想以上に章仁の心を蝕んでいるという事だ。

章仁はまるで刺さった刃物を抜いているかのような苦悶の表情を浮かべながらも、一刀から問いかけにポツリポツリと語ってくれた。
あの日に起こった事を。それは。

「羽未は……ずっと昔に交通事故にあって……死んでるんだよ……」
「莫迦なッ！ じゃあ、お前の妹は……あの羽未ちゃんは一体誰だ
って言うんだ!？」

その言葉に一刀は再び大きな声で叫んでしまった。
だって、そうだ。つい数ヶ月前までは普通に顔を合わせていた人間がもう死んでると言われて誰が納得できようか。

勢いの余り章仁の胸倉を掴み上げて問う一刀に対して、章仁の口から衝撃の事実が告げられる。

「あの娘は俺の妹じゃない……遠い親戚の娘 羽深ちゃんなんだ」

妹じゃなく、遠い親戚……しかも羽深って……。

一刀には一瞬、章仁が何を言っているのかわからなくなった。

「驚いただろ？ 羽末と羽深……名前の音が一緒なんだぜ」

呆然と自分を見続ける一刀に構わず、章仁は言葉を続けていく。

「羽深ちゃんの両親は早くに他界してな。それでウチが引き取るこ
とになってただけけど……何の因果か、それが羽末の交通事故と重
なっただよ」

かつて起こった忌まわしい事故。

幼い章仁の目の前で起こった惨劇は、彼の心に深い傷をつけた。
死とは縁遠い平和な世界で、しかも幼子の目の前で、家族の命が
理不尽に奪われる衝撃は如何ほどのものか……察するに余りある。

しかも悲劇はそこで終わらなかった。

惨劇が起こした悲劇はさらなる悲劇を生んだのである。

「当時の俺は心が幼かったんだろうな。羽末の死を受け入れられず、
新しい家族になるはずだった羽深ちゃんを羽末と勘違いしてただ
よ……ずっと！」

人間は受け入れがたい現実を前にすると、その真実を忘れてしま
う事があるらしい。

記憶の忘却。

幼い少年であった章仁の目の前で起こった事故は彼の心を壊すに
余りある威力を有していた。

だからこそ章仁は忘れた。目の前で起こった惨劇を。

己が心を守るために。

しかし、少年の心を守った優しい忘却は同時に第二の悲劇の始ま
りでもあった。

事故の惨劇自体は忘れることができたが、それでも変わらぬ現実
があった 羽末の死と言う現実である。

昨日と変わらぬ日常なのに、いたはずの妹がいない。

そこに生じた齟齬が閉じた記憶を呼び覚まし、幼い章仁に冷たい現実を突きつけるはずだった。

だがしかし、彼は幸運だった。

何故ならば、彼の元には死んだ羽未に瓜二つの羽深という少女が来たのだから。

かくして新たな家族となるはずだった羽深を妹の羽未と認識した章仁の心は救われた。

妹の死と家族になるはずだった少女の存在を忘れて……………。

「……………章仁」

「しかも、羽深ちゃんは俺の事を気遣って羽未をずっと演じ続けていてくれたんだ！俺の心を護るために！！」

そして記憶の忘却以上に章仁が悔いるのは自身の不甲斐なさだ。

自分を自分として見てくれない辛さは想像を絶する。

ここにいるはずなのに、だけどいない 人の存在を忘れ、消し去ると言う事は殺人と同意義だ。新たな家族の下で新たな人生を始めるはずだった羽深と言う少女を章仁は殺したのである。

そればかりか羽深と言う人格を殺された少女は健気にも新たな兄のために羽未と言う妹を演じ続けていてくれたのだ。

否定する事はできただろう。拒絶する事もできただろう。

自分は貴女の妹の羽未ではなく羽深だと。羽未は貴女の目の前で死んだのだと。

しかし彼女はそれをしなかった。

全ては章仁の心を護るために。一度失った家族をもう二度と失わないために。

「ひどい兄貴だよな……………妹が死んだ事を忘れて、新しい家族を新しい妹になるはずだった羽深ちゃんを、ちゃんと羽深ちゃんとし

て見れなかった……それなのに羽深ちゃんは、ずっと俺の心を護ってくれたんだぜ……」

年端も行かない少女にそんな重荷を押し付けて、今までのうのと生活してきた自分自身に対し殺意がこみ上げてくる。

かみ締めた唇が裂け、そこから血が滲み出るのも構わずに章仁は狂ったように頭を振ると一刀に向かって吼えた。

「それなのに！ ちゃんと思い出せたのに！ 羽未の死に向き合えるようになったのに！ 俺が謝るべき羽深ちゃんが、今までの事に對して俺が報いなきやならない羽深ちゃんが、ここにはいないんだよ一刀！！」

まるで血の涙を流さんばかりに章仁が上げるは魂の慟哭。

「今までの事を謝りたい……羽未じゃなく、羽深ちゃんとして接してあげたい……だから、だから　！！」

「羽深ちゃんに似ていたシャオを代わりに……って訳か」

償わなければならぬ罪があるのに償うべき相手がいない。

それこそが一刀の感じた違和感の正体　章仁の心の闇であった。

「こんな事、間違いだってわかってる！ シャオはシャオだ、羽深ちゃんでも羽未でもない……だけど！　なら俺はどうすればいいんだよ、一刀！！」

涙を流しながら一刀に縋る章仁の姿は見るも痛々しすぎる。

それだけ章仁の告白した心の闇は余りに根深いということだ。

羽未の死を忘れた過去の自分と、羽深に報いれない今の自分その両方が許せない。許される事を望まない。

そんな無限地獄ともいえる罪悪感に苛まれながらも章仁は同時に救いを求めた。

羽深と羽未に対する償えない罪への救いを孫尚香に見出したのである。

しかし、それが真の救いにならないことを章仁は理解していた。だからこそ、今彼は泣いているのだ。

暗く深いところで身を振るわせる章仁に対し、一刀が章仁を救ってやることは残念ながらできない。どこまで行っても、この問題は章仁本人の心の問題であるからだ。

だが、それでも道は示す事はできる。

助けを求めるように縋る章仁に一刀は諭すように言葉を発した。

「戦えばいい」

「えっ!？」

静かに紡がれた一刀の言葉に章仁は呆然と言葉を漏らすしかなかった。

その言葉の意味するところが理解できなかつたからだ。

未だ呆然と一刀を見つめる章仁に対し、一刀は力強い眼差しで章仁を見据えると言葉の続きを紡いだ。

「戦うんだよ章仁。お前と羽深ちゃんを引き裂いたこの世界と戦うんだ」

「世界と戦うって、どういう……」

章仁には一刀の言っている事がまるで理解できなかつた。

世界と戦うだなんて余りに唐突で突拍子もない話をされたところで何の助けにもなりはしない。章仁が欲しいのは明確な救いの道なのだから。

しかし、この唐突で突拍子のない理解の範疇を超えた一刀の言葉

こそが章仁が求めて止まない明確な救いへの道だった。

「簡単なことだ。原理がどうかかわらんが、俺たちのいた世界からコッチの世界に来たんだ。ならばその逆が出来ない道理はないだろう」

往路があれば復路もある　　そこまで言われれば流石の章仁も理解は出来る。

確かに一刀の示した道は章仁の救いになりえるだろう。章仁の心の闇は現代に帰りさえすれば晴れるのだから。

しかし、それでも必ず帰れるという保証はどこにもない。叶わぬ救いへの道を延々とただ歩まねばならないかもしれない。

ならば今まで章仁がそうしてきたように真なる救いにならぬと知りながらも他に救いの道を求めるか……その葛藤が章仁の中で渦巻く。

「それはそうだけど……」

僅かにためらいを見せる章仁に対し、一刀は挑戦的な笑みを湛え、と発破をかけるように言っちゃった。

「何だ、弱気だな章仁。お前はそのまま、羽深ちゃんと羽未ちゃんに謝れないままでもいいのか？」

「そんなはずないだろ！」

図らずも大声で反論した章仁自身、発した声の大きさに驚いた。

それと同時に気がつく。罪悪感に怯え、凍えていた心の奥底に暖かな火が灯っている事を。

章仁の表情が変わるのを見たのだろう。

一刀は頷きながら後一押しだけ、章仁の背中を押す。

「ならば何も迷うことはない。元の世界に戻る　それがお前の戦いなんだよ、章仁」

「俺の戦い」

「そうだ。人にはいつか、命を賭してでも戦わなければいけないときが来る……。お前のそれは正に今なんだよ」

心に灯った灯火は燃え上がり、章仁の胸に確かな輝きが戻る。

それは、今は小さくとも消えることのない希望の灯火だ

「……わかった。俺、戦うよ……世界と。だけど俺一人じゃ、この殺伐とした世界じゃ何も出来ない……。だから俺に力を貸してくれ」

その希望を胸に救いへの道を歩むことを章仁は決意したのだった。険しくとも道を歩む事を選んだ友の姿に一刀も満面の笑みで持つて応える。

「当然だ。お前に迫る刃は俺が尽く退けよう。その代わりに、俺の腹に迫る空腹はお前が退けてくれよ？」

そんな友からの心強い言葉をかみ締めた章仁は、ここで一つの可能性に気がついた。

「ありがとう、一刀……。だけど、ここに一刀がいるということはない」

「ああ。多分、及川のヤツもこっちに飛ばされてきている可能性は高い」

それは一刀も感じていた可能性。

あの場にいた全員がこの三国志の世界に來ていると言つ事。
そして、章仁がいたと言つ事は十中八九、及川もこの世界にいる
だろう。

ならば一刀たちの当面の目標は定まつた。

「殺しても死なない及川の事だからしぶとく生きているんだろうけど、放つておく訳にはいかないか」

「あんなんでも俺らの友達だからな」

こうして一刀と章仁の再会の夜はふけて言つたのであつた。

その頃のどこか。

「ぶえええつくしよいつ！」

街からも村からも遠く離れた人も訪れぬ荒野で一人の男が盛大なくしゃみをかましていた。

「うわツ!? もお、やめてよね! 汚ない!!」

そんな男のくしゃみを嫌そうに見つめる少女はいつか陳留で名を馳せようとした三姉妹の次女 張宝だ。

露骨に嫌そうな顔をする張宝に対し、男は調子のよさそうな笑みで詫びを入れた。

「おお。すまんなあ地和ちゃん。いやあ、なんや鼻の奥がこおーウ

ズウズつと来てな」

「大賢良師さん、風邪ですかあ？」

鼻をさする男を心配してか、三姉妹の長姉　張角が覗き込むようにして男を見る。

その張角の発言に三女の張梁ばかりか、常に勝気で先ほどは男のくしゃみを嫌っていた張宝までもが心配げな表情を見せた。

これを見るだけで、それだけ彼女達が彼を信頼しているのかが見えてくる。

それもそのはず。

この男は自分達三姉妹の恩人なのだから。

短い時間で、自分達をそこそこ売れる芸人から大陸屈指の歌い手まで引つ張りあげてくれた。

だからこそ彼女達は彼を尊敬の念を込めて大賢良師と呼ぶのだ。

もつとも、彼の強い希望で呼び名は《ぷろでゅーさー》なるモノになったが　まあ、それはどうでもいい事だ。

そんな彼女達を安心させるように大賢良師と呼ばれた男は三姉妹を安心させるように笑顔を見せながら手を振って見せた。

何事もない事をアピールする男に三姉妹の表情が和らぐが、それは時間の問題だった。

「いや、そういうのやあらへん。誰かがワシの噂でもしとるんやろ。グフフ。きつと美女、美少女、美少女のどれかに違いはない。グヒ、グヒ、グへへ」

顎に手をやり、眼鏡のレンズを輝かせながら不気味に笑い始めた男に、張宝と張梁はドン引きになる。

「うわゝ、相変わらずキモッ」

「はあ……。腕は確かなんだけどコレさえなければね……………」

短くても濃厚な時間を友に過ごし、師として彼に尊敬の念を抱くまでにはなつたが、それでも相容れないものはある。彼の変態性など正にそれだった。

「まあまあ。ちーちゃんもれんほーちゃんも、大賢良師だいけんりょうしさんのお陰で私達今までにないほど有名になれたんだから」

唯一彼の変態性に対し天然と言う耐性がある張角が妹達を諭す。思えば、この長姉の天然が緩衝材にならなければ張三姉妹は男についていく事はできなかつただろう。

張梁は初めて長姉の天然に心の中で感謝した。そして、此度も張角の天然が男の変態性が中和していく。

「……まあね。今日も大きな舞台を用意してもらつたしお客さんの入りも上々だし、感謝してる事はしてるんだけど……それでもやっぱりキモいのはキモい〜!!」

しかし、それでも彼女達は年頃の女の子。中和されるとはいえ、変態性を持つ者を好意的に見続けるのはやはり難しかった。

そんなこんなをしている内に、三姉妹と男の元に大きな歓声が聞こえてきた。

「どうやら時間らしい。」

「そう言ってる間に時間よ、姉さん達」

道からもはずれ、人も住まない一面の荒野。

しかし今夜だけは、この時だけは、不毛の大地がその様相を変える。

今日は《数え役萬　しすたあず》初の夜を徹して行う夜中上演だ。
真夜中だというのに会場には既に一万人を超えるファンが詰めか
け、開演を今か今かと待ちわびている。

舞台を前にした彼女達も幻想的な星光の下で行う初めてのステ
ージに胸を躍らせながら、舞台に向けてその足を踏み出した。

「よお〜しッ！　今日も《数え役萬　しすたあず》活動開始イッ！
」

「今日もちいの魅力で皆の心を鷲づかみよッ！」

「じゃあ、大賢良師ぶろでゅーさーさん行ってきます」

笑顔で舞台へと上がっていく張三姉妹に男も笑顔でサムズアップ
を掲げてみせた。

「おうッ！　今日もファンの連中が足腰立てへんようになるまでイ
テこまして来い！！」

そして舞台の幕が上がる。

ほわッ、ほわッ、ほわあああああああッ！！

張三姉妹が舞台袖から舞台上がると同時に、まるで天地が動く
かのような轟音が男の耳に届いた。

観客達の大歓声だ。

何時も以上に熱気をはらんだ大歓声を聞きながら、大賢良師ぶろでゅーさーの男
及川祐は誰もいなくなった舞台袖で大きく頭を抱えてその場に
座り込んだ。

「……………はあ……………ホンマに連中の足腰立てへんようにならんかなあ…
…アイドルグループ作ったら黄巾党になってしまいましたって、ど

この笑えん冗談やつちゆうねん。大誤算もいいとこやで、ホンマにかとって、ワシが蒔いた種なんやし一人で夜逃げって訳にもいかんしなあ……ホンマ、どないしよう……」

どこで何を間違ったのだろうか。

未来の知識を使って芸能プロデューサーを目論んだ事か。目をつけた女の子達が張角、張宝、張梁だったと言う事か。そもそもこんな世界に紛れ込んでしまった事か……。

静かに語られた及川の苦悩は誰に聞こえる事もなく盛大な歓声の中に埋もれて消えたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8244n/>

真・恋姫†無双～花一刀伝～

2010年11月10日11時00分発行